

西29号墓（第152図）

墓域のやや南に位置する。

西28号墓の西側に位置する。

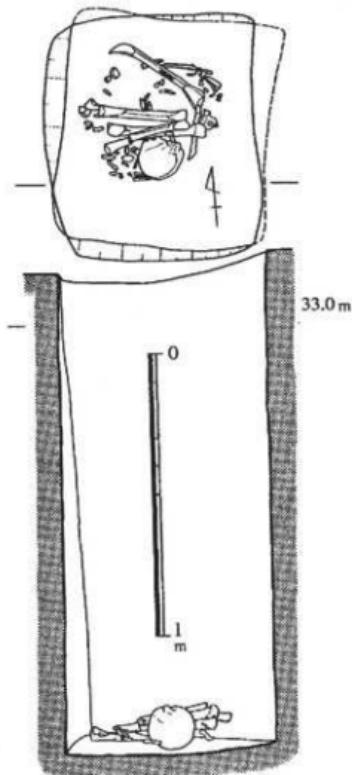
平面は正方形の素掘り土壙である。大きさはやや大きく、長辺が83cm、短辺75cmを測る。深さは深く、検出面から180cmを測る。主軸の方向はN-3-Wである。ほぼ垂直に掘り込まれている。土壙内からは人骨が1体が出土した。

人骨は老年後半～老年の男性と考えられる。仰臥坐位でWを向いている。

西30号墓（第153図）

墓域中央に位置する。平面形は小判形の素掘り土壙である。大きさはやや小さく、長辺が104cm、短辺57cmを測る。深さはやや浅く、検出面から42cmを測る。主軸の方向はNである。土壙内からは人骨なかったが、錢貨6が出土している。

銭貨（153図） 銅製・鉄製。土壙底面の東端で出土した。いわゆる六道錢として納入されたものである。内訳は銅錢5枚、鉄

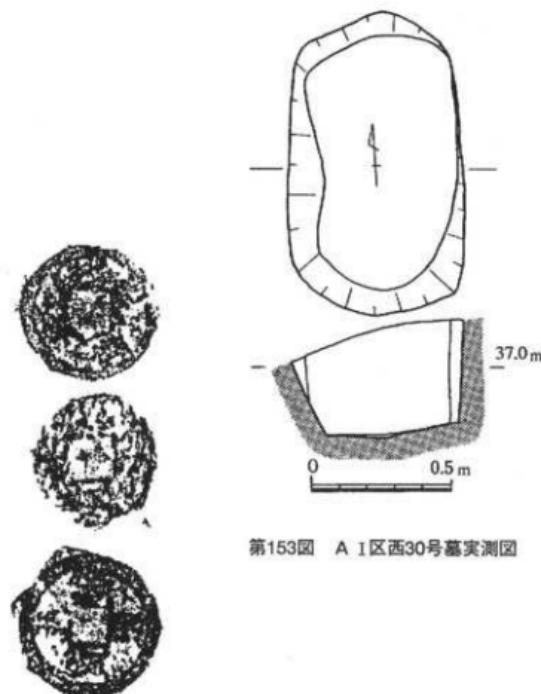


第152図 A1区西29号墓実測図

錢1枚である。銅錢は渡来
錢である天佑通宝1枚、嘉
祐元寶1枚のほかは判読不
明が含まれる。全体的に
残存状況は悪い。寛永通
宝は2枚とも残存状況は
良好である。1枚は湯ま
わりが悪い。もう1枚は
いわゆる“マ”通しであ
る。

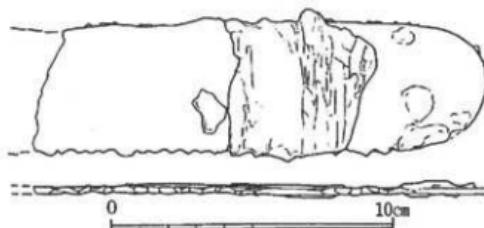
西31号墓（第156図）
墓域中央のやや北に位置
する。平面は長方形の素
掘り土壙である。大きさ
は大きく、長辺が100cm、
短辺97cmを測る。深さは
やや深く、検出面から165
cmを測る。主軸の方向は
N-18°-Eである。底
面からは人骨1体と、鋸
1、土師質器皿1が出
土している。
人骨は土壙底面の西壁よ
りにまとまっていた。熟
年の男性と考えられる。
仰臥坐位でS-15°-W
を向いている。

鋸（154図）片歯の
鋸である。幅4.8cm、残存
長16cm、厚さ0.2cmを測る。

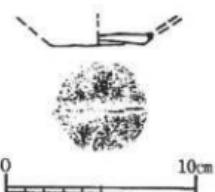


第153図 A I区西30号墓実測図

第154図 A I区西30号墓出土鋸写影



第155図 A I区西31号墓出土遺物実測図



第157図 A1区西31号墓出土遺物実測図
先端は丸い作りになっており、先端にいくほど歯の目が粗くなる。錆化が著しいが、木質が付着している。

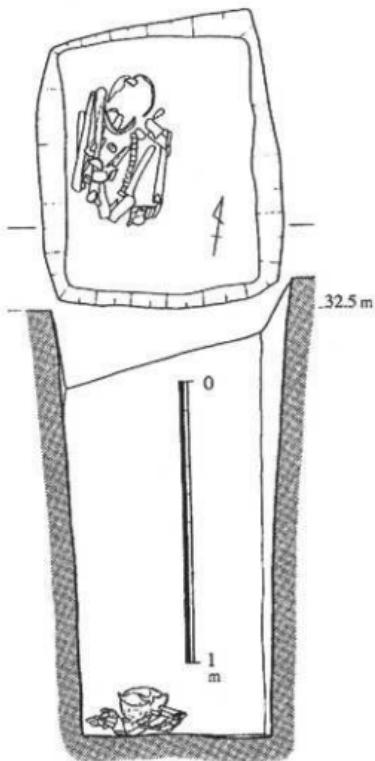
土師質土器皿（155図）底部片である。
壙底中央、寛骨の下から出土した。底径4.
9cm、残存高0.6cmを測る。色調は淡黃
色を呈す。底部は回転糸切りによって、
切り離されている。

西32号墓（第157図） 墓域の南西端に
位置する。平面は隅丸長方形の素掘り土壤
である。大きさは大きく、長辺が106cm、短
辺78cmを測る。深さは浅く、検出面から54
cmを測る。主軸の方向はNである。土壤内
からは人骨及び遺物等は出土していない。

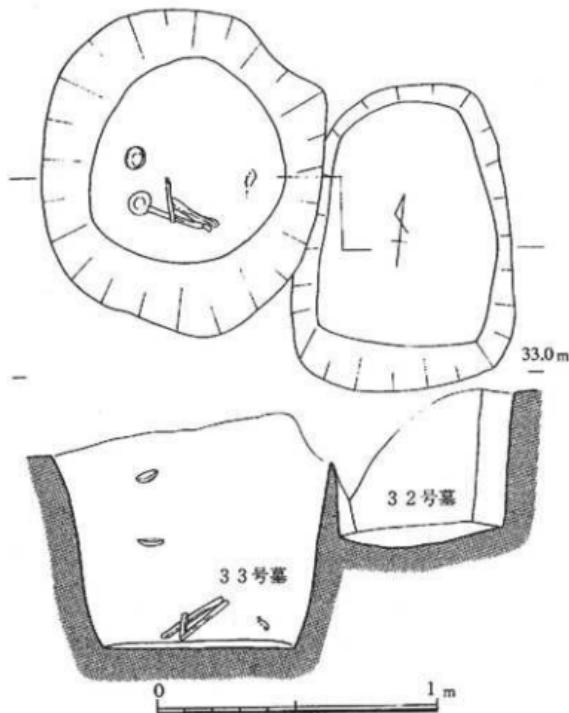
西33号墓（第157図） 墓域の南西端に
位置する。平面は円形の素掘り土壤である。
大きさはやや大きく、長辺が117cm、短辺
100cmを測る。深さはやや浅く、検出面から
85cmを測る。底面からは人骨1体と土師質
土器2が出土している。

人骨は熟年の女性をうかがわせる。残存状況は非常にわるく埋葬時の姿勢は不明である。

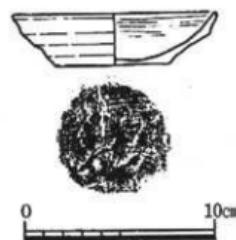
土師質土器皿（第158図） 壙底から40~70cmの高さで出土した。口径10.5cm、底径5.9cm、器高
2.9cmを測る。色調は淡赤黄色を呈す。底部は回転糸切りによって、切り離されている。



第156図 A1区西31号墓実測図



第158図 A I区西32・33号墓実測図



第159図 A I区西33号墓出土遺物実測図

西34号墓（第159図） 墓域南西に位置する。平面は正方形の素掘り土壤である。大きさはやや大きく、長辺が117cm、短辺100cmを測る。深さはやや浅く、検出面から85cmを測る。底面からは人骨1体と土師質土器2・銭貨が出土している。人骨は小児骨と考えられる。残存状況は非常に悪く埋葬時の姿勢は不明である。

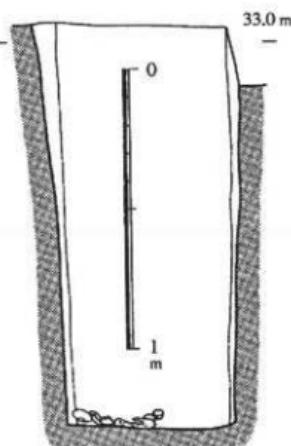
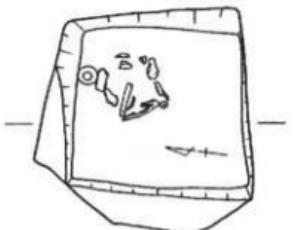


第161図 A I 区西34号墓出土遺物実測図

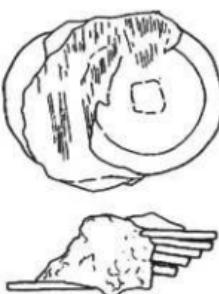
土師質土器皿（第160図-1） 塚底北端から出土した。口径8.7cm、底径4.0cm、器高1.7cmを測る。色調は淡橙色を呈す。底部は回転糸切りによって、切り離されている。

銭貨（第160図-2） 銅製・鉄製。塚底中央から出土した。いわゆる六道銭として納入されたものであり、寛永通宝である。内訳は銅銭2枚と鉄銭3枚である。銅銭のうち1枚はス寶銭であることが確認できる。

西35号墓（第161図） 墓域のやや南に位置する。平面は円形の素掘り土壤である。大きさは大きく、長辺が120cm、短辺85cmを測る。深さはやや浅く、検出面から75cmを測る。土壤内からは人骨及び遺物等は出土していない。

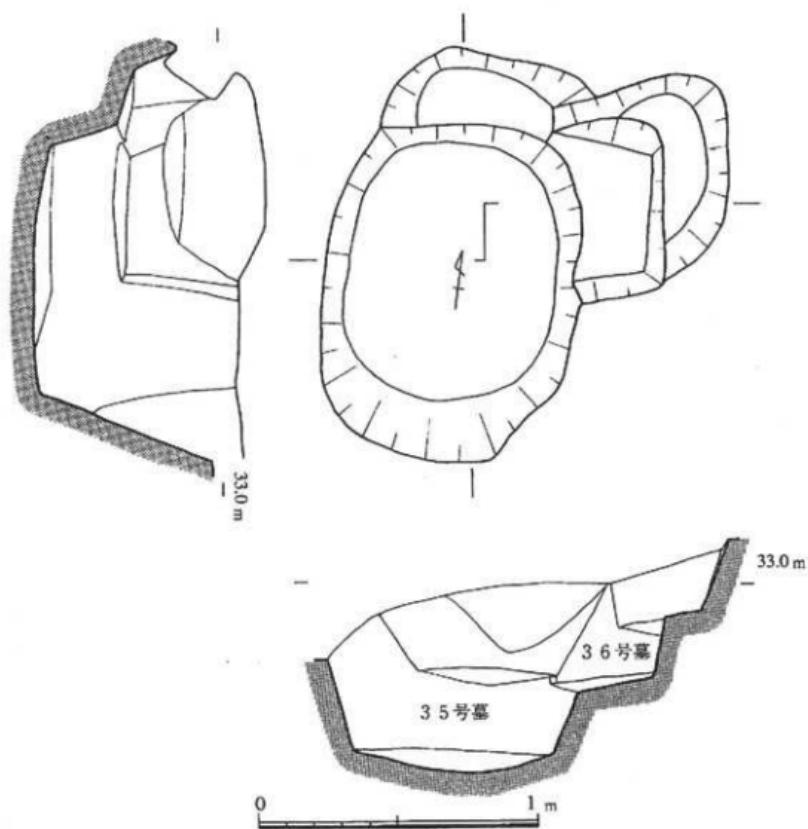


第160図 A I 区西34号墓実測図



第162図 A I 区西34号墓出土銭拓影

西36号墓（第161図） 墓域のやや南に位置する。平面形は一辺60cmの方形の素掘り土壙である。深さは非常に浅く、検出面から36cmを測る。主軸の方向はN-7°-Eである。土壙内からは人骨及び遺物等は出土していない。



第163図 A 1区西35・36号墓実測図

西37号墓（第162図） 墓域のやや南に位置する。平面はほぼ正方形の素掘り土壙である。

大きさは大きく、長辺が90cm、短辺80cmを測る。深さは最も深く、検出面から210cmを測る。主軸の方向はN-7°-Eである。上場より下場のほうが大きいため、各壁は内傾している。底面には中央には径38cm、深さ30cmの穴が掘り込んである。底面からは人骨1体と、銭貨3、鉄1、土師質土器3、釘1が出土している。

人骨は成人の男性と考えられる。正坐位でNを向いている。

銭貨（第163図） 銅製。壇底中央から出土した。

いわゆる六道銭として納入されたものであり、寛永通宝である。一枚はハ寶銭であることが確認できる。

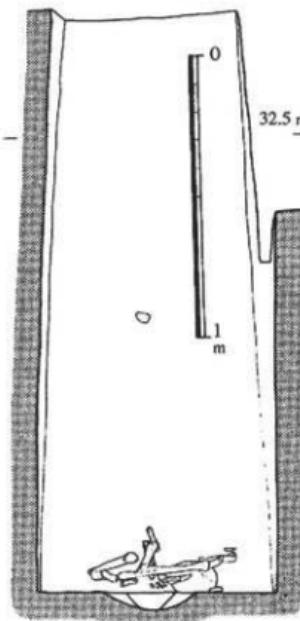
鉄（第164図-4） 壇底中央から出土した。鉄製のにぎり鉄である。

先端が欠損しているが、残存長11.0cmを測る。支点の折り曲げ部の断面は幅7mm、厚さ4mmの長方形である。

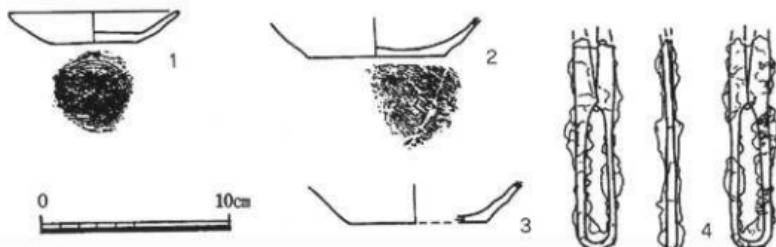
木質および目の粗い繊維が付着していることから、目の粗い布袋に入れて遺体のそばに副葬されたものと推定される。

土師質土器（第164図-1~3）

壇底北東から1点、中央頭蓋骨の上から出土した。1は口径9.2cm、底径



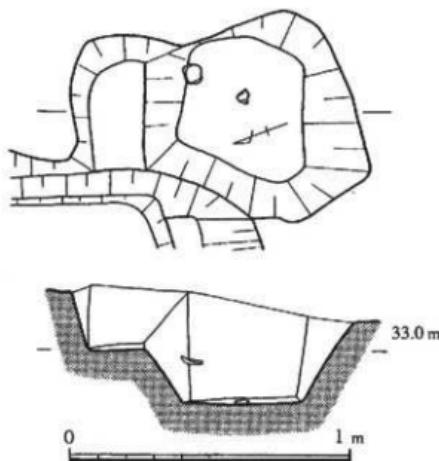
第164図 A T 区西37号墓実測図・出土銭拓影



第165図 A I区西37号墓出土遺物実測図

4.3cm、器高1.5cmを測る。色調は赤褐色を呈す。底部は回転糸切りによって、切り離されている。2は底部片である。厚さ0.3cmを測る。底部は回転糸切りによって、切り離されている。焼成は良好である。3は口縁部片である。器高2.0cmを測る。焼成は良好。黄褐色を呈す。底部は回転糸切りによって、切り離されている。焼成は良好である。

西38号墓（第165図） 墓域のやや南に位置する。平面は正方形の素掘り土壙である。大きさはやや小さく、長辺が70cm、短辺68cmを測る。深さは浅く、検出面から46cmを測る。主軸の方向はN

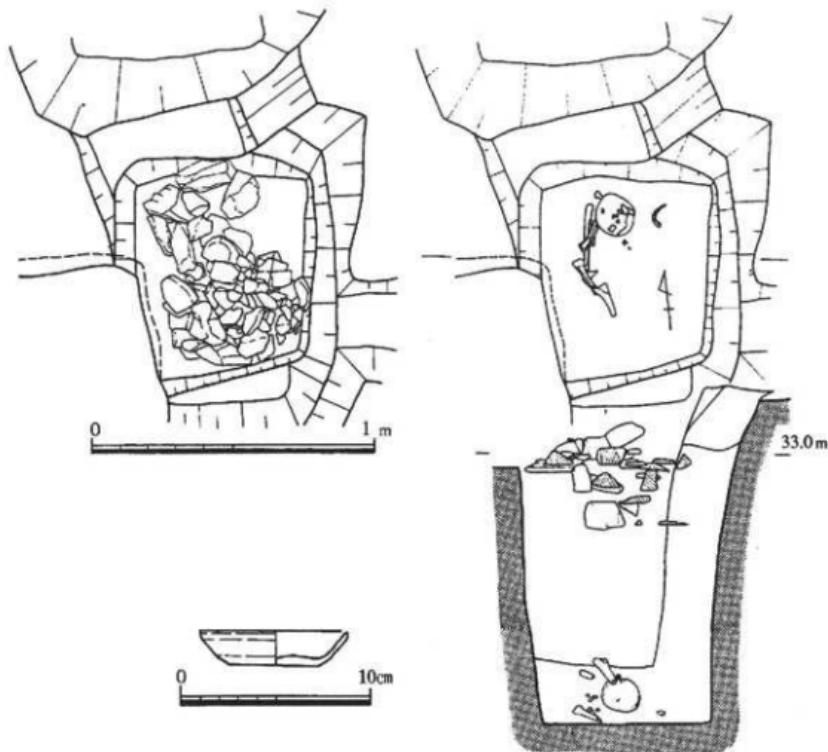


第166図 A I区西38号墓実測図

—33°—Eである。掘り込み角度は緩やかである。土壌内からは人骨1体と、土師質土器1が壙底から16cmの高さ、北東側から出土した。

人骨は小児骨であった。残存状況が非常に悪く、性別、埋葬時の体勢などは不明である。

西39号墓（第166図） 墓域のやや南に位置する。平面は正方形の素掘り土壙である。大きさはやや大きく、長辺が80cm、短辺80cmを測る。深さはやや深く、検出面から120cmを測る。主軸の方



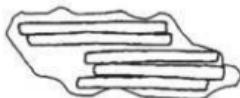
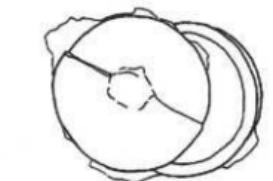
第167図 A I 区西39号墓実測図・39号墓出土遺物実測図

向はN-8°-Eである。土壤検出面の高さからレンズ状に拳大の角礫が37kg出土した。土壤内からは人骨1体と、土師質土器皿1、銭貨5、釘6が出土している。

人骨は土壤のやや北よりで出土した。老年の女性と推定される。立膝坐位でWに向いている。

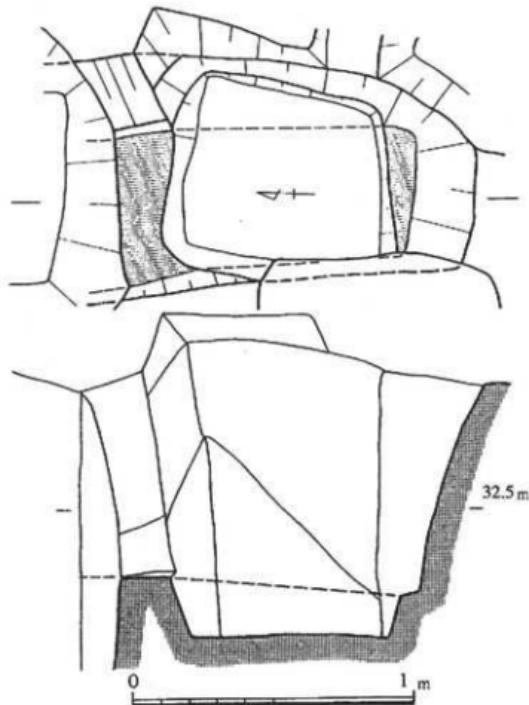
銭貨（第168図） 銅製・鉄製。壙底の北側、頭蓋骨の下から出土した。いわゆる六道銭として納入されたものであり、寛永通宝である。内訳は銅銭1枚と鉄銭4枚である。

全体が鎧で覆われ判読は不明である。



第168図 A I区西39号墓出土遺物実測図

土師質土器皿（第167図） 大きさは口径7.8cm、底径4.6cm 器高1.7cmを測り、色調は淡黄赤色を呈す。水挽きにより成形され、回転糸切り技法により切り離されている。

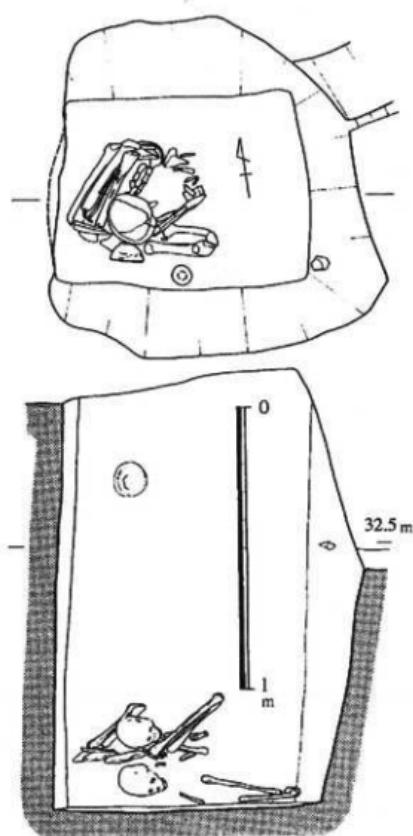


第169図 A I区西40号墓実測図

西40号墓（第169図） 墓域のやや南に位置する。平面は長方形の素掘り土壙で、主軸方位はNである。この土壙については西39号墓、西43号墓との重複がみとめられた。西39号墓に伴う疊の体積に擾乱が見られないことから、西39号墓（古）～西40号墓（新）という関係である。全長130cm以上、幅80cmを測る。深さは比較的浅く、検出面から90cmを測る。壙底の大きさは長辺が110cm、短辺40cmを測る。人骨及び遺物は出土しなかった。他の土壙と形状が極端に異なることから近世の土壙でない可能性がある。

西41号墓（第170図） 墓域のほぼ中央に位置する。西39号墓と西42号墓に挟まる形で掘り込まれている。平面は長方形の素掘り土壙である。上縁の大きさは比較的大きく、長辺が120cm、短辺110cmを測る。深さは比較的深く、検出面から150cmを測る。壙底の大きさは長辺が80cm、短辺65cmを測る。主軸方位はN12°Eである。この土壙については西40号墓との重複がみとめられた。壙底からは人骨2体と、碗1、土師質土器2、銭貨1、釘2、煙管2が出土している。

人骨は土壙のやや北よりで2体が重なる形で出土した。上の入骨の残存状態はきわめて良好で、熟年～老年の男性と推定される。埋葬形態は仰臥坐位で、頭位はN-50°～Wの方向となっていた。頸骨半分が欠損しており、割れ口は鋭利な刃物で切断された可能性が



第170図 A I区西41号墓実測図

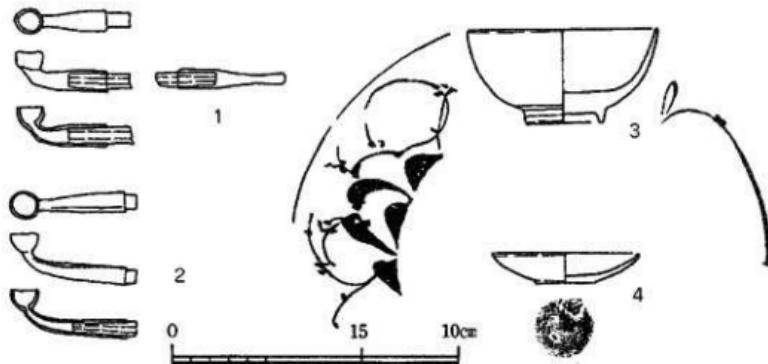
ある。下の人骨は残存状況は悪いが、熟年の女性とうかがわれる。埋葬形態は仰臥坐位で、頭位はS-25°-Eを向いていた。

煙管(第171図-1~2)銅製。上の人骨の頭蓋骨の下から出土した。1は首部の金具は長さ4.7cm、火皿の口径1.4cm、羅字挿入口の口径1.1cmとなっている。脂返し部分は湾曲が小さい。吸口側の金具は長さ5.5cm、羅字挿入口の口径1.1cm、吸口の端部の口径0.6cmを測る。布が付着している。羅字には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が認められる。

がふいている。吸口には縞模様の編織維が付着している。雁首内には黒色のタール状の付着物がある。2は首部の金具は長さ4.7cm、火皿の口径1.4cm、羅字挿入口の口径1.1cmとなっている。脂返し部分は比較的細い。羅字には竹が用いられている。脂返し部分は湾曲が小さい。火皿内にはタール状の付着物が認められる。

碗(第171図-3)磁器。検出面から、30cm下の高さで出土した。口径10.0cm、底径4.0cm、器高5.0cmを測るもので、内湾する体部を持つ。体部には花木をあしらった文様、高台には横線が3条描かれている。色調は体部が灰白色で、文様は緑灰色~灰色を呈する。18世紀前半の肥前系磁器と考えられる。表採遺物の中に非常に類似したものがある。口縁部は2か所打ちか欠けている。

土師質土器皿(第171図-4) 上の人骨と同じ高さ、土壤の西側から出土した。口径7.6cm、底



第171図 A I 区西41号墓出土遺物実測図

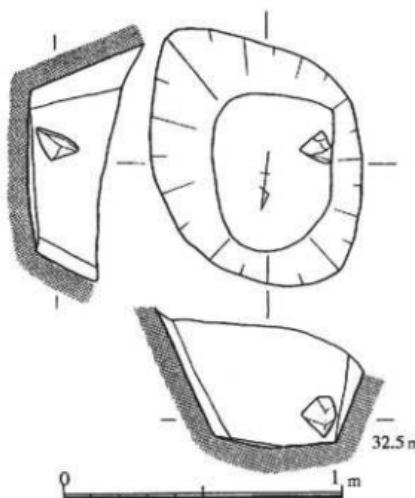
径3.1cm、器高1.5cmを測るもので、やや内湾する体部をもち、口縁端部は薄くなっている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡白黄色である。

錢貨 銅製。下の人骨の頭蓋骨の横から出土した。いわゆる六道錢として納入されたもので、寛永通宝である。ハ寶錢である。

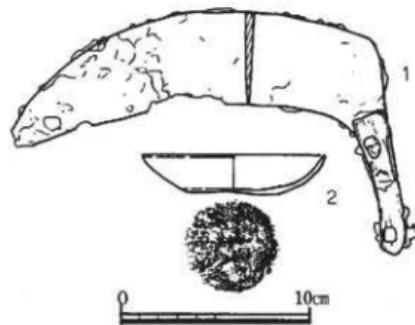
西42号墓（第172図） 墓域のほぼ中央に位置する。南側で西41号墓と隣接する形で掘り込まれている。

平面形椭円形の素掘りの土壙である。大きさはやや小さく、長辺が83cm、短辺75cmを測る。深さはやや浅く、検出面から50cmを測る。壙底の大きさは長辺が50cm、短辺45cmを測る。主軸の方向はN-7°-Wである。土壙内からは人骨出土しなかったが、疊1が出土した。疊は底面から10cm上から出土しており、大きさは拳大である。

西43号墓（第174図） 墓域の中央に位置する。北側で西44号墓、西側で西50号墓と隣接する形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさはやや大きく、長辺が100cm、短辺82cmを測る。深さはやや深く、検出面から155cmを測る。壙底の大きさは長辺が66cm、短辺63cmを測る。主軸の方向はN-7°-Eである。壙底からは人骨1体と、疊1、土師質土器皿1が出土している。人骨は土壙の中央、底面の少し



第172図 A I区西42号墓実測図



第173図 A I区西43号墓出土遺物実測図

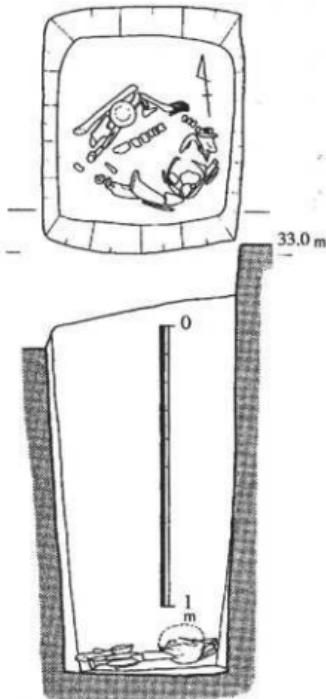
上で出土した。残存状態は良好である。壮年前半女性と考えられる。

仰臥膝屈位でN-55°-Eの方向を向いている。

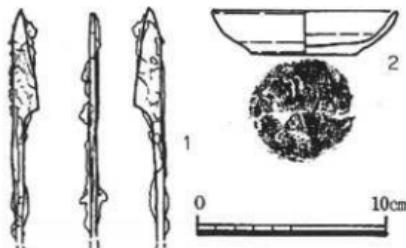
鎌(第173図-1) 鉄製。頭蓋骨付近から出土した。ほぼ完形である。刃部長40cm、幅9.6cm、茎長15cm、幅2.4cmを測る。刃は一部打ちかかれている。

土師質土器皿(第173図-2)
土壤の中央、大腿骨の上から出土した。口径9.6cm、底径4.9cm、器高2.0cmを測るもので、やや内湾する体部をもち、口縁端部は丸くおさめている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で外面とも淡赤黄色である。

西44号墓(第176図) 墓域の中央に位置する。南側で西43号墓、西側で西51号墓と隣接する形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壤である。大きさはやや大きく、長辺が96cm、短辺73cmを測る。深さはやや深く、検出面から125cmを測る。壤底の大きさは長辺が72cm、短辺70cmを測る。主軸の方向はN83°



第174図 A1区西43号墓実測図



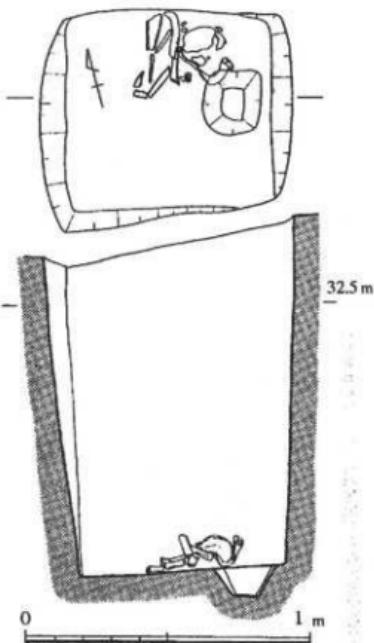
第175図 A1区西44号墓出土遺物実測図

Wである。底面には東側には径20cm、深さ10cmの平面方形、断面逆台形の穴が掘り込んである。土壙内からは人骨1体と和鉄1、土師質土器皿1が出土している。

人骨は土壙の北より、底面の少し上で出土した。残存状態は悪い。熟年女性をうかがわせる。立膝坐位でWの方向を向いている。

和鉄（第175図-1） 鉄製。いわゆる握り鉄で、細い鉄板をU字形に曲げて握りとし、両端に向内する刃を施したものである。この和鉄は半分が欠損している。残存長は24.2cm、刃部長は5.3cmである。刃の部分に木質、握り部分に紐状の付着物がみられる。

土師質土器皿 第(171図-2) 口径9.7cm、底径5.5cm、器高2.2cmを測るもので、やや内溝する体部をもち、口縁端部は丸くおさめている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡赤黄色である。



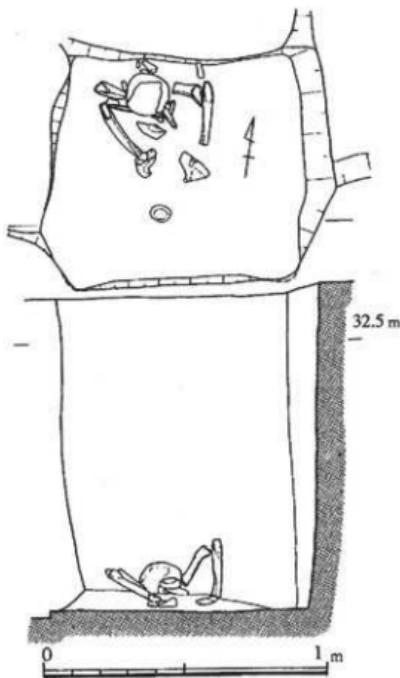
第176図 A1区西44号墓実測図

西45号墓（第177図） 墓域の南西端に位置する。平面正方形の素掘りの土壙である。北を西54号墓に、西46号墓と西57号墓に東西を挟まれる形で掘り込まれている。大きさはやや大きく、長辺が96cm、短辺73cmを測る。深さはやや深く、検出面から125cmを測る。各壁はほぼ垂直にほりこまれている。壙底の大きさは長辺が80cm、短辺75cmを測る。主軸の方向はN-83°-Wである。この土壙は西46号墓、西57号墓と重複しているが前後関係を明らかにするに至らなかった。壙底からは人骨1体と、鐵貨1、土師質土器皿1が出土している。人骨は土壙の北より、底面の少し上で出土

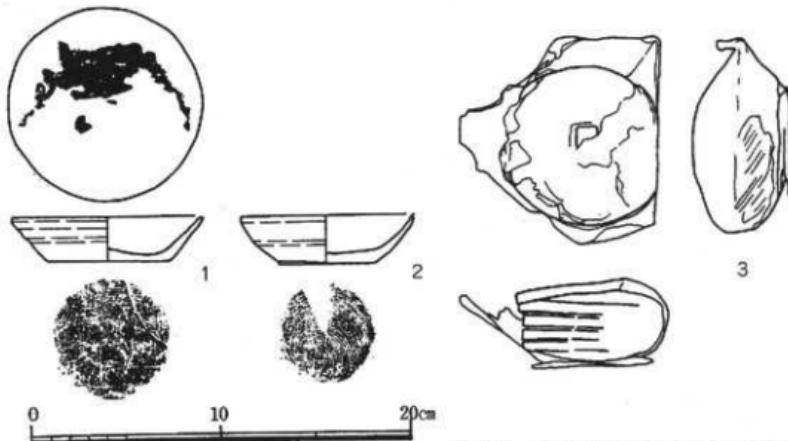
した。熟年前半の男性と思われる。立膝坐位で
N40°Wの方位に向いている。

銭貨(第178図-3)銅製・鉄製。5枚鋸つい
て出土した。いわゆる六道鏡として納入された
もので、寛永通宝である。銅錢と鐵錢があるこ
とはわかるが、鋸化が著しく内訳は不明である。
革状のもので覆われている様子である。

土師質土器皿(第171図-1~2)1は口径10.1
cm、底径6.5 cm、器高2.3 cmを測るもので、真っ
直ぐのびる体部をもち、口縁端部は丸くおさめ
ている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられ
る。焼成は良好で内外面とも淡黄色である。2
は口径9.0 cm、底径5.0 cm、器高2.5 cmを測るもの
で、やや内湾する体部をもち、口縁端部はすぼ
まっている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみ
られる。焼成は良好で内外面とも淡黄色である。



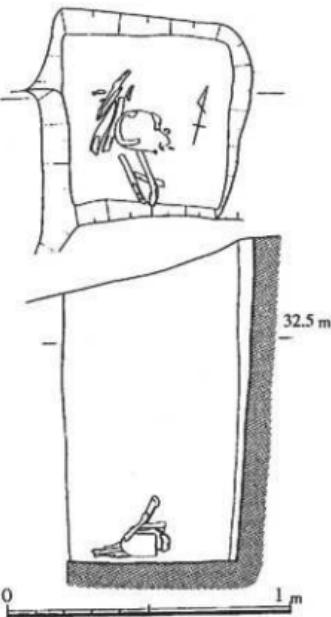
第177図 A I 区西45号墓実測図



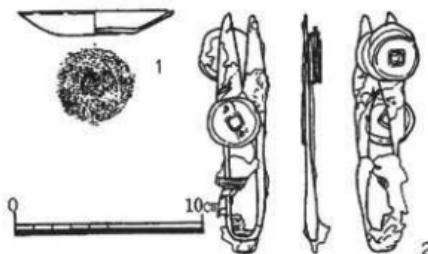
第178図 A I 区西45号墓出土遺物実測図

西46号墓（第179図） 墓域の南西端に位置する。西35号墓と西45号墓に東西を挟まれる形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさはやや大きく、長辺が90cm、短辺80cmを測る。深さは比較的深く、検出面から115cmを測る。各壁はほぼ垂直にほりこまれている。主軸の方向はN-14°-Wである。土壙内からは人骨1体と、鉄1、釘3、銭貨4、土師質土器皿1が出土している。人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。壮年女性と推察される。仰臥坐位でS-45°-Wの方向を向いている。

鉄（第180-1図）鉄製のにぎり鉄である。ほぼ完形で、全



第179図 A I 区西46号墓実測図



第180図 A I 区西46号墓出土遺物実測図

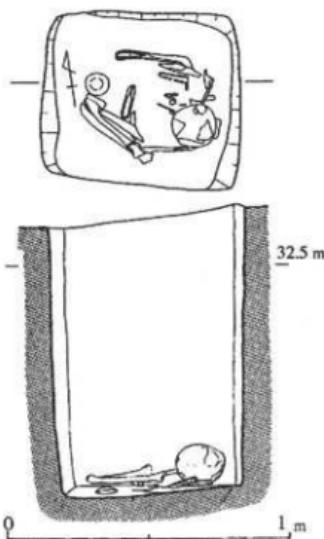
長は12.6cm程度、刃部長4.3cmを測る。視点の折り曲げ部の断面は幅5mmの正方形である。全体に錆がついているが、残りは良好である。片面には木質、もう1面には布が付着している。両面に銭貨が付着している。目の粗い布袋に入れて遺体のそばに副葬されたものと推定される。

銭貨（第180図-2）銅製。鉄に付着して6枚出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳はス寶銭1枚、判読不明が5枚である。

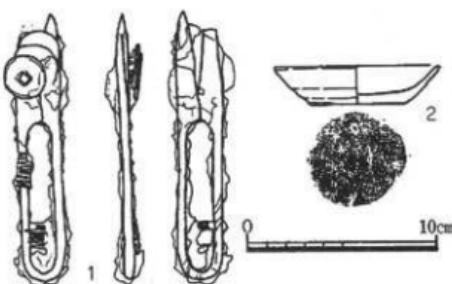
土師質土器皿（第180図-1）口径8.2cm、底径4.1cm、器高1.2cmを測る。底部裏面にはかすかに回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも茶褐色である。

西47号墓（第182図） 墓域のやや西に位置する。北側で西48号墓、西側で西58号墓と隣接する形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壤である。大きさは比較的小小さく、長辺が77cm、短辺65cmを測る。深さは比較的深く、検出面から100cmを測る。各壁はほぼ垂直にほりこまれている。主軸の方向はN-7°-Eである。土壤内からは人骨2体と、鉄1、銭貨4、櫛、土師質土器皿1が出土している。

人骨は土壤の中央、底面の少し上で出土した。壮年女性と思われる。仰臥坐位でN55°Wの方向に向いている。もう1体は小児のものである。



第182図 A 1区西47号墓実測図



第181図 A 1区西47号墓出土遺物実測図

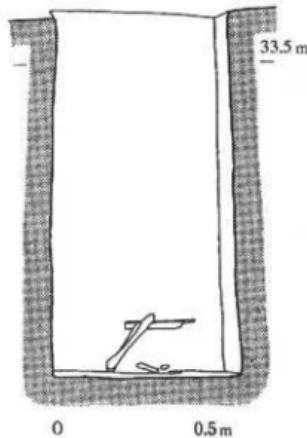
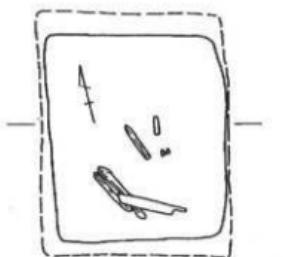
鉄（第181図-1） 鉄製のにぎり鉄である。部分的に欠損しているが、全長は14cm程度、刃部長5.7cmを測る。視点の折り曲げ部の断面は幅5mmの正方形である。片面には木質が、反対には銭貨との間に櫛の歯が挟まって付着している。

銭貨（第181図-1） 銅製・鉄製。鉄に付着して3枚出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。判読不明であるが、銅銭と鉄銭がある。

土師質土器(第181図-2) 墓底やや西よりで出土した。口径8.8cm、底径4.9cm、器高2.0cmを測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄色である。

西48号墓（第184図） 墓域のやや西に位置する。南側で西47号墓と隣接する形で掘り込まれて
いる。平面は正方形の土壌である。大き
さは比較的小さく、長さが72cm、短径63cm
を測る。深さは比較的深く、検出面から
130cmを測る。下場より上場が小さいため、
各壁は内傾している。検出面では疊が70kg
出土した。主軸の方向はN-10°-Eである。
底面には一辺20cm深さ10cm断面逆台形
の穴が掘り込まれている。土壌内からは人
骨1体と、包丁1が出土している。人骨は
残存状況がわるく詳細は不明であるが、熟
年～老年で性別は不明である。

包丁(第183図) 土壌のやや南側、人骨の
上から出土した。全長22.2cm、幅4.
2cmを測る。



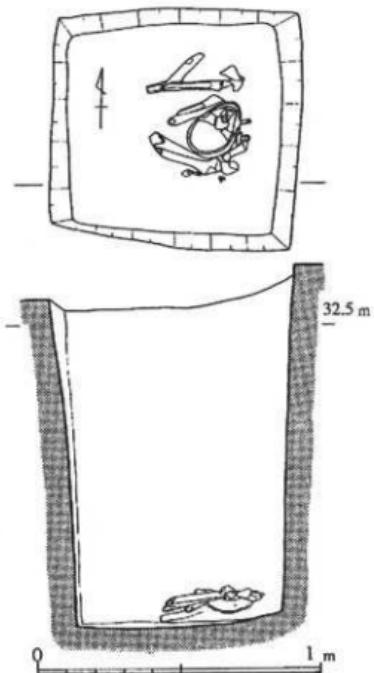
第183図 A 1区西48号墓出土遺物実測図

第184図 A 1区西48号墓実測図

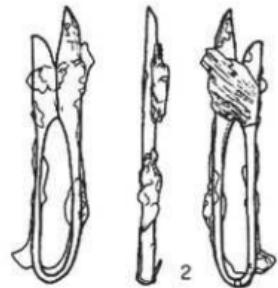
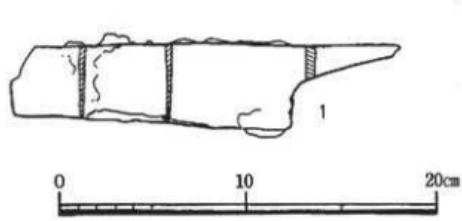
西49号墓（第185図） 墓域のやや西に位置する。北側で西50号墓と隣接する形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壌である。大きさは比較的大きく、長さが90cm、短径89cmを測る。深さは比較的深く、検出面から130cmを測る。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。主軸の方向はN-7.6°-Wである。土壌内からは人骨1体と、包丁1、鉄1、土師質土器皿が出土している。人骨は土壌の中央、底面の少し上で出土した。熟年女性と推察される。仰臥坐位でWの方向を向いている。

包丁(第185図) 土壌のやや北側、人骨の上から出土した。全長20.7cm、幅4.5cmを測る。刃がぶれた状態である。

鉄(第186図-2) 土壌の中央、頭蓋骨の上から出土した。鉄製のにぎり鉄である。部分的に欠損しているが、全長は14.5cm、刃部長6cmを測る。視点の折り曲げ部の断面は幅5mm、厚さ2mmの長方形である。木質が付着していることから木棺に入れられていたものと推定される。



第185図 A I区西49号墓実測図



第186図 A I区西49号墓出土遺物実測図

西50号墓（第187図） 墓域の中央やや西に位置する。

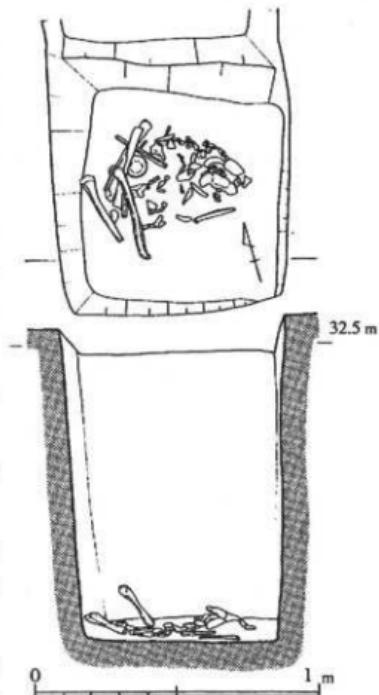
東—西43号墓、西—西59号墓、北—西51号墓、南—西49号墓に四方を囲まれる形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壤である。大きさは比較的大きく、長さが90cm、短径89cmを測る。深さは比較的深く、検出面から130cmを測る。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。主軸の方向はN—22°—Eである。土壤内からは人骨1体と、鎌1・鶴1・土師質土器皿、銭貨が出土している。人骨は土壤の中央、底面の少し上で出土した。熟年～老年女性と推察される。仰臥坐位でS—70°—Wの方向を向いている。

鎌(第187図-1)先端を欠損している。残存長14cmをはかる。目釘が残っている。

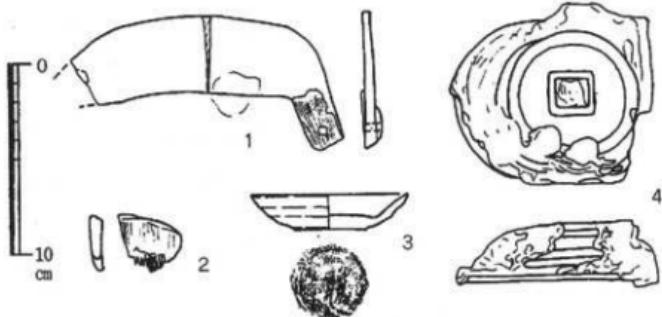
櫛(第187図-2)横櫛の一部である。乾燥して変形している。

銭貨(第187図-4)銅製・鉄製。6枚が鎧で固まって出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は銅銭5と鉄銭1である。

土師質土器皿(第187図-3)壙底中央から出土した。口径8.4cm、底径3.7cm、器高1.8cmを測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも赤黄色である。



第187図 A1区西50号墓実測図



第188図 A1区西50号墓出土遺物実測図

西51号墓（第189図） 墓域の中央やや西に位置する。東—西44号墓、西—西56号墓、北—西53号墓、南—西50号墓に四方を囲まれる形で掘り込まれている。平面正方形の素掘りの土壙である。

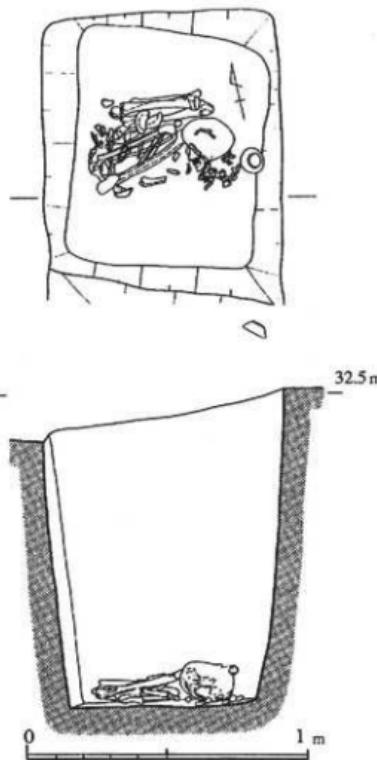
大きさは比較的大きく、長さが90cm、短径89cmを測る。深さは比較的深く、検出面から115cmを測る。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

主軸の方向はN—22°—Eである。土壙内からは人骨2体と、鉄1・煙管1・土師質土器皿、燧金、燧石が出土している。

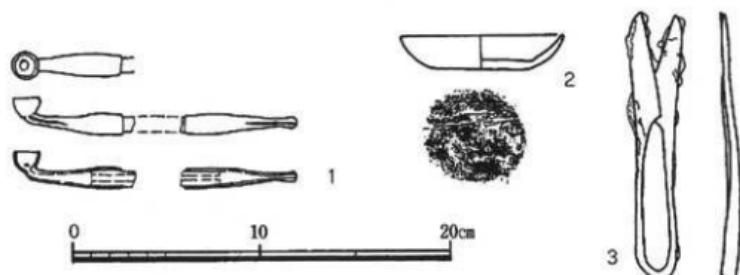
人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。

熟年女性と推察される。仰臥坐位でN—75°—Wの方向を向いている。もう1体の性別は不明であるが、成人のものでN—75°—Wの方向を向いている。

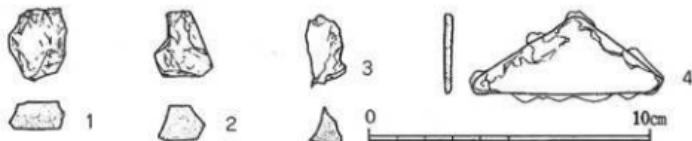
鉄(第190図-3) 土壙の中央、



第189図 A I区西51号墓実測図



第190図 A I区西51号墓出土遺物実測図 (1)



第191図 A 区西51号墓出土遺物実測図（2）

大腿骨の下で出土した。鉄製のにぎり鉄である。完形で、全長は13.9cm、刃部長5.5cmを測る。支点の折り曲げ部の断面は幅9mm、厚さ3mmの半円形である。鋳造が著しくようやく形態をたもっている。

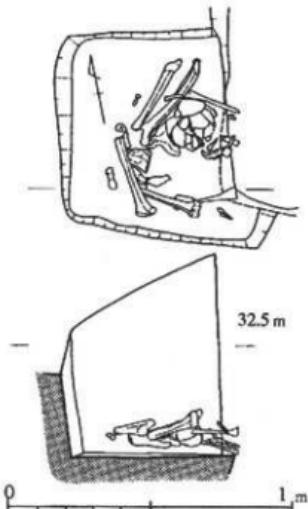
燧石（第191図-1～3）土壌の中央、大腿骨の下で出土した。1は径2.5cmを測る。色調は淡赤色を呈す。鉄鏽・白色の皮が付着している。2は径2.3cmを測る。色調は淡黄色を呈す。3は径2.6cmを測る。色調は淡黄赤色を呈す。1～3は原石の表皮に近い部分である。

燧金（第191図-4）土壌の中央、大腿骨の下で出土した。長さ6.5cmの厚さ2mmの三角形をしている。残存状況は良好で、三角形の単辺側に皮状の付着物が認められる。

煙管（第190図-1）土壌の中央、大腿骨の下で出土した。火皿側の金具は長さ5.7cm、火皿の口径1.4cm、羅字挿入口の口径1.1cmとなっている。雁首部分は比較的太い。吸口側の金具は長さ5.8cm、羅字挿入口の口径1.1cm、吸口の端部の口径0.6cmを測る。布が付着している。羅字には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が認められる。脂返し部分の湾曲は小さく、使用痕がみとめられる。

土師質土器皿（第190図-2）土壌の中央、大腿骨の上で出土した。口径8.7cm、底径4.9cm、器高1.7cmを測るもので、底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡赤黄色である。

西52号墓（第192図）墓域のやや北に位置する。東一西53号墓、北一西76号墓、南一西51号墓・西56号墓に三方を囲まれる形で掘り込まれている。平面正方形の素掘り土壌である。大きさは比較的小さく、長さが73cm、短径61cmを測る。深さは比較的浅く、検出面から70cmを測る。各壁はほぼ垂直に掘り込まれている。主軸の方向はN-13°-Eである。土壌内からは人骨1体と釘12が出土している。人骨は土壌の中央、底面の少し上で出土した。壮年後半の女性と推定される。立膝坐位でN-55°-Wの方向を向いている。



第192図 A I 区西52号墓実測図

西53号墓（第193図）墓域のやや北に位置する。東—西31号墓、西—西52号墓、北—西72号墓、南—西51号墓に四方を囲まれる形で掘り込まれている。平面はほぼ正方形の素掘り土壙である。大きさは比較的大きく、長さが98cm、短径77cmを測る。深さは深く、検出面から185cmを測る。各壁はほぼ垂直に掘り込まれていて。主軸の方向はN-13°-Eである。土壙内からは人骨1体と包丁、土師質土器皿2が出土している。

人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。壮年後半の女性のものである。残存状況は悪いため埋葬時の体勢は不明である。

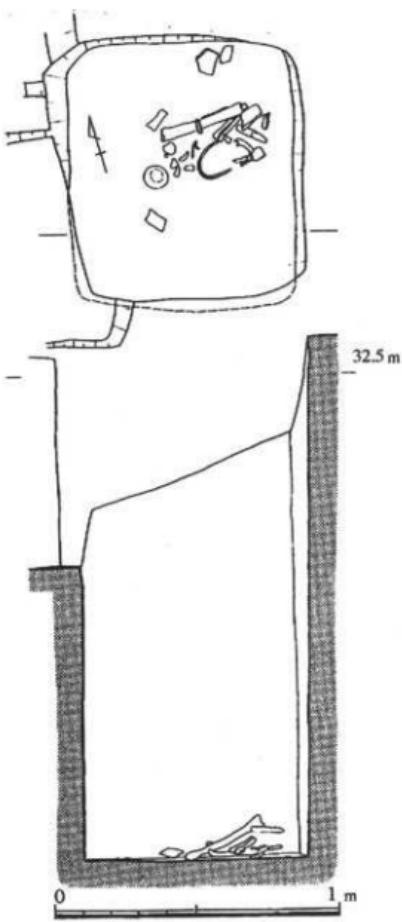
包丁（第194図-1）壙底のやや南側から出土した。残存状況は悪く刃部のみである。残存長9cmを測る。

土師質土器皿（第194図-2）壙底の中央から出土した。1は口径9.0cm、底径5.5cm、器高1.5cmを測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄赤色である。

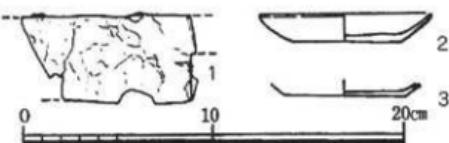
2は底部片である。

底径6.3cmを測る。

底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄色である。



第193図 A1区西53号墓実測図

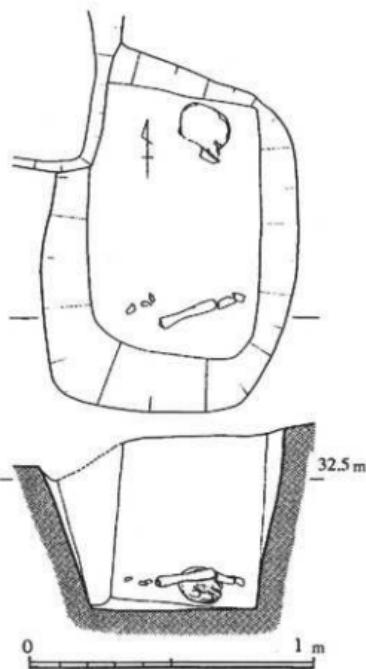


第194図 A1区西53号墓出土遺物実測図

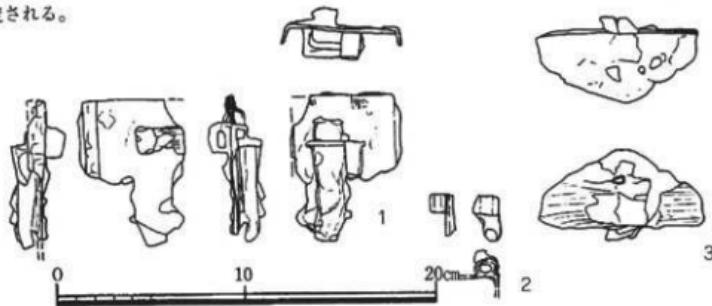
西54号墓（第195図）墓域の西に位置する。西—西55号墓、北—西58号墓に隣接する形で掘り込まれている。平面長方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長さが117cm、短径93cmを測る。深さは浅く、検出面から60cmを測る。主軸の方向はNである。土壙内からは人骨1体と鉄製金具が出土している。

人骨は土壙の中央、底面の少し上で出土した。壯年後半～熟年の女性のものと考えられる。残存状況は悪いため埋葬時の体勢は不明である。

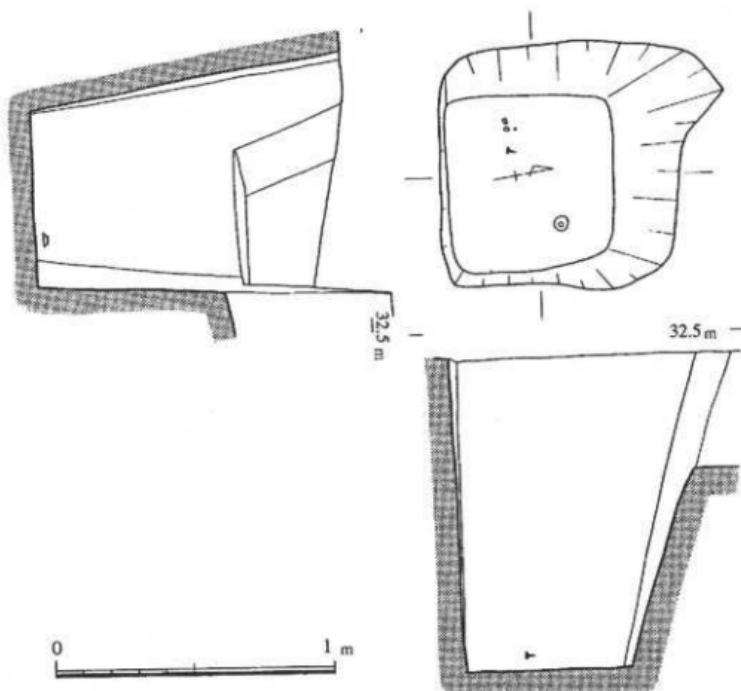
鉄製金具（第196図-1～2）1は折り曲げて加工された厚さ2mm程度の鉄板に留め金状の金具がつく。内外面に木質が付着している。幅6.4cm、残存長7.8cmを測る。2は折り曲げた鉄板に釘が打ち込まれて。残存長8.2cmを測る。3は折り曲げて加工された鉄板にヒモ通しのような環状の金具がつき、すべて棺に使われた金具と推定される。



第195図 A I区西54号墓実測図



第196図 A I区西54号墓出土遺物実測図



第197図 A I 区西55号墓実測図

西55号墓（第197図）墓の西に位置する。東—西54号墓、北—西58号墓に隣接する形で掘り込まれてゐる。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が85cm、短径85cmを測る。深さは比較的深く、検出面から111cmを測る。主軸の方向はNである。土壙内からは土師質土器皿1が出土している。

土師質土器皿（第198図）壙底の中央から出土した。底部片である。底径4.0cmを測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄赤色である。



第198図 A I 区西55号墓出土遺物実測図

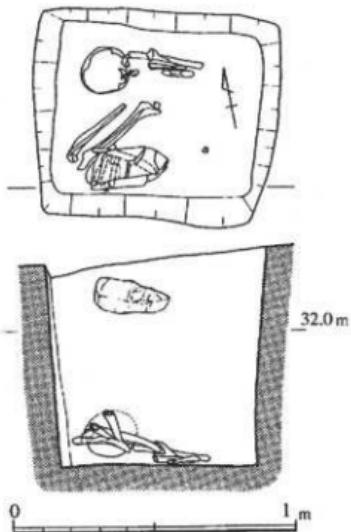
西56号墓（第199図）墓域の西端に位置する。東—西51号墓、南—西59号墓に隣接する形で掘り込まれている。平面ほぼ正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が87cm、短径74cmを測る。深さは比較的浅く、検出面から70cmを測る。主軸の方向はN-15°-Eである。土壙の西より、検出面から20cmの高さに大きい疊1が出土している。土壙内からは人骨1体と銭貨2、銅製金具2、釘24、土師質土器皿2が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年の男性と思われる。立膝坐位でS-60°-Wの方向を向いている。

銭貨（第200図-5）銅製。2枚が出土し

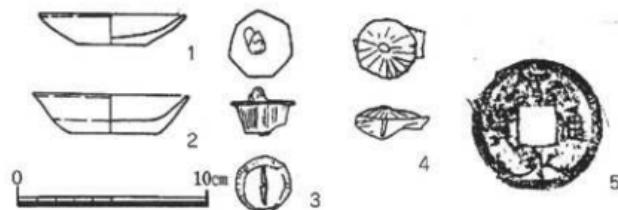
た。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は1枚がハ寶錢であり、もう1枚は鋳化が著しく判読不明である。ハ寶錢の遺存状態は良好であるにもかかわらず、文字が不鮮明なのは鋳造時に問題があると考えられる。

銅製金具（第200図-3～4）3は径2.2cmの平面6角形を呈する金具と木質が金具により留められている。栓のような用途と推定される。4は径2.2cmの菊の文様を呈する金具と木質が金具により留められている。鉄のような用途と推定される。

土師質土器皿（第200図-1～2）1は口径8.0cm、底径3.6cm、器高1.6cmを測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好である。2は口径8.2cm、底径4.8cm、器高2.0cmを測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好である。色調は淡黄赤色である。



第199図 A1区西56号墓実測図



第200図 A1区西56号墓出土遺物実測図

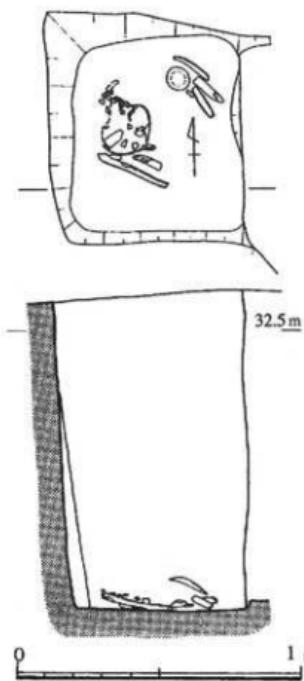
西57号墓（第201図）墓域の南西端に位置する。東一西45号墓に隣接する形で掘り込まれている。

平面正方形の素掘りの土壙である。東壁は西45号墓と切りあっている。大きさは比較的小さく、長径が83cm、短径70cmを測る。深さは比較的深く、検出面から110cmを測る。主軸の方向はNである。土壙内からは人骨1体と鎌1、土師質土器皿2が出土している。

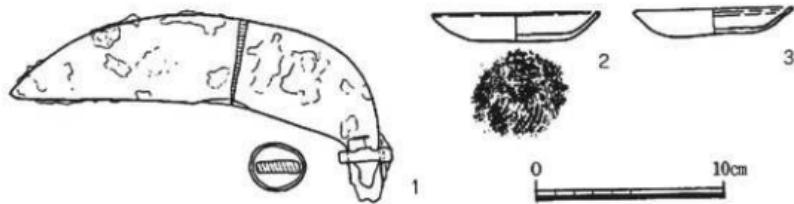
人骨は床面ほぼ中央で出土している。壮年の女性と考えられる。立膝坐位でN-55°-Eの方向を向いている。

鎌（第202図-1）土壙底の北東から出土した。残存状況が良好で闇の部分には、柄を固定するための責め金具が認められる。

土師質土器皿（第202図-2~3）壙底の北側から出土した。2は口径8.9cm、底径4.5cm、器高1.3cmを測る。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。3は口径8.6cm、底径5.0cm、器高1.5cmを測る。色調は薄黄赤色である。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。



第201図 A I 区西57号墓実測図



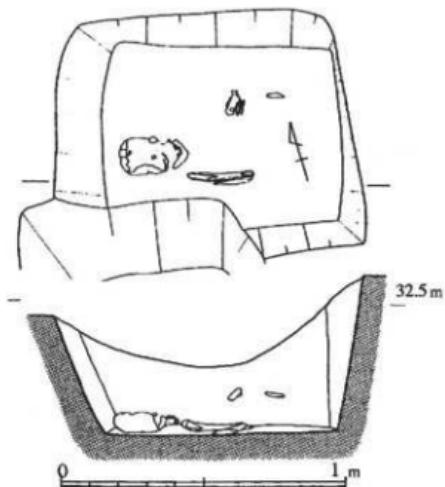
第202図 A I 区西57号墓出土遺物実測図

西58号墓（第203図）墓域の西に位置する。

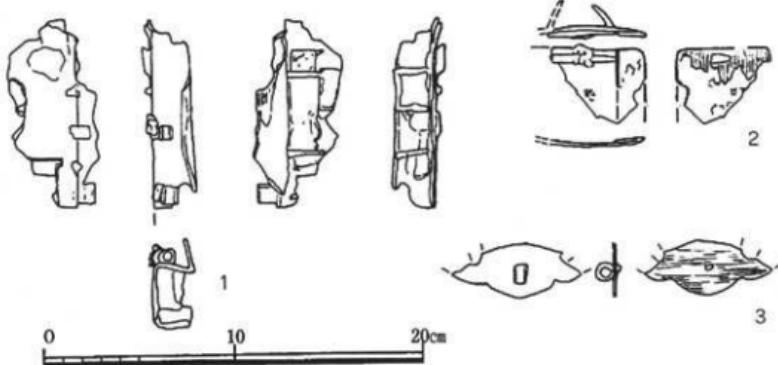
東-西47号墓・西48号墓、南-西54号墓・西55号墓に隣接する形で掘り込まれている。平面正方形の素掘り土壤である。南壁は西55号墓ときりあっている。大きさは比較的大きく、長径が100cm、短径88cmを測る。深さは比較的浅く、検出面から60cmを測る。主軸の方向はN-15°-Eである。

土塚内からは人骨1体と鉄製金具1が出土している。成人骨で性別不明である。残存状況は悪く埋葬時の姿勢は不明である。

鉄製金具（第204図-1～3）土壤底のほぼ中央から出土した。1は折り曲げて加工された鉄板が組み合わせてある。木質が付着している。残存長8.2cmを測る。2は折り曲げた鉄板に鈕が打ち込まれてある。木質が付着している。残存長6cmを測る。3は鉄板に環状の金具が取り付けられている。棺に打ち付けられた金具と推定される。



第203図 A I 区西58号墓実測図



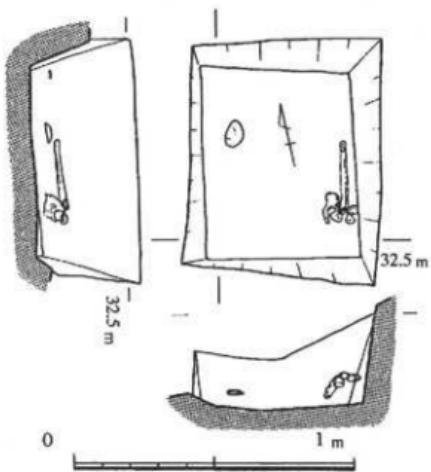
第204図 A I 区西58号墓出土遺物実測図

西59号墓（第205図）墓域の西に位置する。東—西50号墓、北—西56号墓に隣接する形で掘り込まれている。平面は正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が82cm、短径68cmを測る。深さは非常に浅く、検出面から38cmを測る。主軸の方向はN—14°—Eである。土壙内からは人骨1体と土師質土器皿が出土している。

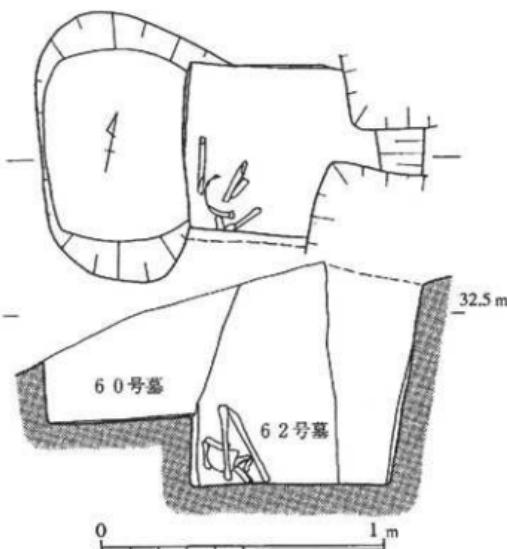
人骨はやや東よりの床面よりや上で出土している。成人のものである。

残存状況は悪いが、仰臥坐位で、S—30°—Wを向いている。

西60号墓（第206図）墓域のやや東に位置する。東—西62号墓、西—西69号墓、北—西63号墓、南—西18号墓・西19号墓に四方を囲まれる形で掘り込まれている。平面梢円形の素掘りの土壙である。東壁は西62号墓ときりあっている。大きさは比較的小さく、長径が93cm、短径52cmを測る。深さは浅く、検出面から50cmを測る。主軸の方向はN—7°—Wである。土壙内からは人骨及び遺物は出土しなかった。



第205図 A I 区西59号墓実測図



第206図 A I 区60・62号墓実測図

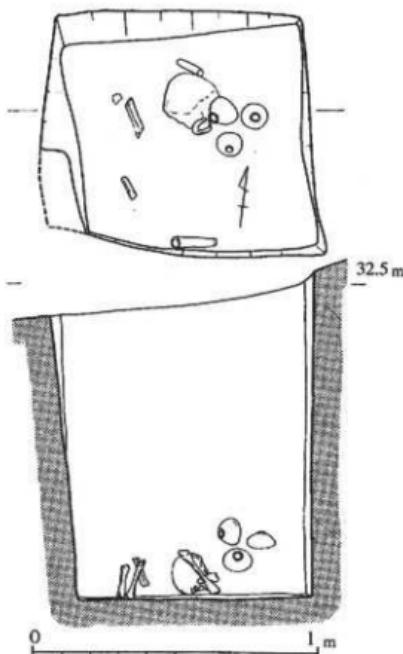
西61号墓（第207図）（墓域の東端の中央やや北よりに位置する。西—西62号墓、南—西21号墓に隣接する形で掘り込まれている。

平面正方形の素掘りの土壤である。大きさは比較的小さく、長径が69cm、短径60cmを測る。深さは比較的深く、検出面から126cmを測る。

主軸の方向はN-20°-Wである。土壤内からは人骨2体と、鉄1、剃刀1、煙管1、磁器碗5が出土している。人骨は熟年男性と熟年性別不明と推定される。

碗（第208図-3～7）頭蓋骨の横から出土している。すべて伏せるような状態で検出された。特に大小2枚づつ重ねた状態で出土した。

3は完形の磁器である。口径5.5cm、高台径2.7cm、器高1.8cmを測る。小型で浅く、体部は



第207図 A I区61号墓実測図

内湾する。色調は青白色である。

4は完形の磁器碗である。口径6.3cm、高台径2.8cm、器高2.7cmを測る。小型で体部は内



第208図 A I区61号墓出土遺物実測図

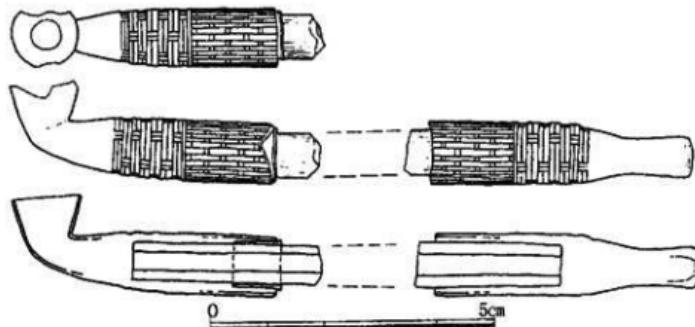
湾する。口縁部には打ち欠かれたと推定される痕跡が残る。色調は青白色である。5は完形の磁器碗である。口径8.5cm、高台径3.7cm、器高5.1cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がる。色調は青白色である。見込み面には使用痕が認められる。19世紀第2四半期に地方窯で焼かれた廣東碗である。6は完形の磁器碗である。口径7.4cm、高台径3.2cm、器高3.8cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がる。色調は青白色である。見込み面には使用痕が認められる。7は完形の磁器染め付け碗である。口径7.5cm、高台径3.0cm、器高3.5cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がる。色調は青白色である。

鉄（第208図-1）鉄製のにぎり鉄である。剣刀と鍔で付着した状態で出土した。全長13.5cm、刃部長6.0cmを測る。

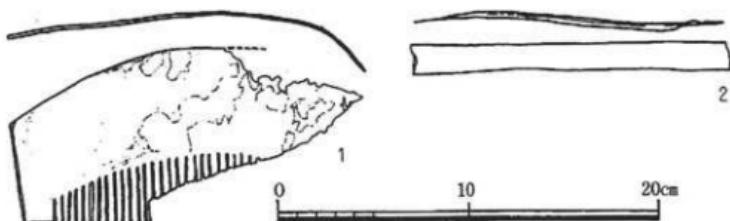
剣刀（第208図-1）厚さが1mm程度の薄く細長い鉄板を中心で、「く」の字に折り曲げたものである。鉄に付着して検出された。断面は“く”の字形を呈する。幅は1.8cmで残存長は18cmである。

煙管（第208図-2）火皿側の金具は長さ5.7cm、火皿の口径1.5cm、羅字掉入口の口径1.0cmとなっている。羅字には竹が用いられている。脂返しの湾曲は小さい。

西62号墓（第206図）墓域の東端の中央やや北よりに位置する。東-西21号墓・西61号墓、西-西60号墓に挟まれる形で掘り込まれている。平面は正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小小さく、長径が77cm、短径63cmを測る。深さは比較的浅く、検出面から80cmを測る。主軸の方向はN-7°-Wである。土壙内からは人骨1体と、煙管1、鉄製金具1、櫛1が出土している。人骨は土壙のほぼ南西より床面よりやや上で出土している。熟年後半の女性のものと思われる。



第209図 A.I.区62号墓出土遺物実測図(1)



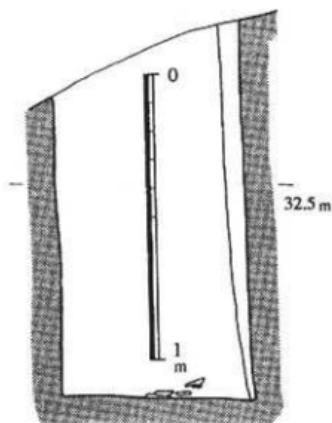
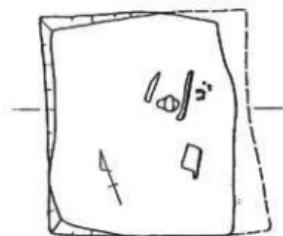
第210図 A I区62号墓出土遺物実測図（2）

煙管(第209図) 火皿側の金具は長さ4.7cm、火皿の口径1.2cm、羅字押入口の口径1.1cmとなっている。吸口側の金具は長さ4.6cm、羅字押入口の口径1.1cm、吸口の端部の口径0.7cmを測る。両金具ともに格子状の装飾が施されている。羅字には竹が用いられている。火皿側の金具と羅字の間には薄い筒状の金具があり、装着を良くしている。火皿は逆台形を呈し、脇返しの湾曲はほとんど消失し、火皿の下に直角に接続する。

銅製金具(第210図-2) 長さ8cm、幅7mm
の板状を呈する。緑青色をしている。

櫛(第210図-1) べっこう製の横櫛である。
残存長9.5cm、幅4.5cmを呈する。

西63号墓(第211図) 墓域の東端の中央やや北よりに位置する。北-西64号墓、西-西70号墓、南-西60号墓・西62号墓に三方を囲まれる形で掘り込まれている。平面は正方形の素掘りの土壤である。大きさは比較的小さく、長径が80cm、短径68cmを測る。深さは比較的深く、検出面から140cmを測る。主軸の方向はN-7°-Wである。土壤内からは人骨1体と、包丁1、土師質土器皿



第212図 A I区西63号墓出土遺物実測図

第211図 A I区西63号墓実測図

1、釘1が出土している。

人骨は土壤のほぼ中央より床面よりやや上で出土している。小児のものである。残存状態は非常に悪く、性別及び埋葬時の体勢は不明である。

包丁（第212図）土壤底の東側で

出土した。刃部中央から茎にかけて

残存する。残存長13cm、茎の幅1.3cm、

刃幅5cmを測る錆化が著しい。

西64号墓（第213図）墓域の北東

に位置する。北—西65号墓・西67号

墓、西—西68号墓、南—西63号墓に

三方を囲まれる形で掘り込まれてい

る。平面正方形の素掘りの土壤であ

る。大きさは比較的大きく、長径が

100cm、短径70cmを測る。深さは比

較的深く、検出面から140cmを測る。

主軸の方向はN-7°-Wである。

土壤内からは人骨1体と、煙管2、

土師質土器皿1、錢貨1が出土して

いる。

人骨はほぼ中央の床面よりやや上で

出土している。老年後半から老年男

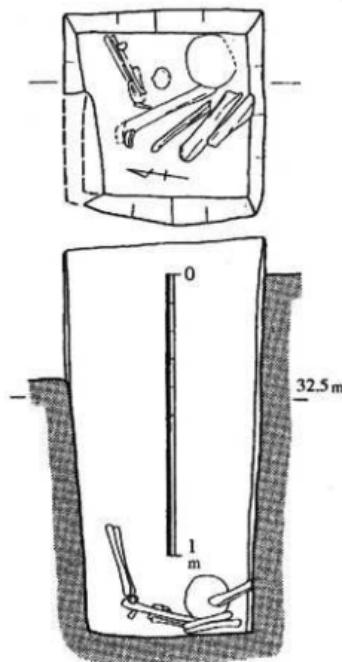
性と思われる。仰臥坐位でN-

70°-Wを向いている。

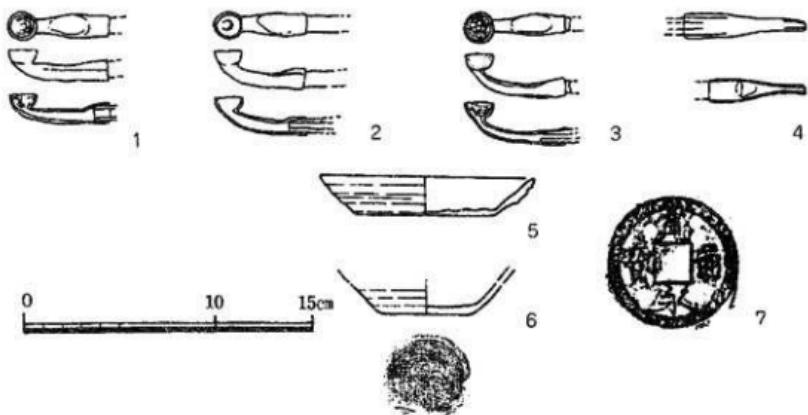
煙管（第214図-1～3・第215図）

土壤底の北側から出土した。火皿側

の金具2つは互違いに、革製の袋に入っていた。1は火皿側の金具は長さ5.3cm、火皿の口径1.5cm、羅字挿入口の口径0.9cmとなっている。雁首部分と挿入口の間は使用時の打撃により窪んでいる。脂返しの湾曲はほとんどなくなっている。2は火皿側の金具は長さ4.8cm、火皿の口径1.4cm、羅字挿入口の口径1.0cmとなっている。雁首部分と挿入口の間は使用時の打撃により窪んでいる。脂返しの湾曲は小さい。3は火皿側の金具は長さ5.4cm、火皿の口径1.5cm、羅字挿入口の口径1.0cmとなっている。雁首部分と挿入口の間は度かさなる使用時の打撃により窪んでいる。



第213図 A T区西64号墓実測図



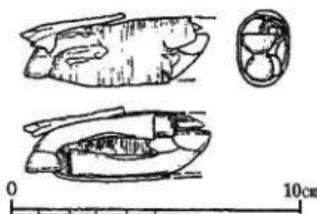
第214図 A I区西64号墓出土遺物実測図

輪返しは細く、湾曲している。4は吸口側の金具は長さ6.4cm、羅字押入口の口径1.2cm、吸口の端部の口径0.6cmを測る。羅字には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が認められる。

土師質土器皿（第214図-5・6）5は口径11.2cm、底径7.0cm、器高2.0cmを測るもので、底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。

焼成は良好で内外面とも淡黄色である。

錢貨（第214図-7）いわゆる六道錢として納入されたもので、寛永通宝である。



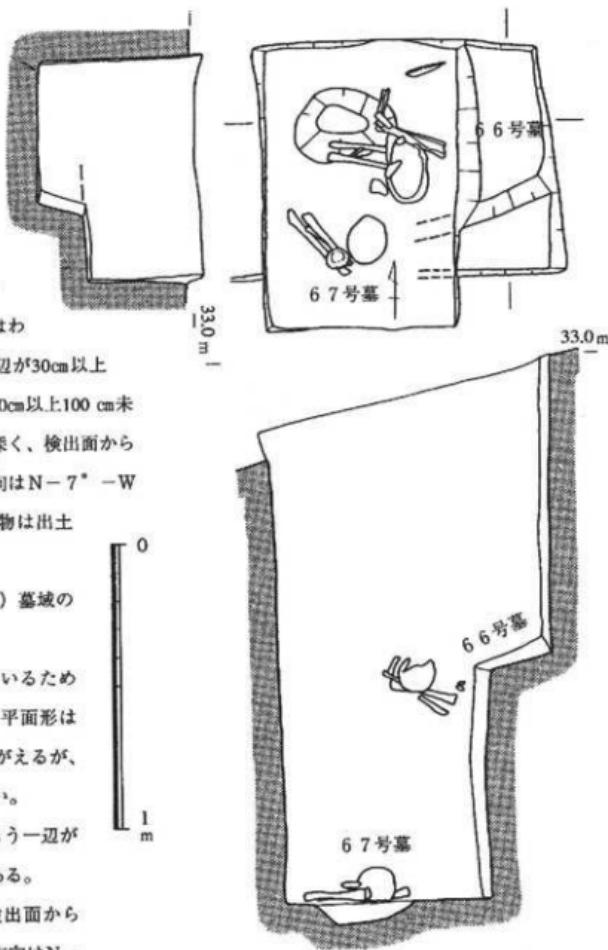
第215図 A I区西64号墓出土遺物収納模式図

西65号墓（第216図）墓域の北東端に位置する。

南—西64号墓と隣接する形で掘り込まれている。西66号墓と西67号墓と切り合っているため南東方向のコーナーのみ残存している。平面形は方形であることはうかがえるが、長短の比率はわからない。大きさは1辺が30cm以上80cm未満、もう一辺が40cm以上100cm未満である。深さは比較的深く、検出面から60cmを測る。主軸の方向はN-7°-Wである。土壌内から遺物は出土していない。

西66号墓（第216図）墓域の北東に位置する。

西67号墓と切り合っているため東半のみうかがえる。平面形は方形であることはうかがえるが、長短の比率はわからない。大きさは1辺が55cm、もう一辺が40cm以上100cm未満である。深さは比較的深く、検出面から110cmを測る。主軸の方向はN-7°-Wである。土壌内からは人骨1体が出土している。



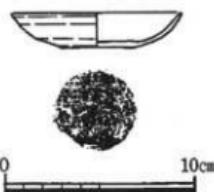
第216図 A1区西65・66・67号墓実測図

人骨は熟年女性と考えられる。残存状況は悪く埋葬時の体勢は不明である。

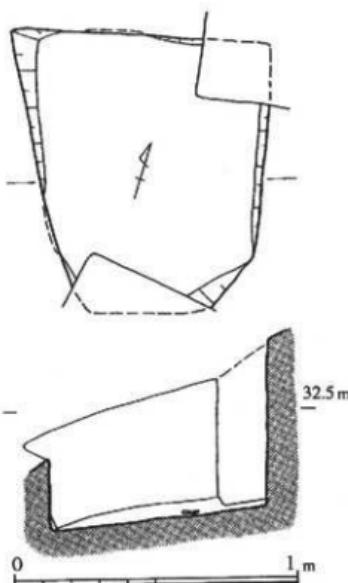
西67号墓（第216図）墓域の北東に位置する。長辺100cm、短辺70cm、深さ175cmを測る。主軸方向はNである。土壌底には径37cmの階円形で深さ7cmの穴が掘り込まれている。土壌内からは土師質土器皿と人骨1体が出土している。人骨は熟年後半～老年男性と考えられる。

土師質土器皿（第217図）下の人骨の上にのって出土した。口径9.0cm、底径4.2cm、器高1.8cmを測るもので底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡黄色である。

西68号墓（第218図）墓域の北東に位置する。平面正方形にちかい長方形の素掘りの土壌である。大きさは比較的大きく、長辺が100cm、短辺90cmを測る。深さは浅く、検出面から60cmを測る。主軸の方向はN-7°-Wである。土壌内からは歯が出土している。歯は土壌のはば中央より床面よりやや上で出土している。成人のものである。



第217図 A I区西67号墓出土遺物実測図



第218図 A I区西68号墓実測図

西69号墓（第219図）墓域のやや北に位置する。平面長方形の素掘りの土壙である。大きさは大きく、長径が140cm、短径100cmを測る。深さは比較的深く、検出面から115cmを測る。主軸の方向はN-7°-Eである。土壙内からは人骨1体と、煙管2、土師質土器皿2が出土している。

人骨は南壁よりの床面よりやや上で出土している。成人男性と推定される。仰臥坐位でN-70°-Wを向いている。

煙管（第220図-1）土壙のほぼ中央、人骨の下から出土した。火皿側の金具は長さ6.2cm、火皿の口径1.5cm、羅字挿入口の口径1.0cmとなっている。雁首部分は比較的長く脛返しは大きく湾曲する。羅字には竹が用いられている。

火皿内にはタール状の付着物が認められる。

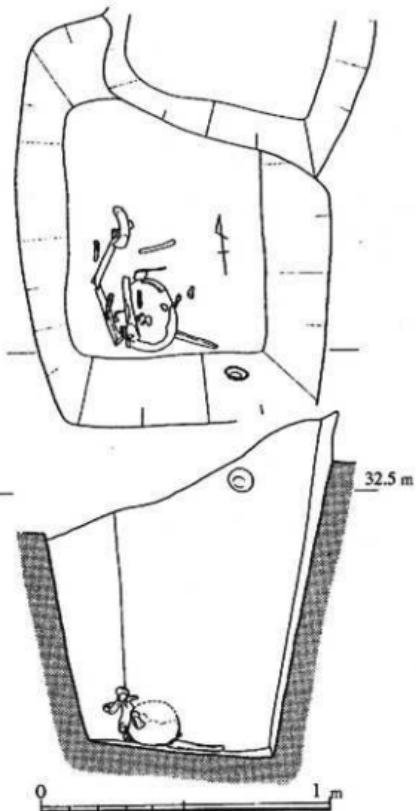
土師質土器皿（第220図-2～3）検出面付近から20cm下の高さから出土した。

2は口径11.0cm、底径7.0cm、器高1.8cmを測るもので、直線的にのびる体部をもち、

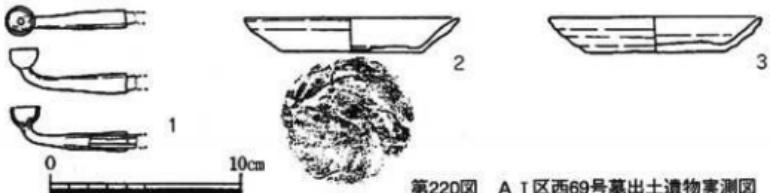
口縁端部は薄くなっている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。

焼成は良好で内外面とも淡赤黄色である。

3は口径11.2cm、底径7.3cm、器高1.8cmを測るもので、直線的にのびる体部をもち、口縁端部は薄くなっている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡赤黄色である。両方とも底部が広く、浅い形状をしている。



第219図 A I区西69号墓実測図



第220図 A I区西69号墓出土遺物実測図

西70号墓（第221
図）墓域のやや北に

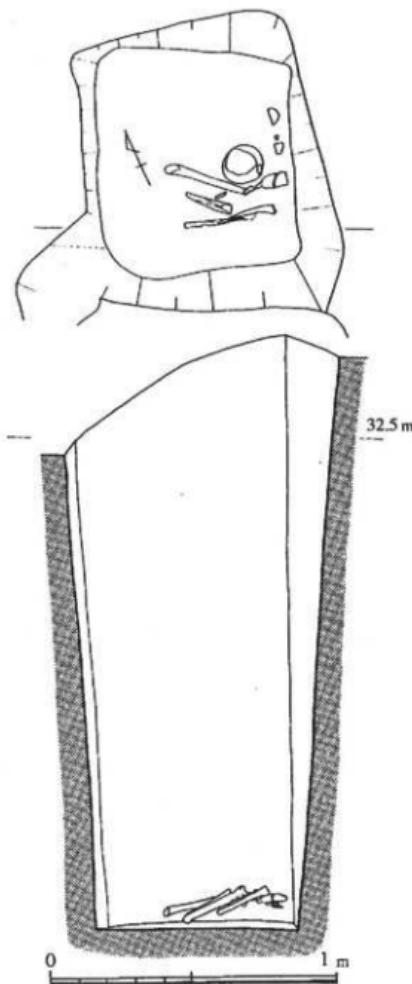
位置する。平面正方
形の素掘りの土壙で
ある。大きさは比較
的大きく、長径が90
cm、短径88cmを測る。
深さは最も深く、検
出面から210cmを測
る。主軸の方向は
N-22°-Eである。土壙内からは人
骨1体と、包丁1、
土師質土器皿2が出
土している。

人骨はほぼ中央の床
面よりやや上で出土
している。壮年～熟
年と推定される。

立膝坐位でS-
55°-Wを向いてい
る。

包丁（第222図一
1・2）土壙底の東
側、人骨の下から出
土した。刃部片と茎
片である。刃部は幅
5.3cmを測る。

土師質土器皿（第
222図-3）底部の
み残存している。



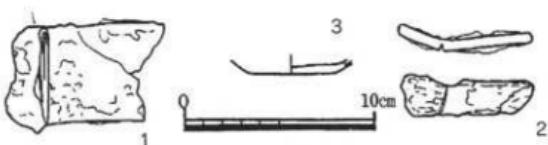
第221図 A I 区西70号墓実測図

底径4.3cmを測るもので、底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。

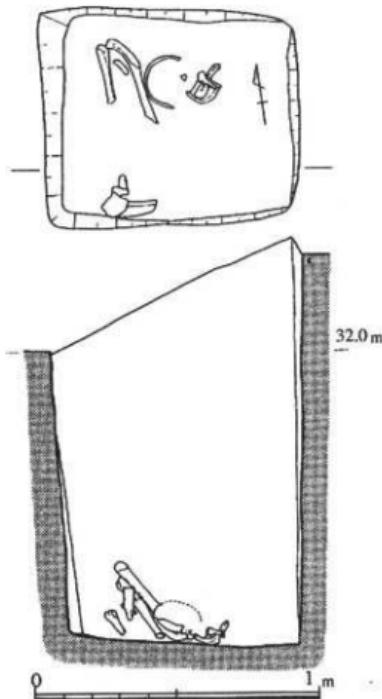
焼成は良好で内外面とも淡黄赤色である。

西71号墓（第222図）

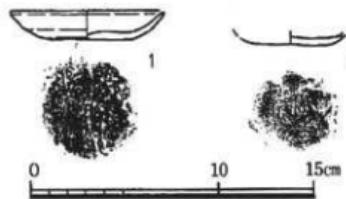
墓域のやや北に位置する。平面ほぼ正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が95cm、短径80cmを測る。深さはやや深く、検出面から130cmを



第222図 A I区西70号墓出土遺物実測図



第223図 A I区西71号墓実測図



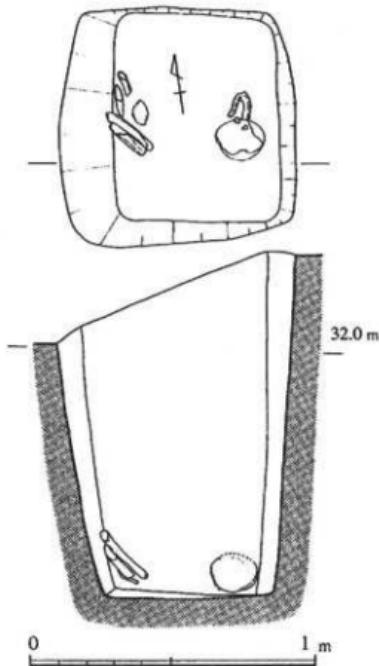
第224図 A I区西71号墓出土遺物実測図

測る。主軸の方向はN-22°-Eである。土壙内からは人骨1体と銭貨が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。壮年後半男性と推定される。立膝坐位でWを向いている。

西72号墓（第225図）

墓域のやや北に位置する。平面ほぼ正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が85cm、短径83cmを測る。深さはやや深く、検出面から130cmを測る。主軸の方向はN-7°-Eである。土壙内からは人骨1体と銭貨が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年後半女性と推定される。立膝坐位でWを向いている。

銭貨（第226図）銅製・鉄製。土壙底の東側、頭蓋骨の下から出土した。5枚が鏽により付着して出土した。いわゆる六道錢として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は4枚が鉄錢であり、1枚は銅錢である。



第225図 A I区西72号墓実測図

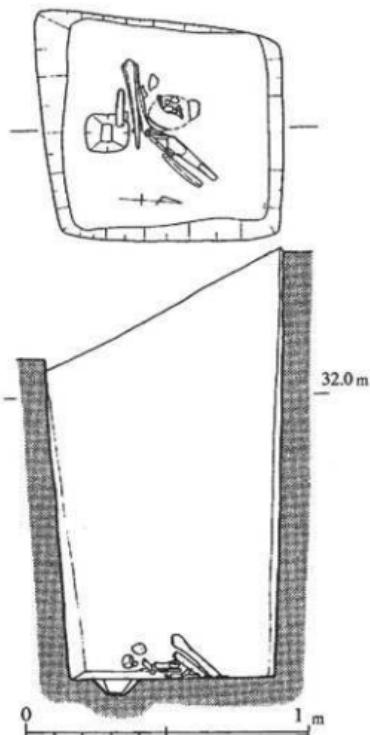


第226図 A I区西72号墓出土遺物実測図

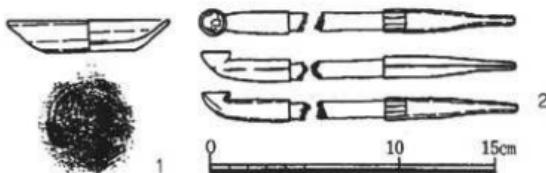
西73号墓（第227図）墓域の北端に位置する。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が88cm、短径70cmを測る。深さはやや深く、検出面から150cmを測る。主軸の方向はN-7°-Eである。土壙の底面には一辺16cm、方形の穴が掘り込まれている。土壙内からは人骨1体と煙管、土師質土器皿が出土している。

人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年男性と推定される。立膝坐位でS-25°-Wを向いている。

煙管（第228図-2）火皿側の金具は長さ4.7cm、火皿の口径1.4cm、羅字挿入口の口径1.1cmとなっている。火皿は逆台形を呈する脂返しの湾曲は消失し、火皿の下に首が直角に接続する。吸口側の金具は長さ7.0cm、羅字挿入口の口径1.1cm、吸口の端部の口径0.4cmを測る。羅字には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が認められる。



第227図 A1区西73号墓実測図

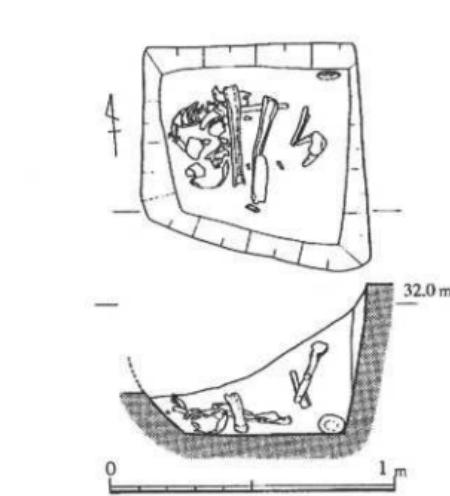


第228図 A 区西73号墓出土遺物実測図

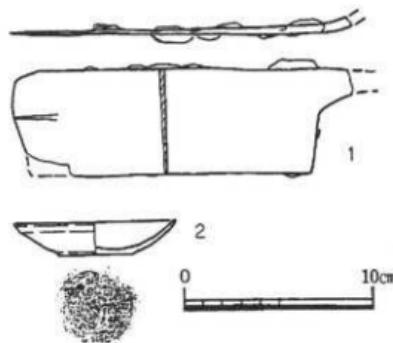
西74号墓（第229図）墓域の北端に位置する。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的大きく、長径が88cm、短径70cmを測る。深さはやや深く、検出面から150cmを測る。主軸の方向はN-7°-Eである。土壙内からは人骨1体と包丁、銭貨、土師質土器が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。壮年女性と推定される。立膝坐位でS-40°-Wを向いている。

包丁（第230図-1）土壙底の中央、大軽骨の上から出土した。刃部先端と茎部分が欠損している。刃部先端は供獻時にはすでに欠損していたものと考えられる。残存長18.0cm、幅5.5cm、厚さ0.3cmを測る。

銭貨は銅製である。土壙底の西側、頭蓋骨の下から出土した。2枚が鏃により付着して出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。鋳化が著しく文字の判読は不明である。片面に布が付着している。



第229図 A.I区西74号墓実測図



第230図 A.II区西74号墓出土遺物実測図

土師質土器皿（第230図-2）口径8.6cm、底径4.0cm、器高1.8cmを測るもので、やや内湾する体部をもち、口縁端部は丸くおさめている。底部裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡赤黄色である。

西75号墓（第231図）墓域

のやや北に位置する。平面正方形の素掘りの土壌である。

大きさは比較的小さく、長径が74cm、短径60cmを測る。深さはやや浅く、検出面から98cmを測る。主軸の方向はNである。土壌内からは人骨1体と釘99本が出土している。

人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。壮年後半～熟年男性のものと考えられる。

立膝坐位でN-65°-Wを向いている。

西76号墓（第231図）墓域

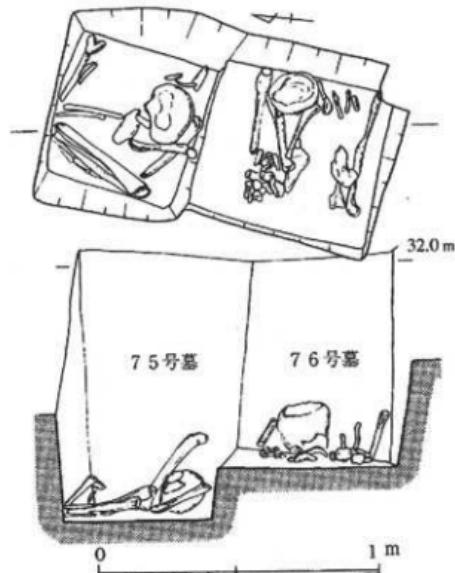
のやや北に位置する。平面は

正方形の素掘りの土壌である。大きさは比較的小さく、長径が75cm、短径70cmを測る。深さはやや浅く、検出面から76cmを測る。主軸の方向はNである。土壌内からは人骨1体と煙管、釘46が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年男性のものである。

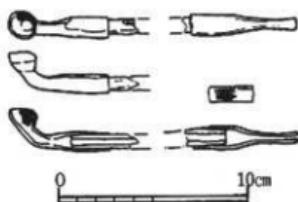
仰臥坐位でN-70°-Wを向いている。

煙管（第232図）火皿側の金具は長さ5.3

cm、火皿の口径1.4cm、羅字挿入口の口径1.1cmとなっている。挿入口側には使用時の衝撃により平坦になった部分があり、使用されていたものであることがうかがえる。吸口側の金具は長さ5.6cm、羅字挿入口の口径1.1cm、吸口の端部の口径0.6cmを測る。羅字には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が認められる。脇返しの湾曲は小さい。



第231図 A 区西75・76号墓実測図



第232図 A 区西76号墓出土遺物実測図

西77号墓（第233図）墓域の北西に位置する。平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小小さく、径が68cmを測る。深さはやや浅く、検出面から48cmを測る。主軸の方向はNである。土壙内からは人骨1体と土師質土器、銭貨、釘90が出土している。人骨は西壁よりの床面よりやや上で出土している。老年女性と推察される。仰臥坐位でN-80°-Wを向いている。



第234図 A 区西77号墓出土銭拓影

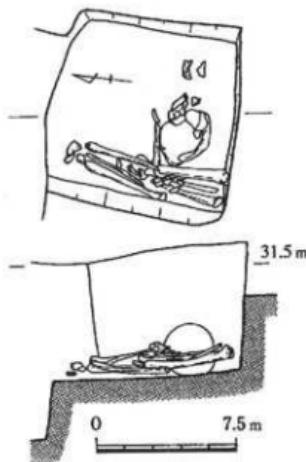
銭貨（第234図）銅製。5枚が鏽により付着して出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は1枚がハ實銭、その他は腐食が著しく文字の判読は不明である。

西78号墓（第235図）北西隅に位置する。

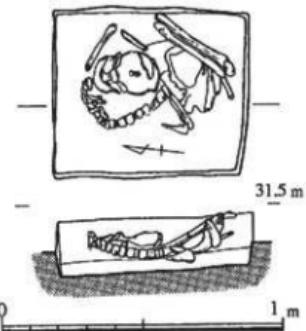
平面は正方形の土壙である。大きさは比較的小小さく、長径が69cm、短径が60cmを測る。深さは非常に浅く、検出面から20cmを測る。但しこの辺りは検出面より1m以上盛土をしていたものと考えられる。主軸の方向はNである。土壙内からは人骨1体と釘4が出土している。

人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。

壮年女性のものと考えられる。仰臥坐位でS-35°-Eを向いている。



第233図 A I区西77号墓実測図



第235図 A I区西78号墓実測図

西79号墓（第236図）墓域のやや北に位置する。

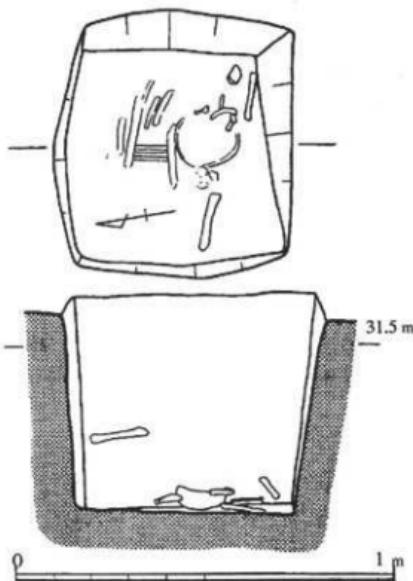
平面正方形の素掘りの土壙である。大きさは比較的小さく、長径が70cm、短径が60cmを測る。深さは非常に浅く、検出面から60cmを測る。主軸の方向はN-7°-Wである。土壙内からは人骨1体と銭貨8、櫛2、鏡1、釘42、土師質土器皿が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年女性のものと考えられる。仰臥坐位でN50Wを向いている。床面には毛髪が残存していた。

銭貨（第237図）銅製。9枚が鋸により付着して出土した。いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は2枚がス寶錢、6枚がハ寶錢である。ハ寶錢の中には文錢1枚と、寛通の間に素穴があるもの1枚がある。

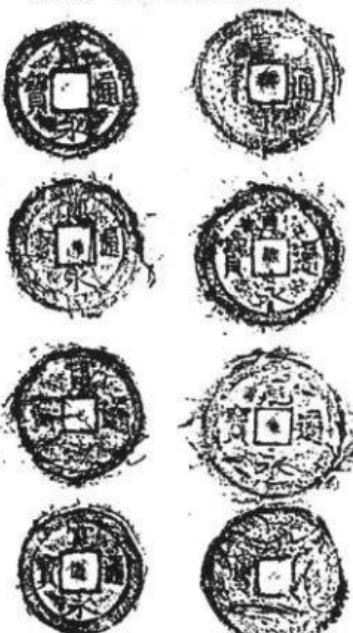
櫛（第238図-1・2）堅櫛と横櫛がある。人骨の下で検出した頭髪の中にあった。1は堅櫛で幅2.3cm、残存長3.5cm、厚さ0.4cmを測る。表面に黒色の漆状付着物が認められる。2は横櫛で端部片である。

鏡（第238図-4）草刈鏡の中央より先端部分と推定される。先端が折れ付着している。残存長6.5cm、幅2.5cm、厚さ0.5cmを測る。

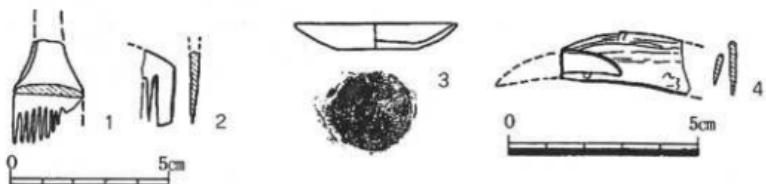
土師質土器皿（第238図-3）口径8.0cm、底径3.8cm、器高1.3cmを測るもので、やや内湾する体部をもつ。焼成は良好で内外面とも淡黄色である。



第236図 A I 区西79号墓実測図



第237図 A I 区西79号墓出土銭拓影



第238図 A1区西79号墓出土遺物実測図

西80号墓（第239図）墓域の北西端に位置する。

平面正方形の素掘りの土壇である。大きさは比較的小小さく、長径が76cm、短径が72cmを測る。深さは非常に浅く、検出面から64cmを測る。主軸の方向はN-7°-Eである。土壇内からは人骨1体と銭貨6、煙管1、銅製金具、釘66が出土している。人骨はほぼ中央の床面よりやや上で出土している。熟年男性のものと思われる。立膝坐位でWを向いている。

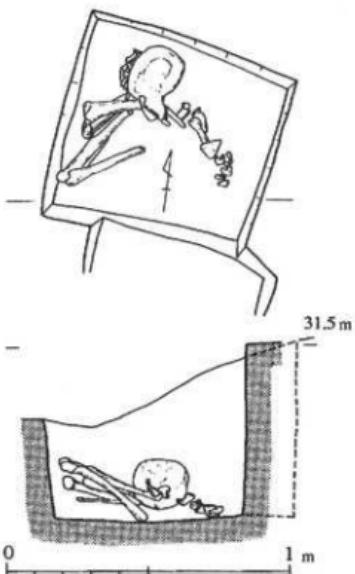
銭貨（第242図）銅製。土壇のほぼ中央、頭蓋骨の下から出土した。6枚が鏽により付着して出土した。

いわゆる六道銭として納入されたもので、寛永通宝である。内訳は1枚がス寶銭、5枚がハ寶銭である。ハ寶銭の中には文銭1枚がある。

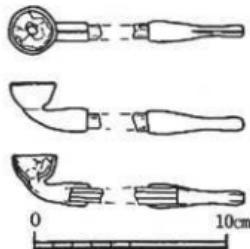
煙管（第240図）土壇のほぼ中央、頭蓋骨の下から出土した。火皿側の金具は長さ4.2cm、火皿の口径2.5cm、羅字挿入口の口径1.1cmとなっている。吸口側の金具は長さ4.9cm、羅字挿入口の口径1.0cm、吸口の端部の口径0.6cmを測る。接合のバリが上に現れている。火皿が非常に大きく、全体的に丸みを帯びている。脂返しの湾曲は消失している。

羅字には竹が用いられている。火皿内にはタール状の付着物が厚く付着している。

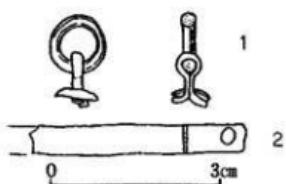
銅製金具（第241図-1・2）板状金具と留金具



第239図 A1区西80号墓実測図



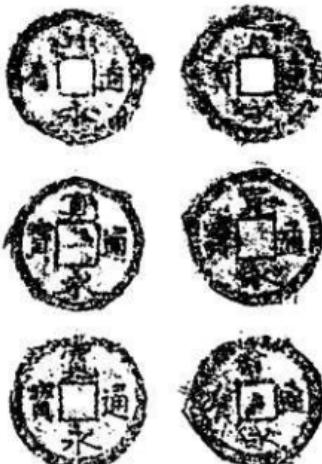
第240図 A1区西80号墓出土遺物実測図



第241図 A I区西80号墓出土遺物実測図

がある。板状金具は一部欠損しており、残存長4.0cm以上幅0.5cmで非常に薄い。端には径0.3cmの穴が開いている。全体的に縁膏がふいている。留金具は径1cmの環状金具と径0.8cmの盤状金具が金具で留められている。

土器窯遺構 近世墓群の墓域中央よりよりやや南側で、西11号墓・西29号墓・西30号墓・西41号



第242図 A I区西80号墓出土銭拓影

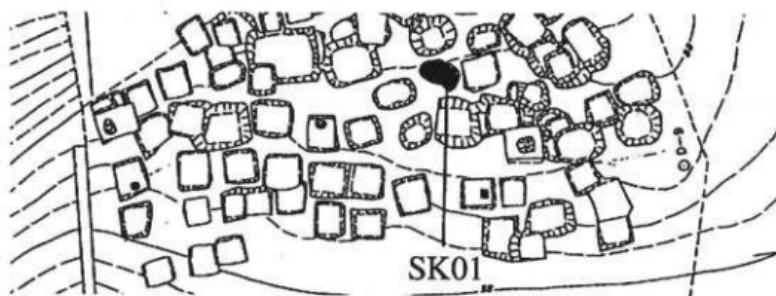
墓に囲まれた空間で不整形な溝を検出した。溝の大きさは検出面から長さ90cm、幅70cm、深さ30cmを測る。溝は淡茶色のサクサクとした砂質土に覆われており、その中から須恵器 頸1、杯身1、壺1、高杯9が出土した。(第244図) 土器類は土壤のやや西側によっている。溝の底面と土器の間には若干の間がある。

須恵器 頸 (1) 口径8.5cm、頸部径4.0cm、胴部最大径10.9cm、器高10.7cmを測る。口縁端部内面には段が1段つく。頸部には波状文が施されている。肩部は自然釉がはがれ黄色のあばた状を呈す。底部は丸底で、手持ち不整方向へラ削りのあとハケで調整している。焼成は良好である。

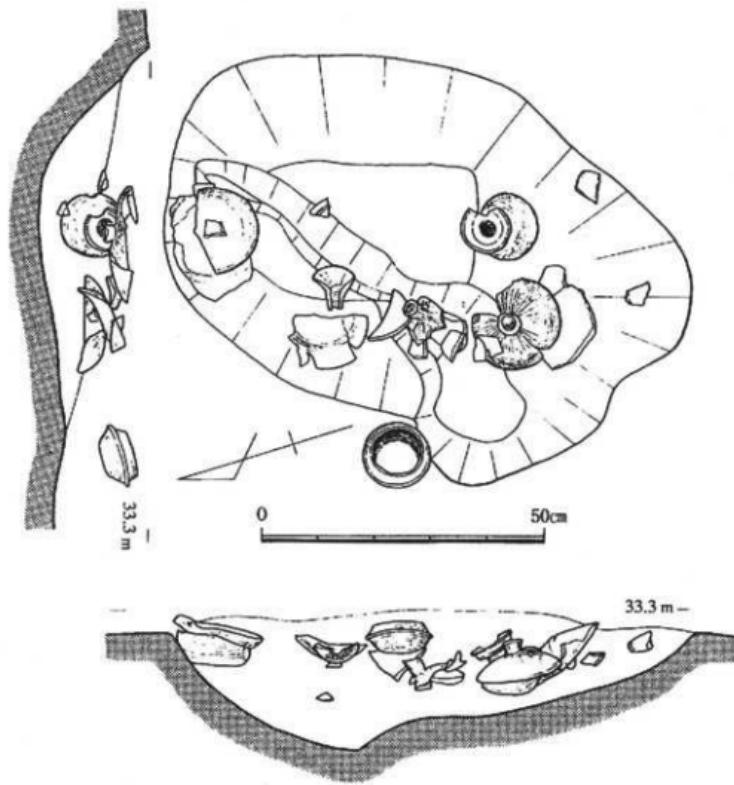
須恵器杯身 (2) 口径9.1cm、胴部最大径12.5cm、底部径6.5cm、器高4.8cmを測る。色調は淡淡灰青色を呈し、焼成はややあまい。口縁部は長く、端部は丸くおさまっている。

土師器壺 (3) 口縁部～頸部が残存する。口径8.5cm、頸部径5.2cm、残存高4.7cmを測る。口縁部は墓ほど肥厚する。口縁部外面は縦ハケの後回転ナデを施す。口縁部内面は横ハケが施されている。色調は赤黄色を呈す。

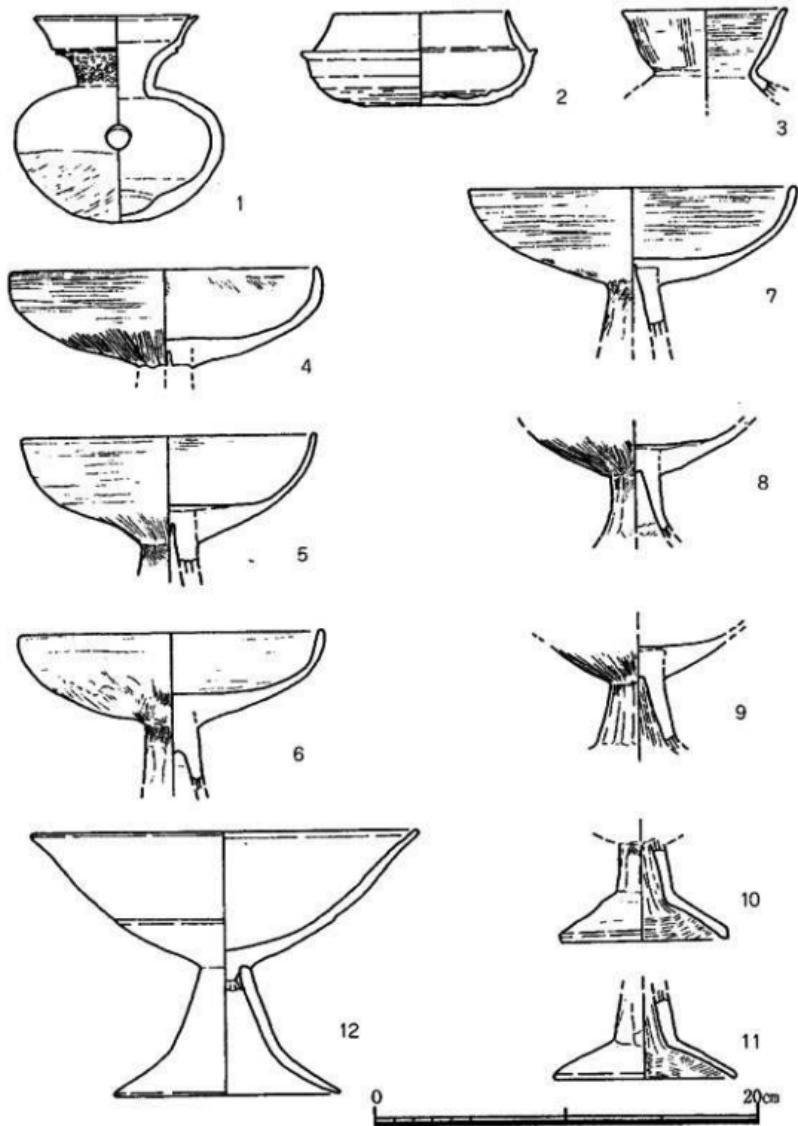
土師器高杯 (4～11) 口縁部が内溝するもの(4～11) 8点と外反するもの(12) 1点の大きく2種類に分けることができる。口縁部が内溝するものは口径が16cm～17cm、杯部高5cm、脚部高2cm程度、裾部径9cmを測る。口縁部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面～脚柱部上端にはたて方向のハケ調整を施す。脚柱部～裾部外面には縦方向のヘラ磨きが施される。脚柱部と裾部の変換点は明瞭な稜線ができている。脚柱部内面には絞り目ができるおり、裾部内面にはヨコ方向のハケ調整が施される。裾部端は外側に面をもつ。底部の脚柱部との接する部分には1cmの深さの穴



第243図 A I 区西土器窯位置図



第244図 A I 区西土器窯遺物出土状態実測図



第245図 A I区西土器窯遺物出土状態実測図

を穿がっている。脚柱部上端の横に縦ぎ足すような形で杯部が作られている。色調は赤黄色を呈す。

(8) には黒斑がみられる。口縁部が外反するものは、口径20.5cm、底径12cm、器高13.5cmを測る。杯部外面には段がつき、裾部端は丸くおさめる。杯底部と脚柱部の接合は杯部と脚柱部を別々に作ったあと接合している様子である。これらの土器は大谷縄年の山陰1期属することから、古墳時代中期の溝を作り何らかの施設があったものと考えられる。

西地区表探遺物

近世墓が密集する平垣面では多量の表探遺物を検出した。(第246図)

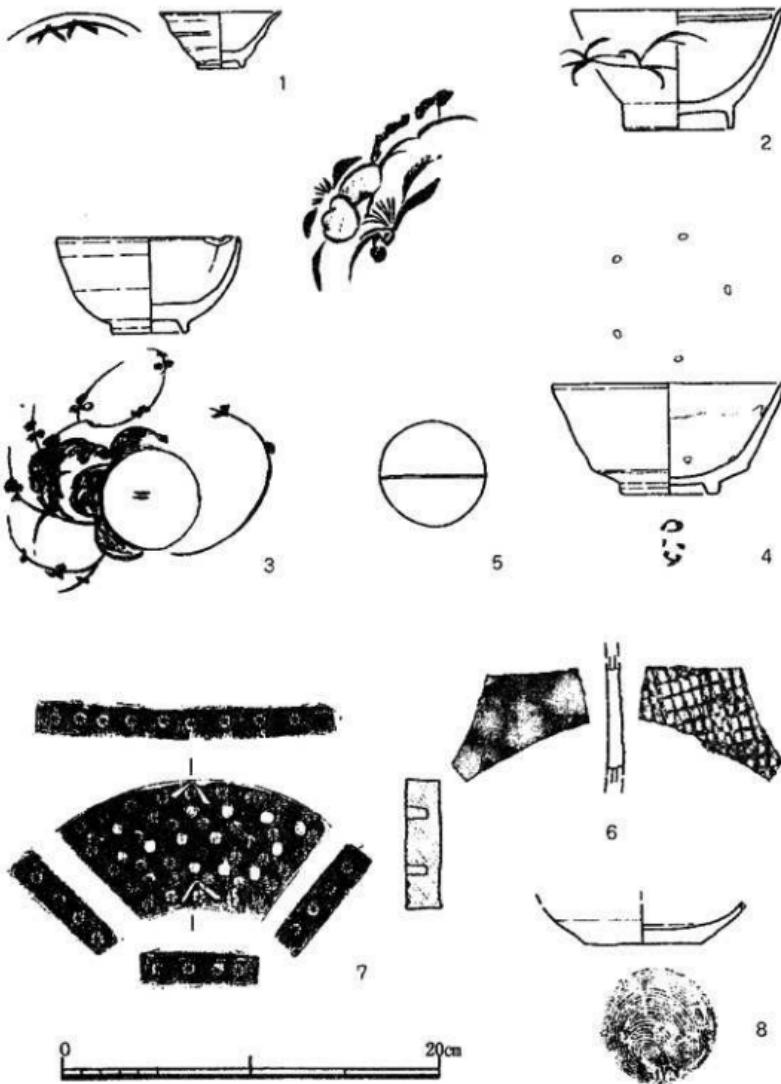
磁器湯飲み(1) 染め付け磁器。平垣面の東よりで採取された。口径6.5cm、底径2.5cm、器高3.0cmを測る。胴部は直線的に開き、口縁部は外反する。焼成は良好であり、色調は淡灰白色の施釉が施されている。外面はロクロ挽きの凹凸が明瞭に現れている。口縁部外面には文様が施されている。湯飲みもしくは杯として使用されたものと考えられる。

磁器飯碗(2) 染め付け磁器。A1西62号墓付近で採取された。口径11.0cm、高台5.8cm、器高6.3cmを測る。いわゆる、広東碗である。高台との接合部から口縁部にかけて、直線的に開く。焼成は不良であり釉薬が溶けきっておらず、所々白色を呈す。色調は青みがかった灰色である。口縁部内面に2条の線、底部内面に1条の線、外面に花をあしらった文様が施されている。飯碗もしくは向付として使用されたものと考えられる。19世紀第2四半期に地方窯で焼かれたものと考えられる。口縁部が故意に打ち欠かれた部分があり、埋葬に伴って使用されたものであろう。

磁器飯碗(3) 染め付け磁器。A1西41号墓付近で採取された。口径9.7cm、高台4.0cm、器高4.9cmを測る。胴部は内湾している。内外面は淡い灰色である。文様は淡い墨色を呈し、底部外面から高台にかけて2条の線、胴部外面に梅をあしらったと推定される文様が施されている。飯碗もしくは向付として使用されたものと考えられる。18世紀前半に肥前付近で焼かれたものと考えられる。口縁部が故意に打ち欠かれた部分があることから、埋葬に伴って使用されたものであろう。A1西41号墓出土のものと器形・文様ともに酷似する。

磁器飯碗(4) 施釉陶器。A1西41号墓付近で採取された。口径12.2cm、高台5.2cm、器高5.8cmを測る。胴部は直線的で、底部との境には稜がつく。色調は黄みの灰色である。外面から内面上部にかけて、青磁色の釉薬が掛かっている。内面には5カ所のトチンが痕跡が認められる。底部外面には墨書きしき痕跡が観察できる。飯碗として使用されたものと考えられる。19世紀後半に地元で焼かれたものと考えられる。口縁部が故意に打ち欠かれた部分があることから、埋葬に伴って使用されたものであろう。トチン痕跡が磨滅した様子がないことから、未使用であった可能性あり。

銅板(5) 平垣面の東側で出土した。直径5.5cmの円盤である。厚さ1mm表面は緑青に覆われている。用途は不明である。



第246図 A I 区西表採遺物実測図

壺形土器（6）胸部片である。内面の当て具は擦り消されている。外面には粗い格子目が残っている。近世の焼き締め陶で、いわゆる亀山焼などと称されるものであるが、产地は不明である。

扇形土製品（7）外縁が16cm、内縁が6.3cm、幅6.6cm、厚さ1.8cmを測る。表面には、径0.5cm、深さ1.1cmの穴が17カ所3列に並んで開いている。そして、その間を埋めるように、米印31カ所と花印3カ所のスタンプが押されている。また、扇の中央には韋印スタンプが上下2カ所押されている。側面には、21カ所に米印スタンプが押されている。裏面には全く装飾が施されていない。全体的に淡い黄色を呈し、全体に入念な横方向のヘラ磨きをほどこして、器面が滑らかである。細かい雲母のような粉末が付着しており、光沢をもっている。用途は不明である。

土師質土器（8）底部片である。底径6.3cm、残存高2.2cmを測る。底部は7mmとかなり厚く、裏面には回転糸切り痕跡がみられる。焼成は良好で内外面とも淡赤色である。

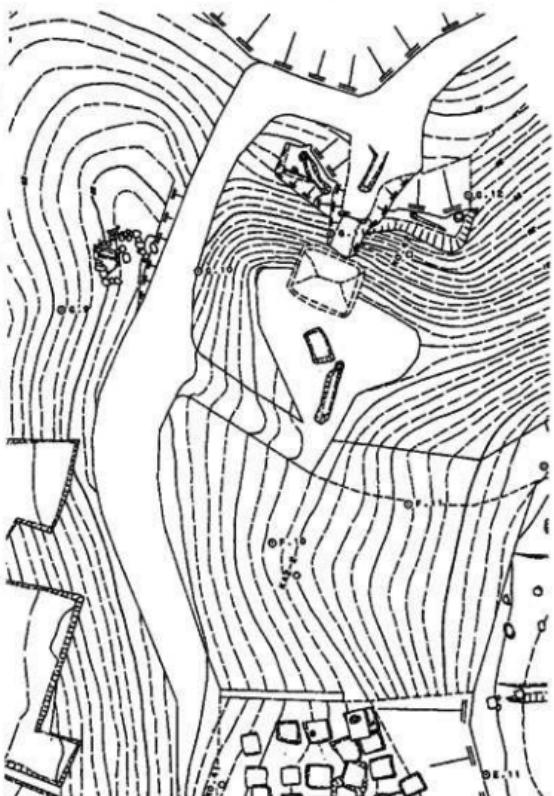
A西81号墓・A西82号墓

A区中から北西にのびる小さな尾根上に2カ所の平坦面がある。（第247図）上のものがA西81号墓であり、下の平坦面がA西82号墓である。

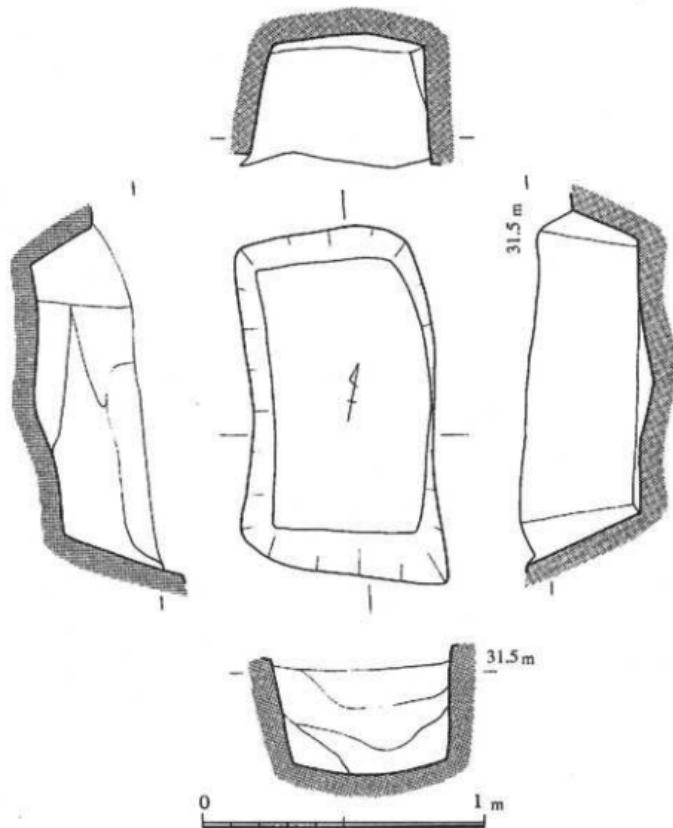
A西81号墓（第248図）北横穴玄室の真上にあたる。6m×4mの平坦面に長方形の土壙と溝状遺構が掘り込まれている。土壙の規模は、長さ120cm、幅65cm、深さ50cmであり、素堀りである。

土壙内からは銭貨1が出土している。溝状遺構は長さ200cm、幅40cm、深さ25cmである。土壙に伴うものと考えられる。付近には五輪塔が散乱していた。

銭貨は銅錢で、開元通寶である。開元通寶（初鑄845年）は渡



第247図 A 区西81・82号墓位置図



第248図 A I 区西81号墓実測図

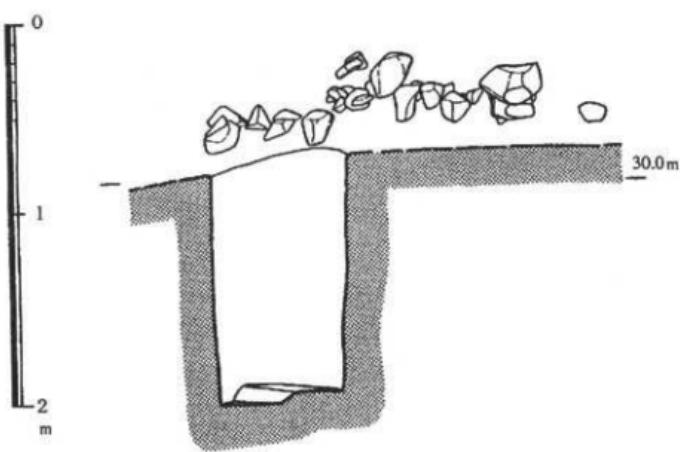
来錢である。

土壙の形状と出土遺物から中世に属するものと考えられる。

A西82号墓（第249図）北横穴の西側に所在する。5m×4mの平坦面から方形に配置された列石と円形土壙が検出された。平坦面一体には指頭大の円礫が散乱していた。

方形の配列は東西南北にはば方位があつて、東西160cm、南北140cmの方形で、列は1列で巡っている。東辺と南辺は18cm～22cmの大いな方形の厚手の平石を使っている。西辺は28cmの大いな不整形な石を用いている。北辺は大きくても15cmの大いな不整形な石を用いている。円形土壙が主体部であり、その墓域の区画のために配石がなされていたものと推定される。

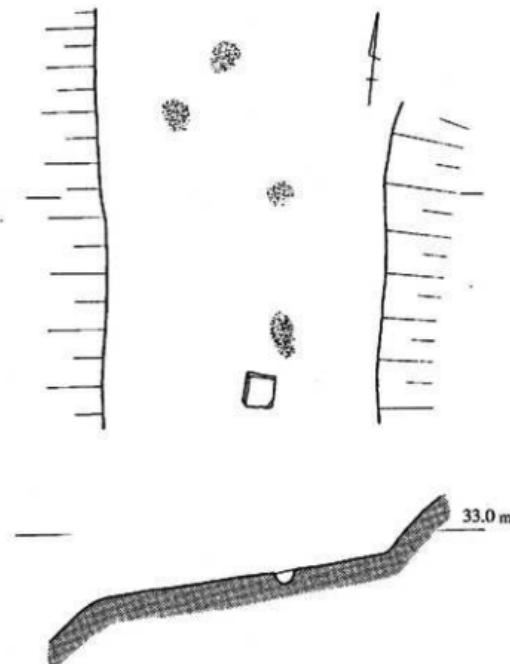
円形土壙は方形の区画の下に位置するが、西側に寄っている。地山を掘り込んでおり、径77cm、深さ130cmを測る。底面は半分が8cm程高くなっている。土壙内から遺物は検出できなかった。



第249図 A I区西82号墓実測図

火葬墓（第250図）A1区中央部SB01西下方向、A区西近世墓群とA区西81号墓に挟まれた斜面に沿って、幅2mの平坦面がある。標高は約32.5mである。この平坦面には火葬骨片が多量に散乱していた。特に集中する場所が4箇所確認できた。径20cm程度の不整形な円形～橢円形をしており、深さは検出面から7cm程度である。それぞれは60cm～1mの間隔をもっており、不規則に配置されている。

骨片は指先程の小片であり、詳細は不明である。南側には五輪塔の地輪があることと斜面の下に五輪塔の空風輪が崩落していることから、かつては五輪塔が建っていたと考えられる。



第250図 A1区西火葬墓分布図

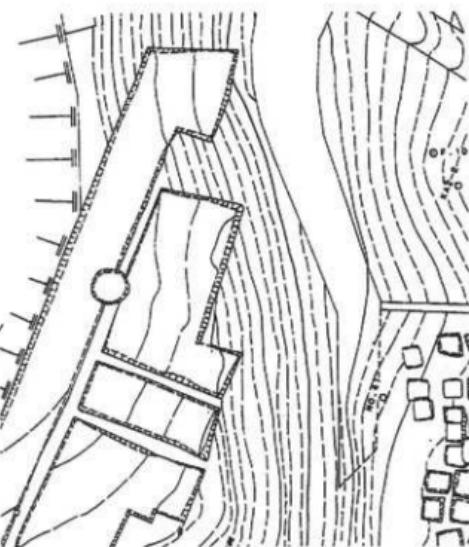
A西据で検出した遺構

丘陵の裾には、性格を明確にするはできなかったが、平坦な面が形成されていた。この平坦な床面からは、丘陵の上から流れ落ちたと考えられる五輪塔片が床面から出土している。

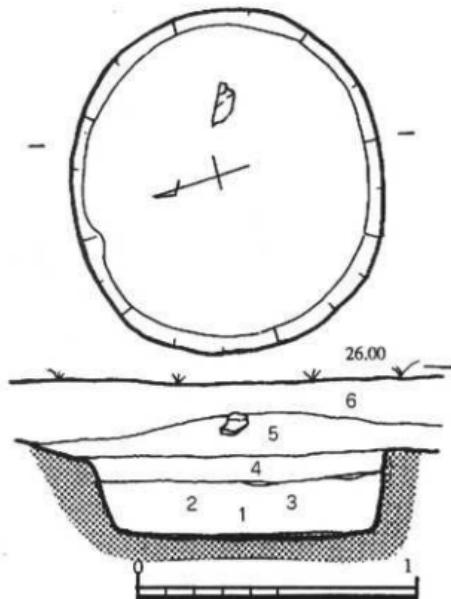
その後、丘陵上での近世墓の造成や造成後の近世墓の流失で、この平坦面は完全に埋まってしまったものと考えられる。明確な遺構は、この平坦面の北川に円形の土坑が検出された。

平坦面は、東西方向へ奥行き4m、南北方向8mの平坦面である。この平坦面からは、白色の石材が検出されている。調査の結果、来待産の凝灰岩別名白粉石と判断された。

円形土坑は、表土下20cmから検出された。東西径120cm、南北径110cmのやや椭円形を呈し、深さ30cmを測る。土坑内部の土層は、4つの層からなっており、流れ込んだ土と考えられる。土坑を被覆した土層からは、炭化物が出土しているがこの土坑に伴う遺物は認められなかった。



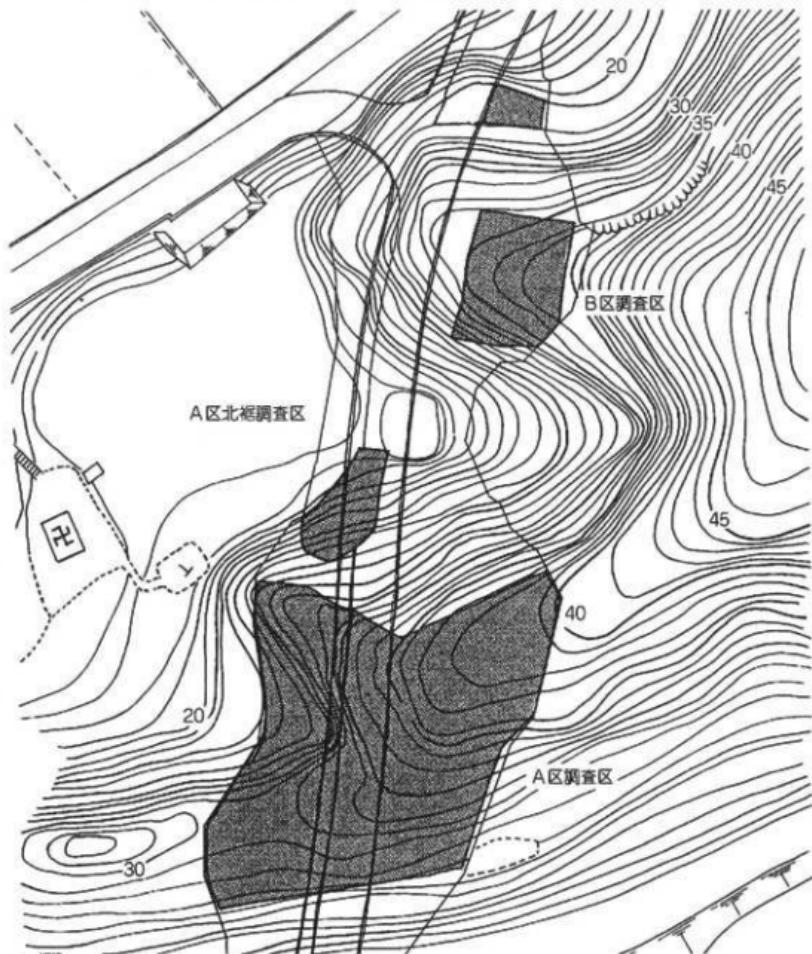
第251図 A区西据検出遺構分布図



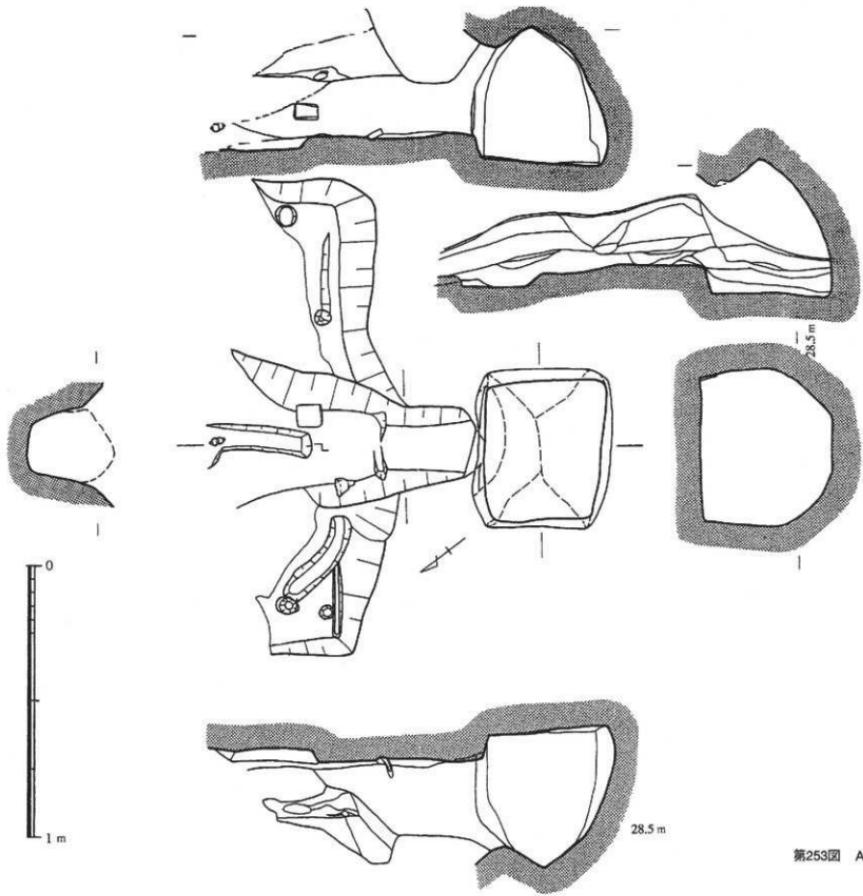
第252図 A区西据1号土坑実測

A区北裾調査区（第254図）

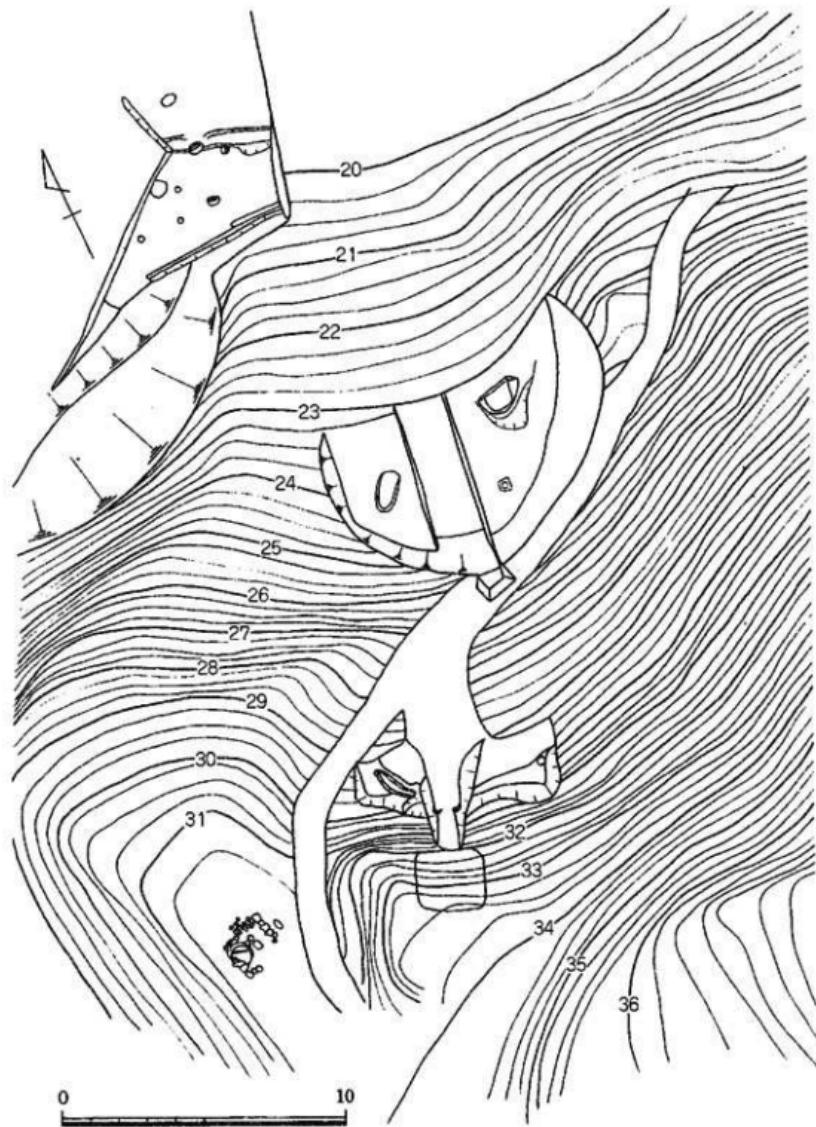
この調査区は、僅かに道路予定にかかる部分を調査したもので、全体の性格を明確にはしえなかった。この部分は、丘陵の斜面を削り、平坦面をつくったもので、柱跡と考えられる土坑、それに伴うと考えられる溝状遺構が検出された。但し、ここで検出したものは、柱穴の大きさからいっても、大規模な建物でないと判断された。また、この建物と隣接して池も所在した。この池は、道路用地に買収されるまで、清水大日堂の西側の安部氏の所有であった。この池の造成時期等



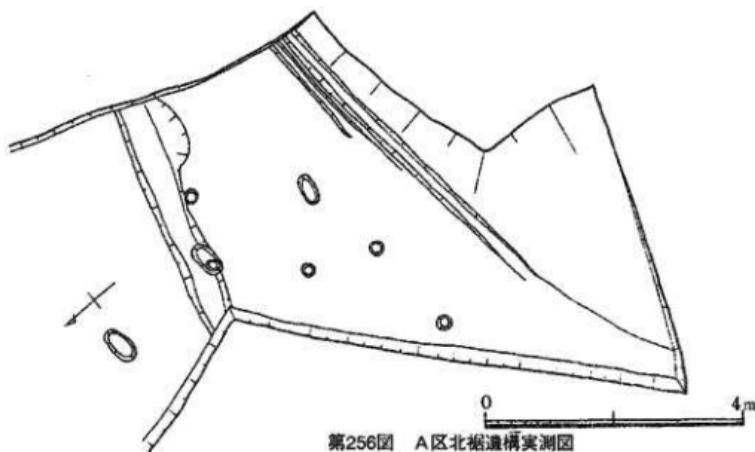
第254図 A区北裾調査区位置図



第253図 A区北横穴実測図



第255図 A区北斜面検出遺構分布図



第256図 A区北据造構実測図

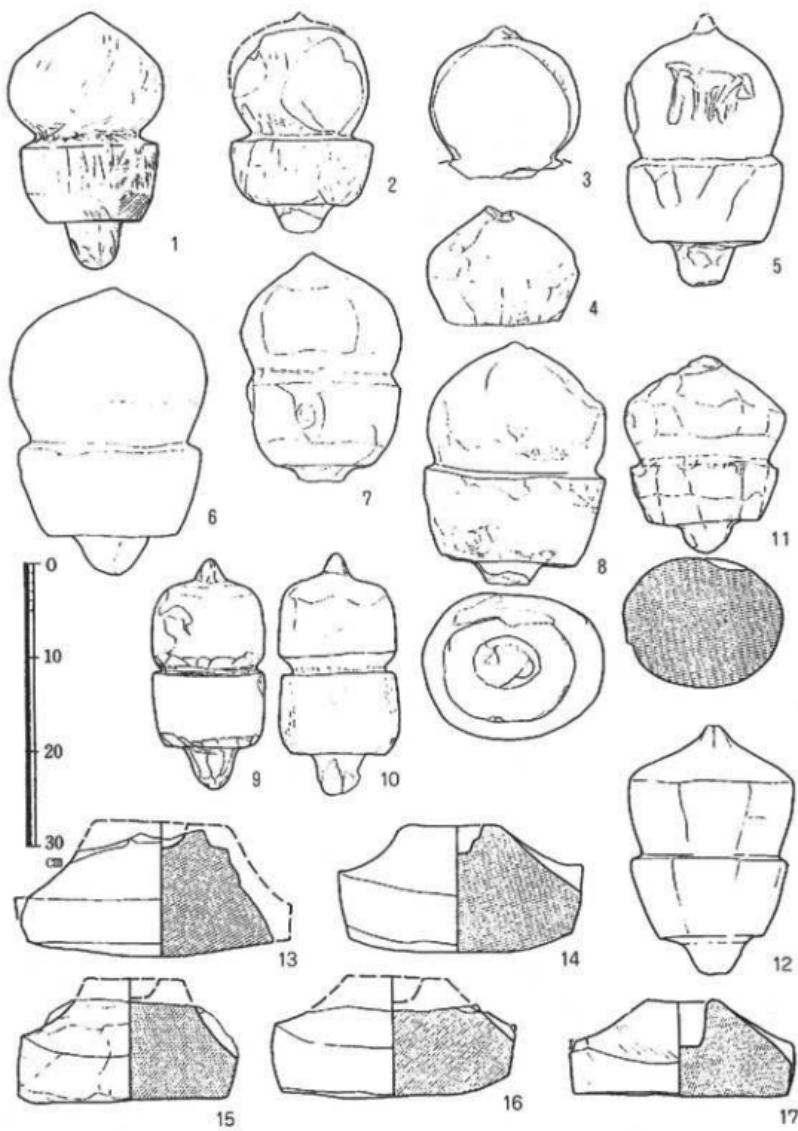
については未詳である。以上の調査等によって知ることができたことや荒神さんや清水大日堂の建物が所在する部分は、一辺100mの四角形を呈する平坦面である。丘陵を削り出して大規模な造成を行った中心施設があるものと考えられ注目される。

掘立柱建物は、梁間2間の3m、桁行2間の4mが検出されている。検出された柱穴の柱間は、一律で梁間の柱間1.5m、桁行の柱間2mである。柱穴の深さは、20cmである。柱穴が検出された地山面には、青灰色の土層に覆われていた。

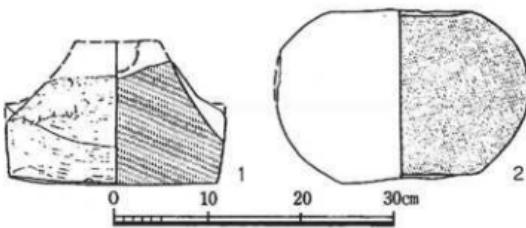
出土遺物は、上記の青灰色の土層中から（第259図）1背磁碗の見込みや2備前瓶の口縁片が出土している。

A区北側谷（第260図）で認められた石製五輪塔である。しかし、ここから検出されたものは、丘陵から落ちた二次的なものであり、五輪塔のセット関係を組むには至らなかった。石材は何れも凝灰岩である。このことはA区北側斜面も同様である。以下特徴を抽出して記すこととする。

（第260図1）比較的小型の空風輪で、風輪の上部を欠損している。空輪の径13cmを測る。横断面は正円形を示し、空風輪の境となる溝の加工は入念で、風輪の形態が球形に近いものと考えられる。（2）は出土したものでは大型の空風輪で、風輪下端から空輪頂部まで26cm、空輪径1.7.5cm、風輪径1.6cmを測る。空風輪の境となる溝の加工は比較的入念で、風輪の形態が球形に近いものである。（3）は出土したものでは大型の空風輪で、風輪下端から空輪頂部まで25cm、空輪径1.9cm、風輪径1.9.4cmを測る。（4）は出土したものでは中型の空風輪で、風輪下端から空輪頂部まで21cm、空輪径1.5.6cm、風輪径1.6.5cmを測る。この（3・4）二つの風空輪は、断面V字形の溝を荒く入れ、空風輪の境としいる。溝の加工や全体の面取りが不徹底で、滑らかな曲線を成すに至っていない。横断面は梢円を呈す。（5）は水輪で、水輪の径29.5cm、高さ20cmを測る。この水輪は、上下面取り加工を最小限に止めたもので、火輪・地輪に接する部分に僅かに内側が施されている。（6）は火輪である。火輪の軸幅22.5cm、高さ13cmを測る。四隅の反りは顯著ではなく、軸下端から四隅端部までの反りは1cmを測る。空輪を差し込む穴があり、深さ5cm、径4.8cmを測る。表面には加工痕跡を留めるものである。



第257図 A区北斜面出土遺物実測図(1)



第258図 A区北斜面出土遺物実測図（2）

A区北側斜面（第257図）から出土した石製五輪塔である。

（第257図1・2・3・4・5・6）は空風輪の境となる溝の加工は入念で、風輪は球形に近く、横断面は円形を呈する。（1）は下端から頂部まで27cm、空輪径16.5cm、風輪径14.5cmを測る。（2）は空輪径15.5cmを測る。（3）は空輪径15cmを測る。（4）は空輪径15.5cmを測る。（5）は下端から頂部まで28cm、空風輪ともに径16.5cmを測る。（6）は大型の空風輪で、下端から頂部まで30.5cm、空輪径19.5cm、風輪径20.5cmを測る。（7・8）は空風輪の境に断面V字形の深い溝を巡らす。横断面は円形を示し、風輪上部が滑らかな曲線を成すに至っていない。（7）は下端から頂部まで24.5cm、空風輪径ともに20.5cmを測る。（8）は下端から頂部まで25.5cm、空風輪径ともに23.5cmを測る。（9・10）は、断面に深い溝を巡らし空風輪の境とし、風輪突起が鋭角的に突出するもので、滑らかな曲線を成すに至っていない小型のものである。（9）は下端から頂部まで24.5cm、空風輪径とも12cmを測る。（10）は下端から頂部まで26cm、空風輪径とも12cmを測る。断面U字形の深い溝に円形の工具の痕跡が巡る。（11・12）の横断面は円形を示し、空輪の最大径は中央よりやや上に位置し、断面は多面形を呈する空風輪である。（11）は下端から頂部まで27cm、空輪径15.5cm、風輪径17.5cmを測る。空風輪の境は断面V字形の深い溝を巡らす。（12）は下端から頂部まで26cm、空輪径16cm、風輪径17.5cmを測る。横断面は正円形を示し、丁寧に仕上げられている。（13・14・15・16・第257図1）は軒部の反りある火輪である。（13）は軒幅29cmを測る。

頂上部を欠損している。(14)は軒幅25cm、高さ13.5cmを測る。

(15)は軒幅23cmを測る。(16)

は軒幅26cmを測る。(第258図

1)は軒幅22.5cmを測る。表面

には加工痕跡を留めるものであ

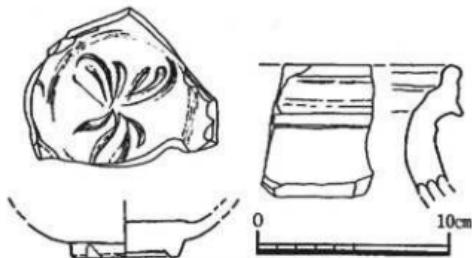
る。(第257図17)は軒部の下端

が水平な火輪である。軒幅24cm、

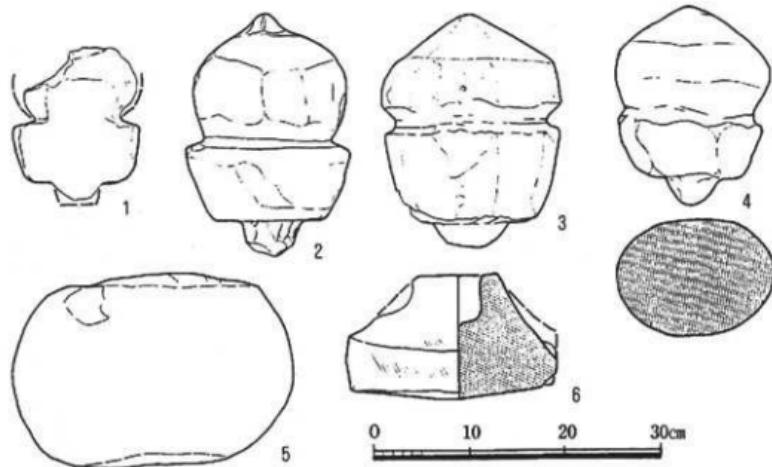
高さ10cmを測る。下端の火輪に

接する部分は僅かに内削が施されている。表面には加工痕跡を留めるものである。(第258図2)

は水輪で、水輪の径27cm、高さ17.5cmを測る。この水輪は、火輪・地輪に接する部分に僅かに内削が施されている。



第259図 A区北据出土遺物実測図(1)

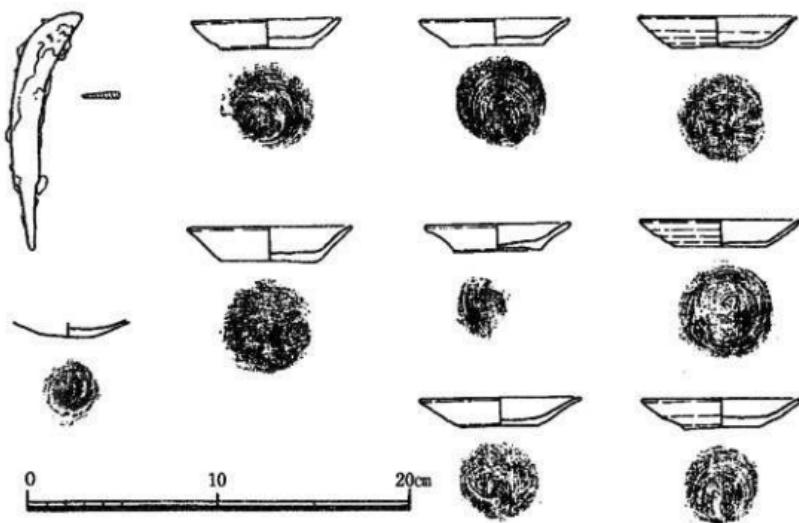


第260図 A区北据出土遺物実測図(2)

かさもりさん

調査区丘陵の北側斜面中腹部分下に、かわらけが多数表採できるところがあり、調査が始まつてそこが「かさもりさん」と呼ばれて、昭和30年代位まで祀られていたと古者は言う。調査時まであった神木の回りにかわらけに団子をのせてお供えしたと言う。この木は、2代目であったと言う。また、この木の東側には半月状の平坦面が検出された。この平坦面は、斜面を削りだしてつくられており、洞が設置されていた可能性があり、調査を実施した。結果、この平坦面は、斜面部分が1.0m、奥行き2.6mであり、梢円形の浅い土坑が3つ検出されたものの、この平坦面にどのようなものが所在していたのかを明確にすることはできなかった。ここからは、前述したように、主に祀られていた神木を中心に、かわらけ、寛永通宝、小形薙刀状鉄器などが出土している。

この「かさもりさん」であるが、病氣、疫病の平癒のために、子供が中心となり祀っていたとのことである。また、かわらけに団子をのせて供えることが行われていた。以上のことから「かさもりさん」の由来を考えると、東京都台東区の感應寺の西に鎮座する笠森稻荷が考えられる。この稻荷は、癪稻荷として皮膚病に効験があるとされており、団子を供える習慣がある。どのような経緯でこの他に持ち込まれたかは未詳であるが、宇賀荘町のかさもりさんは、江戸時代に江戸の笠森稻荷からの伝えられたものと考えたい。



第261図 かさもりさん出土遺物実測図

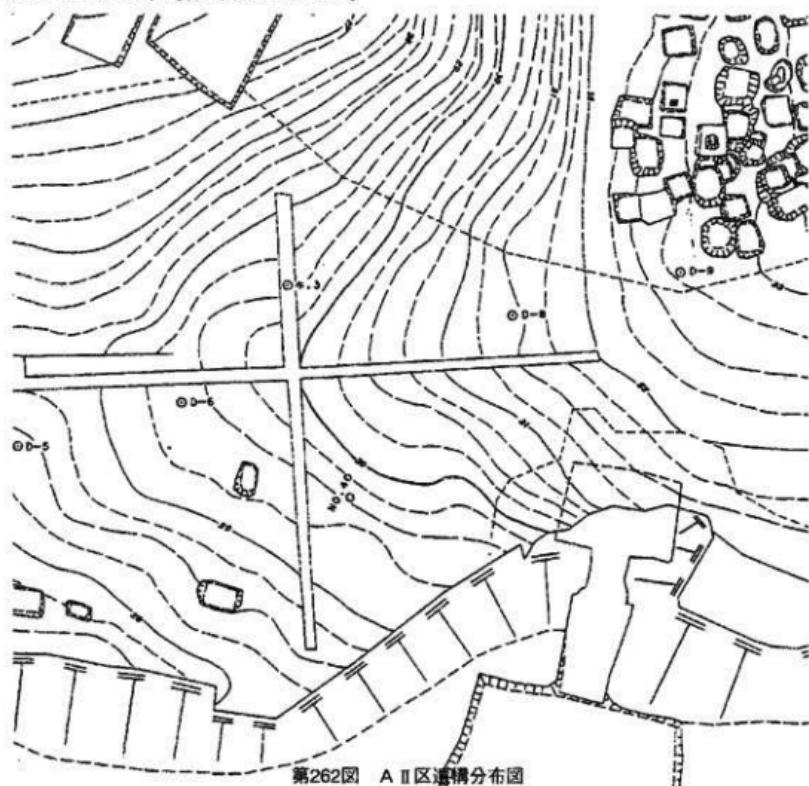
第2節 A II区の調査

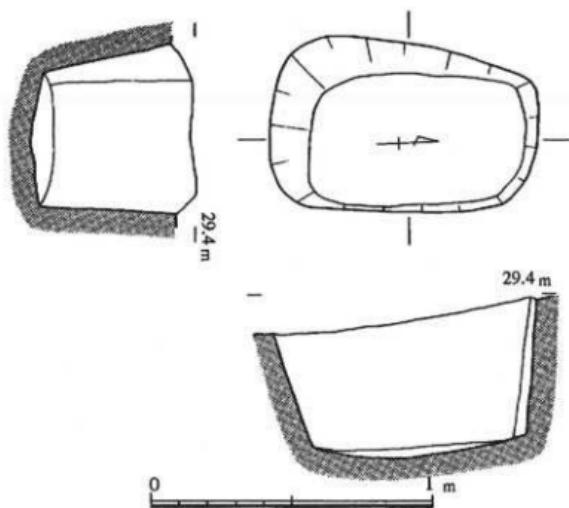
(1) 尾根上で検出した遺構と遺物

A II区の立地は東西にのびる尾根の鞍部に位置する。同一の尾根上に連なるA I区（東方向にあたる）、と調査区外の古墳（西方向）の間にあたる。両地区より高さが低くなる部分であり、標高は約30mである。

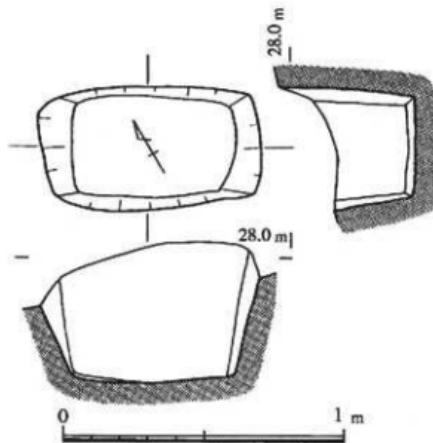
尾根に沿ってベルトを残し、掘り下げたところ、尾根の頂部より南側の緩斜面で4基の土壙墓を検出した。尾根にたいして平行、または直行する。以下その概要を記す。

1号墓（第263図） 素掘りの土壙墓である。4基の中でもっとも北東側に位置する。平面形は上縁部分で長さ0.93m×幅0.55mの小型の溝丸長方形である。床面の形状も同様で長さ0.75m×幅0.45mである。主軸は唯一尾根に直交する。深さは0.5mである。床面の標高は28.8mである。遺物は出土していない。





第263図 A II区1号墓実測図



第264図 A II区2号墓実測図

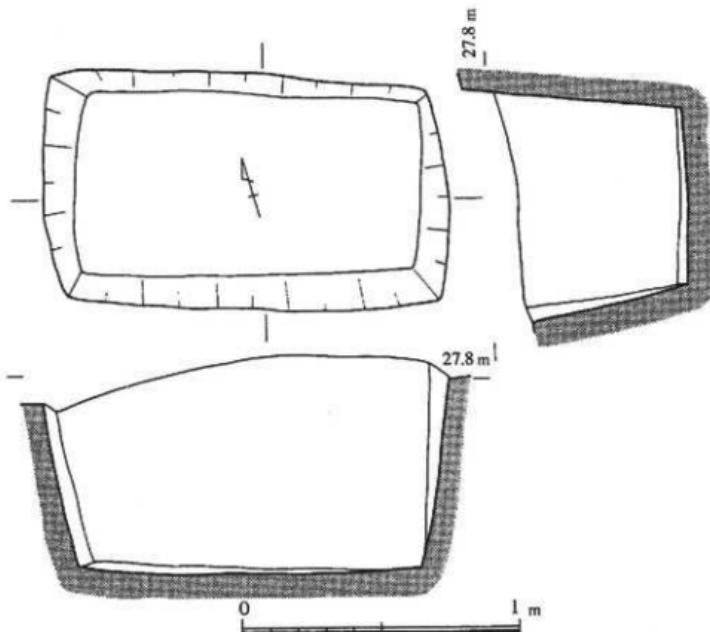
2号墓（第264図） 素掘りの土壙墓である。

土壙墓群の東端に位置する。平面形は上縁部分で長さ1.2m×幅0.75mの長方形である。床面の形状も同様で長さ0.95m×幅0.65mである。主軸は尾根に平行する。深さは0.5mである。床面の標高は28.1mである。

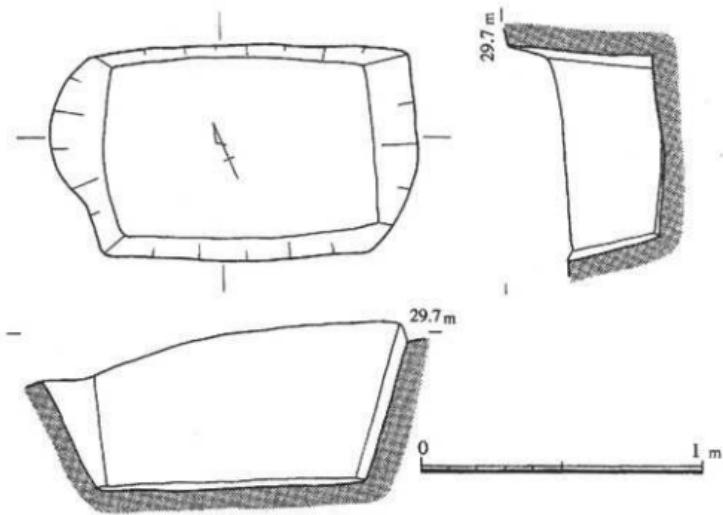
遺物は出土していない。

土層は床面直上に1cmの厚みで赤茶褐色粘土が堆積し、その上は黄色ブロックを多量に含む茶褐色土が堆積する。

3号墓（第265図） 素掘りの土壙墓である。2号墓と4号墓の間に位置する。平面形は上縁部分で長さ0.75m×幅0.43mの小型の長方形である。床面の形状も同様で長さ0.56m×幅0.37mである。主軸は尾根に平行する。深さは0.5mである。床面の標高は27.6mである。遺物は出土していない。



第265図 A II区 3号墓実測図



第266図 A II区 4号墓実測図

4号墓（第266図） 素掘りの土壙墓である。土壙群のもっとも西に位置する。平面形は上縁部分で長さ $1.45\text{m} \times \text{幅 } 0.84\text{m}$ の長方形である。床面の形状も同様で長さ $1.22\text{m} \times \text{幅 } 0.65\text{m}$ である。主軸は尾根に平行する。深さは 0.7m である。床面の標高は 27.1m である。遺物は出土していない。

これら土壙の時期については 素掘りの土壙形態、人骨が消失していることなどはA I東の中世土壙と類似する。よって築造時期も同じく中世ごろと推定される。

第3節 B区の調査

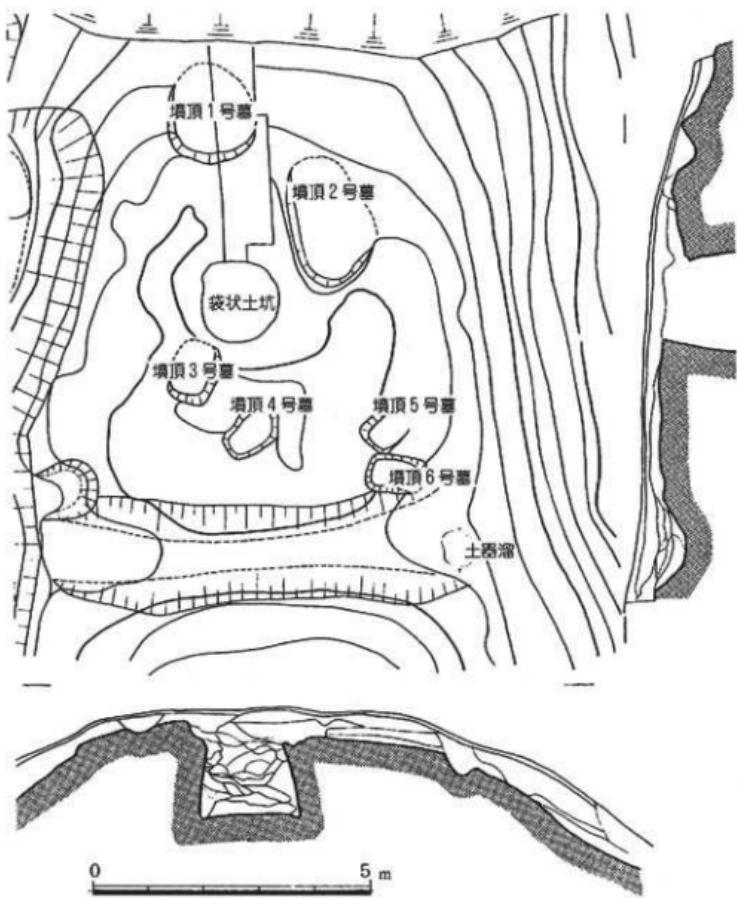
(1) 丘陵頂部で検出した遺構と遺物

清水大日堂裏古墓群B区とした調査区は、前述したA区の北側にあって、今回の調査の原因となつた新設県道布部安来線と現状の県道との取り付け部分の東側に位置している。このB区と前述したA区との間には東に若干入り込む小さな谷があるものの、実は一体のものである。つまりA区、B区ともにその東にあって、県道布部安来線と平行して走る標高50mを測る丘陵から派生する支脈である。B区の丘陵の頂は、標高約35mを測るが、ここでは古墳時代中期に属すと推定されるB1号墳を検出した。このB1号墳の墳上には、火葬墓と推定される墓壙が多数認められた。また後述するが、墳丘の表土中には火葬骨の小片がいたるところでみられた。これは、あたかも火葬骨を散布したことを想定させるような状況であった。

南側斜面では五輪塔を伴う火葬墓の他、火葬墓と推定される墓壙が多数認められた。その他、遺体を火葬に付したとみられる河原石を伴う土坑などを検出した。B1号墳の北斜面、標高約23m付



第267図 B区調査区位置図

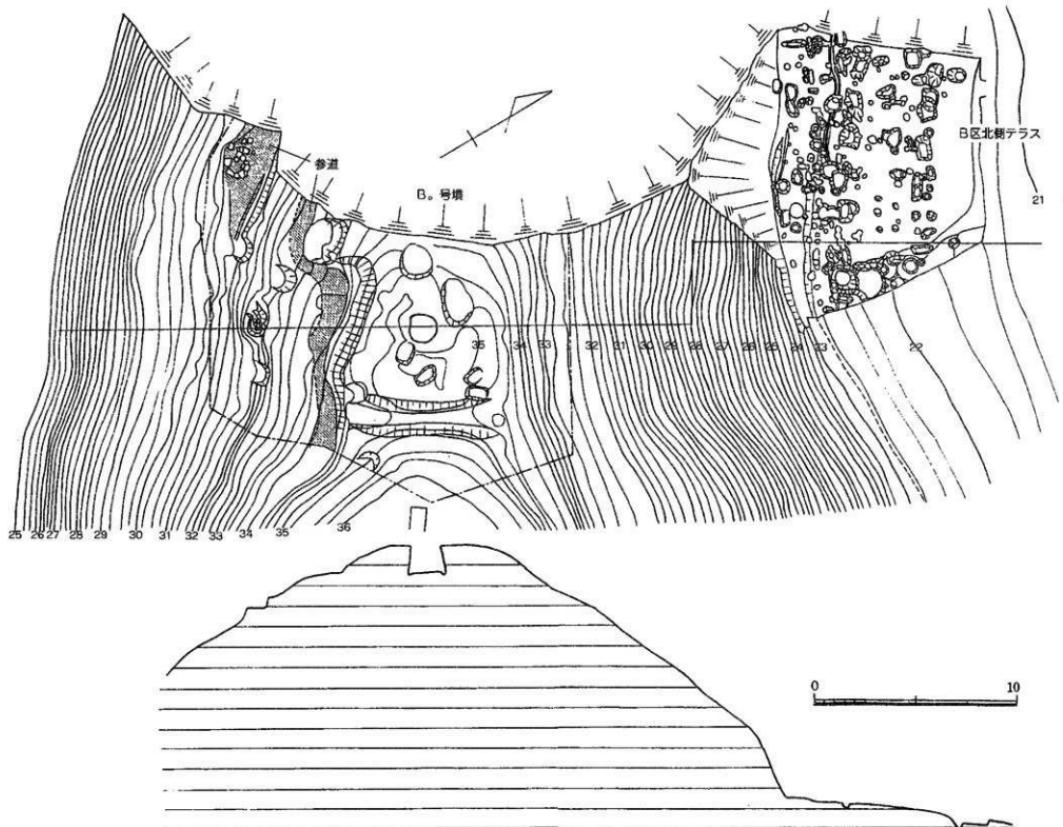


第268図 B区1号墳々丘実測図

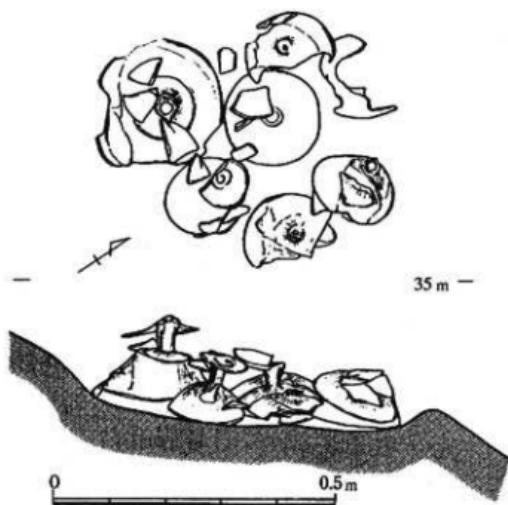
近には幅10mの平坦面が形成されており、この一部が工事の対象となつたため調査を実施した。ここでは、中世末から近世に属すとみられる掘立柱建物、井戸、横などを検出した。これらの遺構は、検出した遺構や遺物が埋葬に関わるものに限定されることから推すと、一般的な住居ではない可能性の大きいものであった。

以下、B区丘陵部で検出した遺構の概要を記すこととする。

B1号墳（第268図）B区丘陵頂部に位置する1号墳周辺は、調査に着手した時点では西側は工事のため既に大きく掘削されていた。本墳の墳丘の築造にあたっては、西方に向かって延びる支脈を



第269図 B 区 棚 出 造 構 分 布 図



第270図 B区1号墳土器窓実測図

東方の高所側において、支脈と直交する溝を設けることによって、方形墓域を造りだす方法をとっている。この事からすると本墳以外にも西方に同様な規模の墳丘が続いていたであろうと推定される。墳丘規模は南北長8m東西残存長9.5m、高さ2mを測り墳丘の主軸方位は、N-60°-Eであった。墳丘の東側の一端を画す溝は上幅1.8m、下幅0.5m、深さは表土下1mを測る。この北端で、土師器の高杯が7個まとまって認められた。これらは、いずれも杯部を伏せた状態で出土した。主体部は墳丘中央部で鉄器が集中して出土したことから、この部分と判断された。

ただしこの位置は、後に触れる袋状土坑と重複していたこととも関係して、その輪郭を明らかにしえなかつた。

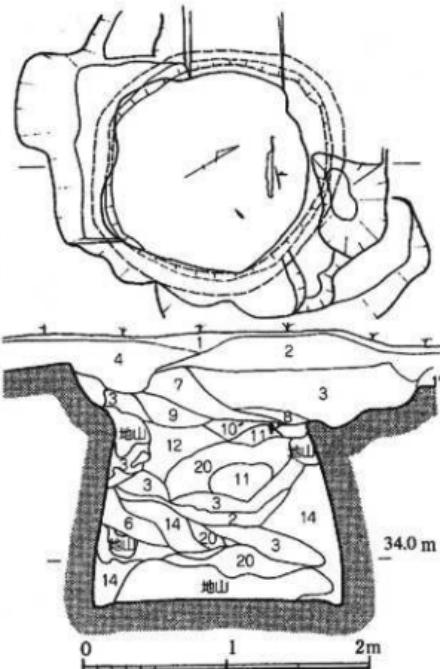
表土を除去する時点で、土中には墳丘全体を覆うように指頭大の火葬骨片がみられた。また墳丘上で大小6個の不整形な土壙を検出した。これらは火葬骨片の分布密度が高いことから、埋葬施設と推定された。

厚さ約20cmを測る表土を除去すると、その下は明黄色の堅緻な地山となっていた。したがって、B1号墳の埋葬施設の調査については、この地山面を四方から中央に向かって追えば容易検出できるものと考えられた。しかし墳丘中央で直径1.5mにわたって暗茶色土の広がりが認められ、この円形を呈すプランが、埋葬施設とは考え難い状況であった。そこで先の円形プランの東端及び墳丘東西中軸線に沿って、サブトレンチを設定し調査を進めることとした。このサブトレンチ内から鉄剣1、鉄鎌2、刀子1を検出した。これら鉄器はB1号墳の副葬品と考えられるものであるが、後述する袋状土坑と重複しており、埋葬施設の輪郭については、それを明らかにしえなかつた。つまり、袋状土坑の口縁部は火葬骨片を含む土層に覆われており、後世の擾乱をかなり受けていること、袋

状土坑の埋土と鉄器周辺の埋土と平面的には識別困難な状態であった。したがって、B1号墳の埋葬施設については、南北方向の土層観察によって壙底の確認と鉄器の出土状態を記録したに止まった。その観察結果からすると、幅は70cmを測り、各鉄器はその面よりやや浮いた状態で認められたことから棺あるいは遺体の上に置かれていたものと推定された。

袋状土坑（第271図）袋状土坑は口徑1.5m、

1. 前黒色土
2. 淡黄色土〔火葬骨を含む〕
3. 2に指頭大的地山ブロックを少量含む
4. 淡黄色土と淡灰色土が混在する
5. 灰茶色〔火葬骨を作う〕
6. 赤黄色土
7. 茶黄色
8. 2に水般的地山ブロックを少量含む
9. 2にこぶし大の地山ブロックを密に含む
10. 淡茶色土〔埋葬施設内〕
11. 明茶色土
12. 茶灰色土に暗灰色土がブロック状に混在
13. 12に黄赤色地山ブロック指頭人が混在
14. 明赤黄色土〔サクサクとした感じ〕
15. 茶灰色土〔サクサクとした感じ〕
16. 明黄色土〔サクサクとした感じ〕
17. 黄色地山ブロックと11が混在
18. 黄色土
19. 黄色砂質土
20. 明黄色土



第271図 B区1号墳中央部検出土坑実測図

深さ1.6m、底径1.75mを測るものであった。土坑の底部はほぼ水平となっており、プランは円形を呈す。壁は内湾しながら口縁部に至り、したがって口径は、底の径より小さい造りとなっていた。袋状土坑の壁沿い底面には断面U字形の周溝が認められた。周溝は幅約10cm、底面からの深さ5cmはを測るものであった。

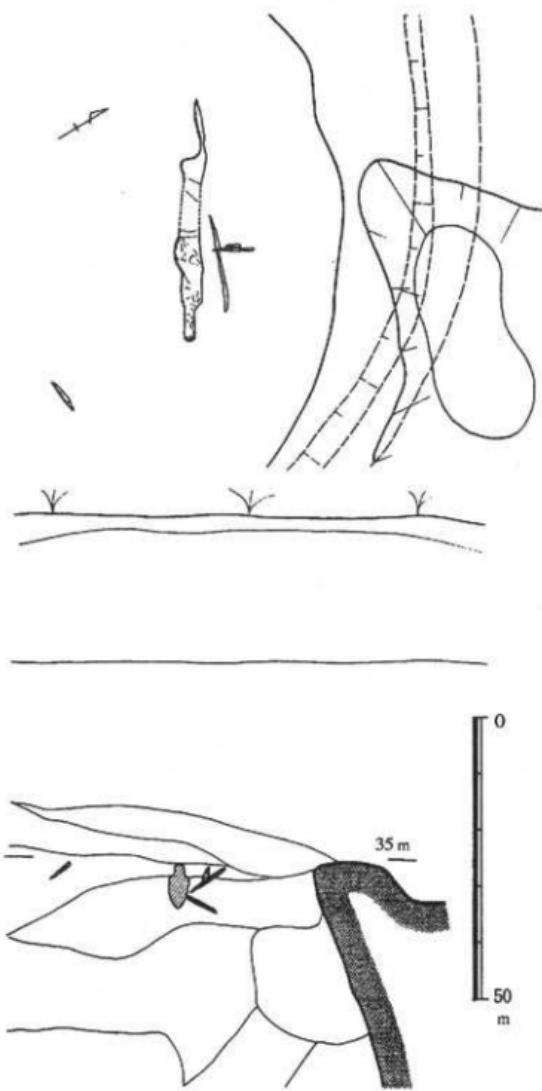
土層の堆積状態は土坑の口縁付近は前述した火葬骨片を含む、土が覆い、その下層の3、7、8、9の各層には火葬骨片は認められなかった。したがって、これらはB1号墳の盛土で、10、11は埋葬施設の中に堆積した土と判断された。埋葬施設の底と判断した面から、上層の火葬骨を含む層までは50cmを測る。

袋状土坑の土層堆積状態は極めて複雑で、明黄色を示す地山ブロックがなだれ落ち、その後、隙間に腐植土が流入したように観察された。内部には穀物などを収納した痕跡は認められなかった。この袋状土坑とB1号墳との直接的な関係は認められなかった。積極的根拠があるわけではないが、B1号墳とはかなりの時期的隔たりがあるものと判断された。

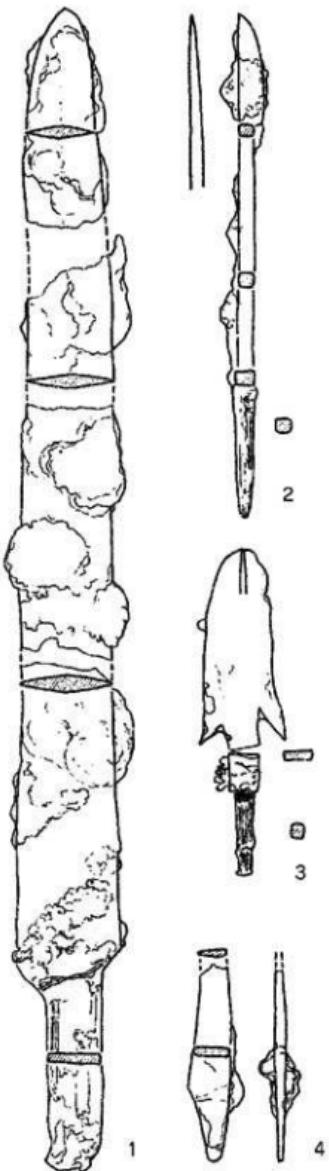
B1号墳第I主体部出土遺物
(第273)

出土遺物はいずれも鐵器で、劍1、鎌2、刀子1であった。劍は2ヶ所を欠損しているが、刃先線を結ぶとその全長は、41cm前後であったと推定される。莖は長さ8cm、幅2cm厚み0.3cmを測る直莖で、莖尻は錯で本来の形態を留めていないが、やや丸みをもっておさまるものとみられる。関部の形態は斜角関あるいはナデ角関と分類されるものである。劍身は幅3.5cmを測り、断面レンズ形を呈す。劍身の厚みは長さや幅に対してやや薄く感じられた。

劍身及び莖尻に木質が認められたことから、外装を付けた状態で副葬されたものと判断された。⁽²⁾ 鐵鎌は平根式の断面レンズ形を呈すものと、長頸鎌と称されるものとの二種がある。前者は比較的深い腸抉を持つもので、鎌身は長さ7cm、左右に聞く腸抉幅は3cmを測る。莖上方には幅1.5cmを測る棒巻きの痕跡が、また莖部過半には矢材の一部が付着しているのが認められた。後者の長頸鎌とした物は全長18cmを測り、鎌身は刀



第272図 B区1号墳鐵器出土状態実測図



第273図 B区1号墳出土鉄器実測

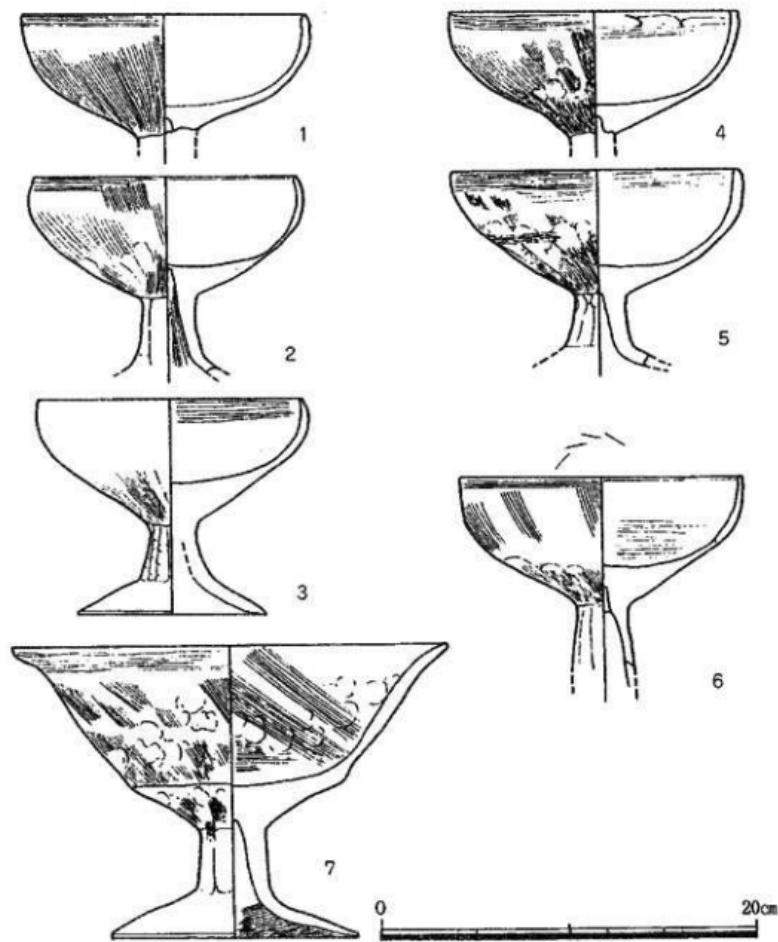
子形の片刃式となっている。範被は長さ9.5cm、幅0.5cmを測り、断面形は正方形を呈す。茎部は長さ5cmを測り、上方に棒巻きの痕跡と、その下に縱方向に走る矢材の纖維が認められた。

刀子は先端部を欠損しており、残存長6.5cmを測り、茎長は2cmと比較的短いといつくりとなっている。関部は鍔が付着し、詳細は不明ではあるが片闇の形態と判断された。刀身の関際は断面長方形を呈し、刃部に向かって重ねが薄くなる傾向は見られない。このことから、刃は関から若干の距離をおいて研ぎ込まれる造りと推定される。

B1号墳溝内出土遺物（第274図）以下記す溝は、支丘の主軸に直行する形で、B1号墳の墓域の東限を画すために施されと考えられるもので、溝内出土土師器はこの北端から出土した。出土位置は溝の北端底面で、支丘の北側斜面傾斜変換点付近にある。出土土師器の器種はいずれも高杯で、伏せた状態認められ、原位置を動いていないと判断された。葬送儀礼に伴う土器のありかたの一端を窺わせた。

これらの高杯は、杯部と比較的短い脚部からなり、脚部は下半部から急に聞く形となって脚端部にいたるものである。ただし、杯部の形態には、二種があって、楕円となる小型なものと、朝顔形に大きく聞く比較的大型のものとがあり、前者6個体、後者1個体がある。

前者はいずれも同様な形態で、杯部の口径15cm、高さ11.5cmを測り、数値もほぼ近いものとなっている。内外面ともに明るい赤黄色を



第274図 B区1号墳土器溝出土遺物実測図

示し、焼成は比較的良好であるが、伏せた状態で長期間風雨にさらされていたため脚部及び、杯外
面は剥離した部分がみられる。杯部外面は、縦方向に目の細かいハケで整え、内面横方向に目の細
かいハケメが認められる。脚部外面は比較的幅の広いヘラ状工具による磨きが施されている。後者

の杯部は外反して大きく開く形態となっており、杯部の口径23cm、高さ15.2cmで、杯部の下半部から脚接合部にいたる中間に稜線が残っている。これが前者と大きく異なる点である。焼成、色調とも前者に類似している。これらの所属時期について、A区西29号墓の北に隣接して検出した土器滴り出土の土器と類似点が多く、ほぼ同時期と推定される。そこでは山陰でも最古の時期に属すと考えられる須恵器を伴っている。従って本墳の時期も5世紀後半頃として大過ないものと思考される。

B1号墳墳丘上出土陶製五輪塔（第275図）以下に述べるのは、B1号墳の墳丘上で得られた直接古墳に伴なわないと判断した遺物についてである。これらは中世の古墓に關わる人頭大の自然石、陶製五輪塔などがあったが、いずれも原位置を保つものでないと判断され、所謂表探遺物である。

陶製五輪塔は小片も含めると約20点近い数となるが、図示しえるものは10点であった。

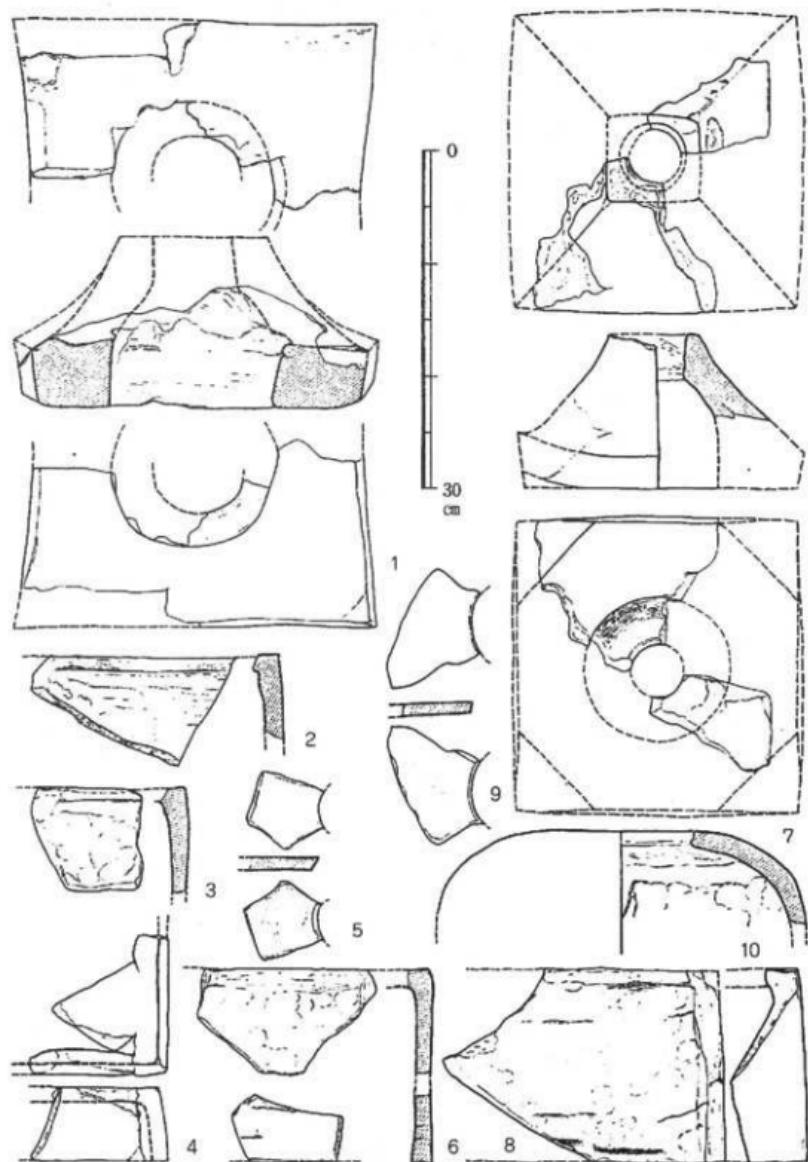
(1) は火輪の一部で、軸幅は28.5cm、軸厚さ5cmを測り、裏面には径14cmの内縁りが見られ、(7)を参考にすれば、この内割りは上の方形平坦面に向かって口径を縮小しながら貫通しているものと推定される。(7)は前述したものよりややこぶりの火輪である。裏面には推定径13cmの内縁りが施され、上部に向かって径を縮小しながら貫通している。上面には風輪が乗る、推定・辺8cmの平坦面がある。本資料には2条しか残存しないがこの平坦面の四隅から寄棟の稜線が軸先へむかって下降していたと考えられる。全体に暗茶色を示し、焼成は比較的良好である。(2~6·8·9)はいずれも地輪の一部と判断したものである。焼成は比較的良好で暗灰色、あるいは黒色を示す。(2~4·6·8)は地輪の側面から上面の一部にかけての破片である。(5·9)は円形の穴の一部が認められる。他の例を見るとこのような円形の穴をもつのは地輪の上面で、下端は底部を持たないものがある。したがって、この2片は地輪の上面中央部の破片であろう。(10)は水輪の破片とみられるものである。胴部最大径32cmを測り、上面には推定径12.5cmの円形の穴がみられる。ただ上下関係は不明である。暗黒色を示し、焼成は不良である。

B区南側斜面で検出した遺構と遺物

B1号墳の南側裾から谷底に向かう斜面の上半で中世の埋葬に關わる遺構や遺物を検出した。

調査当初、この斜面には遺構は存在しないものと思われたが、一応尾根筋と直行する方向に幅1mの試掘溝を入れたところ、以下に記すような遺構の一端を検出した。遺構は斜面の上半の範囲に集中して認められた。検出遺構は2条の参道と推定される細長い平坦面の他、火葬墓5、茶毬跡1であった。火葬墓については、五輪塔を伴うものと、斜面の窪みから火葬骨片が若干認められる程度のものとがあった。ただ後者が当初から墓標を持っていたか否かという点は即断のかぎりではない。つまり、後述するように、調査中に谷底でかなりの数の五輪塔を表探しており、これらが伴った可能性も捨て切れないからである。

道状遺構（第275図）古墓に關わる参道と推定下もので、上下2条がある。上方のものはB1号



第275図 B区1号墳陶製五輪塔実測図

墳の南側に沿って削りた形で作られ、標高32.5~34mにかけて走り、幅1.5mを測る。西端はやや低くなっている。一旦B1号墳側に屈曲し、墳裾に沿って序々に上がった調査区外に至る。西端部が大きく屈曲するのは、B南1号墓を穿ったためと、この道が上方に登ることを意図して作られたことを窺わせた。下方の道状遺構としたものは標高30.5m付近に等高線にそって走る、幅1mを測り、斜面上方側に幅20cm、深さ10cmの側溝を備えている。西端は工事で削られ、東端は調査区のはば中央で、崩壊している。これは、この部分の傾斜が急であることに加えて、地盤が軟弱であったことに起因するものと考えられる。この道状遺構の南辺には、後述するB南5~7号墓がある。

火葬墓（第276~278図） B南1~7号墓があり、いずれも斜面を若干掘り窪めた土壤で、埋土中から僅かな火葬骨片が出土した以外、副葬品などは認められなかった。

以下、各火葬墓の概要を示すこととする。

B南1号墓 B1号墳北西隅の若干下方にあって、東西上縁長2m、底部奥行き1m、墳底から斜面掘り込み口までの距離は1.5mを測り、底の平面は小判形となっていた。

B南2号墓 上方の道状遺構の南側にあって、前述したB南1号墓の対面にあたる。東西上縁長1.2m、底部奥行き1m、墳底から斜面掘り込み口までの距離は80cmを測り、底の平面は半円形となっていた。

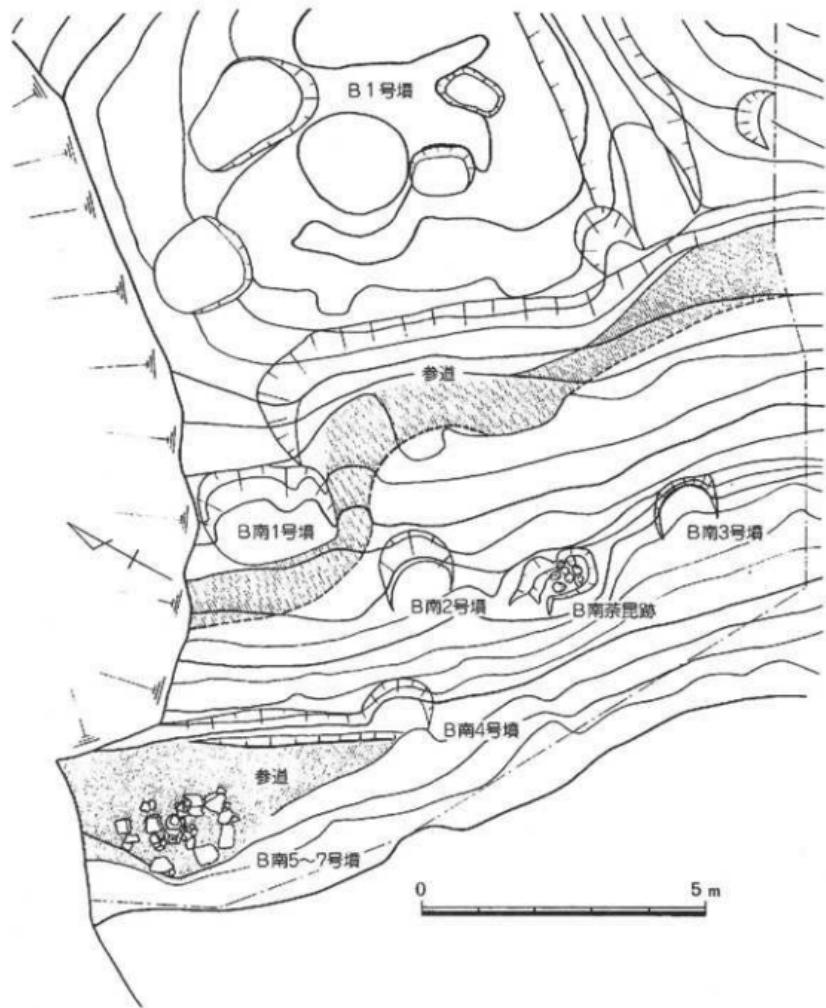
B南3号墓 調査区の中央やや東方、標高32m付近に位置するもので、東西上縁長1m、底部奥行き50cm、墳底から斜面掘り込み口までの距離50cmを測り、底の平面は半円形となっていた。

B南4号墓 下方の道状遺構の東端に接して存在するもので、東西上縁長1.1m、墳底奥行き80cm、墳底から斜面掘り込み口までの距離1.2mを測り、底の平面は半円形となっていた。

B南5・6・7号墓（第277図） 下方の道状遺構の西端南側に接して位置する火葬墓で、石製五輪塔の各部分が折り重なった状態で認められた。この火葬墓が他の例とは異なるのは、道状遺構の南辺に沿って石列が認められる点である。これは上面の平坦な一辺50cm、厚さ20~30cmの石材を複数並べることによって、墓域を画す形となっている。検出遺構としては、道側の辺に対し直角に南（谷）側に曲がる隅部分が認められる。この部分の観察からすると石列は、一段のみであったと思われる。道状遺構及び5~7号墓の造成にあたっては以下のよう順で行われたと推定される。まず南面する斜面の標高31m付近を逆L字状に掘削して平坦面を作る。さらに掘削時に出た土を平坦面の南側斜面に盛り、平坦面を拡張する。盛土部分を埋葬地として使用し、掘削してつくった平坦面（地山）と盛土で作った平坦面の境（道状遺構の南辺）に沿って石を並べ、墓域を画す。石列の内（南）側に五輪塔などを建てるといった工程であろう。

B南5~7号墓は五輪塔の各部分を除去すると、浅い土壤が3つ連結した状態で認められた。

B南5号墓は、平面隅丸方形を呈し、一辺45cm、深さ7cmを測る。内部には火を受けた長骨の他、



第276図 B区南斜面検出遺構分布図

骨片が出土した。成人骨と思われるが、採集した量は1体分には及ばないと判断された。

B南6号墓は5号墓の南に接して、B南7号墓との間に位置する平面指円形の土壙である。長径45cm、短径25cm、深さ9cmを測る。中からは若干の火葬骨片が出土した。

B南7号墓は、B南6号墓の東に接して掘り込まれた土壙である。土壙の上縁は時期を異する掘り込みにより元の形態は留めていないものと判断された。したがって、この土壙の法量は火葬骨のまとまって認められた範囲を若干上回る径50cmほどのものであろうと推測される。

中からは、火を受けた長幹骨の他、頭部とみられる骨片がまとまって出土した。ただし成人1体分には及ばない量であった。壇底から7cm上方で土師質土器杯1点が出土した。この杯がB南7号墓に伴う遺物であるか否かは即断の限りではない。つまり先にも述べたように、時期を異にする掘り込みが著しく、7号墓に伴わない可能性の方が大きいように感じられた。時期を異にする掘り込みについては、五輪塔の建てられた後にも、隨時継続して地輪脇から行われたことが窺えた。そして、五輪塔を据えた旧表土面からも、おびただしい火葬骨片が認められた。このことから火葬骨埋葬に際しては鄭重に土をかぶせるといった意図はうかがえなかった。

出土土器杯（第279図）7号墓の上面から出土したもので、口径11.8cm、底径5.2cm、深さ3cmを測る。焼成は比較的良好で、底部裏面には糸切り痕が認められる。

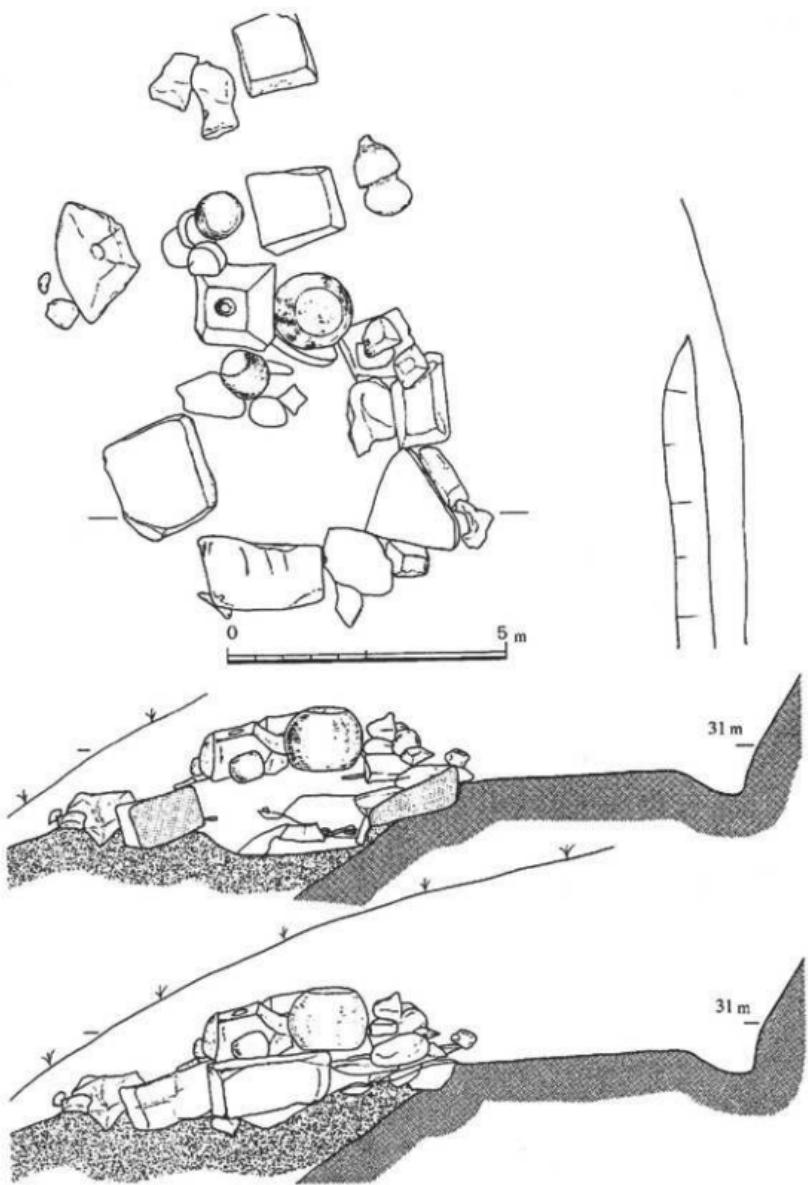
B南5～7号墓出土石製五輪塔（第281図）ここで検出した図示し得る石製五輪塔は、空風輪部3点、火輪部2点、水輪部4点、地輪部2点である。空風輪は風輪部の径より空輪部が若干おおきい作りとなっている。(1・2)ともほぼ同様な大きさで、空輪部径は16cmを測る。(2)は表面の仕上げが入念で、火輪部(5)に似る。火輪(4)はかなり欠損しているが表面は入念な仕上げとなっており、比較的早い時期に転倒して地中に埋もれたものと推測される。頂部平坦面には径5cm、深さ9cmを測る風輪部のほぞの挿入孔が穿たれている。

(5)は高さ20cm、軒幅30cm、軒厚10cmを測る火輪で、腰高である点が注意される。

水輪は3点があるが著しく欠損している。完形の(9)は高さ18cm、最大径27cmを測る。他の3点も径はやや異なるかに見えるが、高さはほぼ同じ値を示すものと推定される。地輪は2点あって、(10・11)とも高さは20cmとほぼ同じであるが、(10)のほうが一辺29cmと一回り大きい。いずれも石質、加工痕跡などからするとセットにはなりえないと判断された。

茶毘跡（第280図）B南12号墓とB南13号墓に間に位置する。

この遺構は、標高32mの位置に等高線に沿って、長径1.4m、短径0.8mを測る楕状の加工段である。中央部が若干掘り窪められ、底面には人頭大の自然石が、不規則に並べられていた。その石の隙間には、薪を燃した残りとみられる炭化物が窪み全域に認められた。炭化物の厚さは約5cmを測り、その中には火を受けた骨片、長幹骨がみられた。周囲の地肌はさほど火を受けた痕跡は見られなかつたが、底に並べ置かれた石はいずれも火を受け、変色していた。これらの状況からこの遺構は茶毘跡であろうと判断された。石は棺を浮かせ、酸素の供給を促す目的で据え置かれたものであろう。



第277図 B南5~7号墓実測図(1)

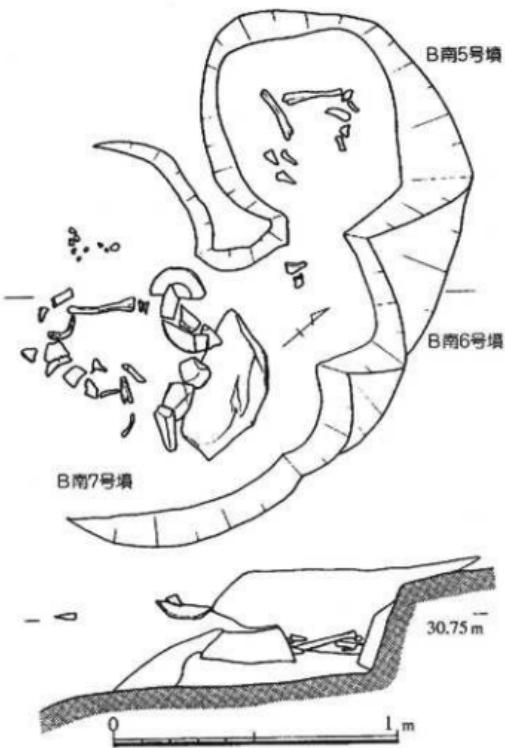
B 1号墳付近出土石製五輪塔
(第282図) 墳壇で認められた石製

五輪塔の部分は、30個近い個数となる。しかし、セットを組むには至らなかった。以下特徴のあるものを抽出して、記すこととする。

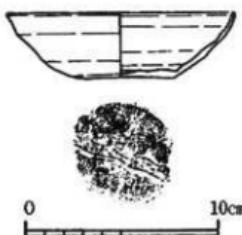
(1・2) 比較的小型の空風輪で、風輪下端から空輪頂部まで18cm、両輪とも径12cmを測る。円柱状の石材の中央に、断面V字形の浅い溝を回らし、空風輪の境としている。形態、加工痕跡、法量から同工の手によるものであろうと判断された。(3)は空輪部の破片であるが、横断面が正円に近く、入念であることが注意され、(4・5)と同様な形態となるものと推定される。(6)は風輪の下端の突出部で上部最大径9cmを測る。横断面は正円形を示し、仕上げは入念である。

A区中S B 0 0 1付近出土の空風輪と接合する事実は重要である。

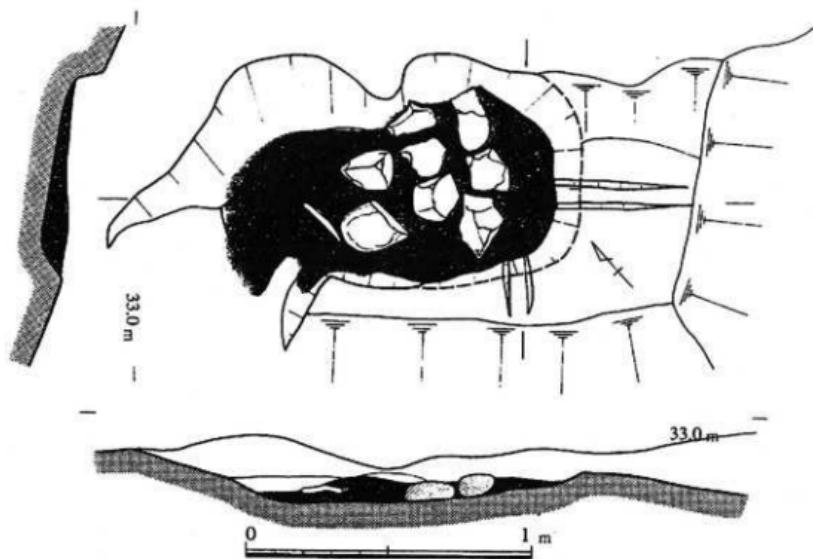
(7・8)は四角柱状の石材中央に、断面U字形の浅い溝を荒く入れ、空風輪の境としている。溝の加工や全体の面取りが不徹底で、横断面は梢円形を呈す。(7)は風輪上部が滑らかな曲線を成すに至らず、未完成品のような感じさえ抱く。(9)もそれらに順じて、粗い作りで、横断面は梢円形を呈す。火輪は2種あって、(10)は軒幅20cmを測る。頂上部を欠損しているが、残存部の曲線からすると、さ



第278図 B南5～7号墓実測図(2)



第279図 B南7号墓出土遺物実測図

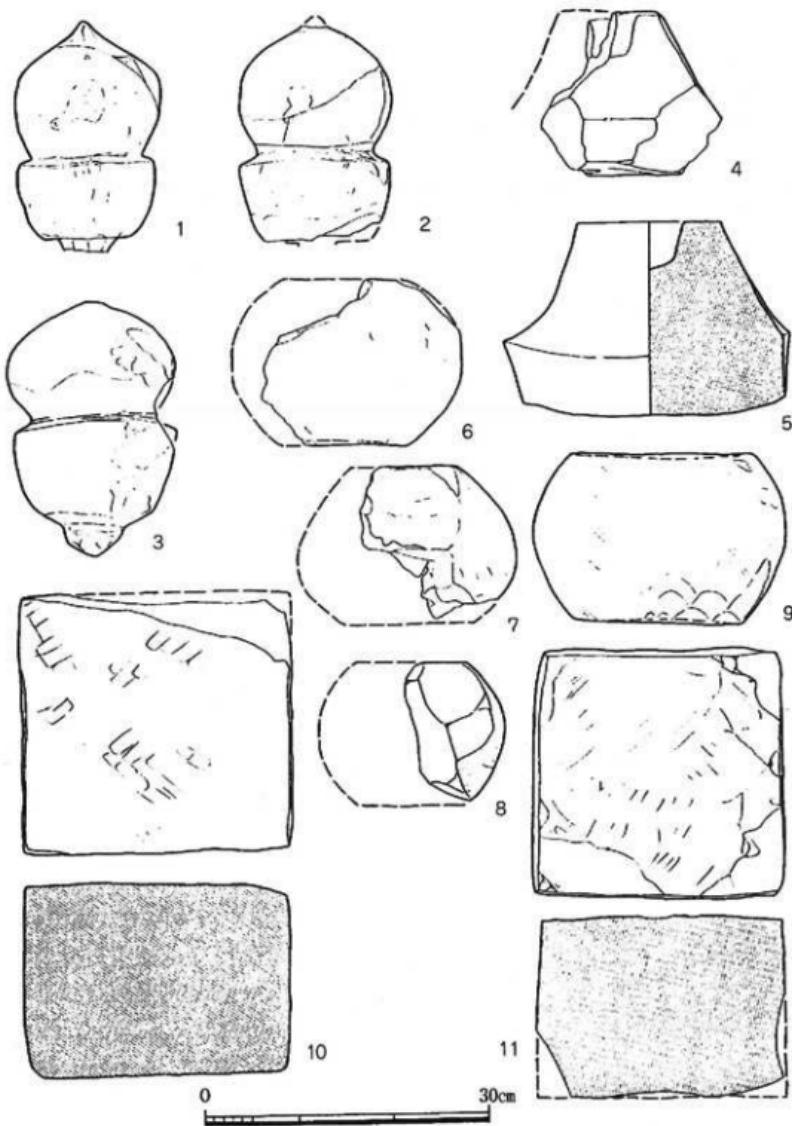


第280図 茶毘跡実測図

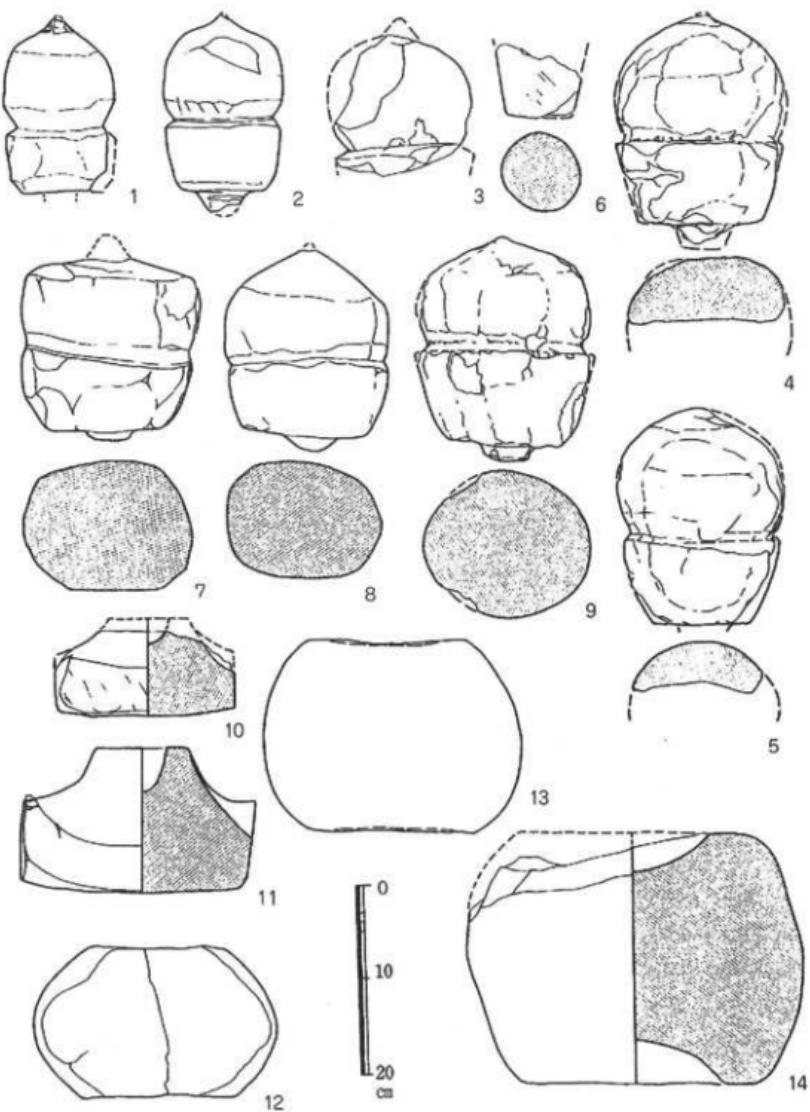
ほど高くはならないものと推定される。(11) 軒幅25cm、高さ15cmを測る。軒の四隅が大きく反り上がり、軒下端からの距離は10cmを測り、特徴的な形態となっている。水輪は二種あって、上下を入れ念に面取りを行い、中央の最大径の範囲が少ないもの(12)、上下面取り加工を最小限に止めたもの(13・14)がある。そのなかでも(14)には火輪・地輪に接する部分に内削が施されている。

地輪は二種あって、(第283図1)は一辺21cm、高さ17cm、(2)は一辺25cm、高さ18cmを測る。(2)はとりわけ入念な仕上げとなっている。(3)は前述した地輪とは異なるもので、地輪の上半部の面を取ったような形態となっており、上面には径18cmを測る正円に近い平坦面が削りだされている。裏面中央には径18cm、深さ8cmを測る内削が認められた。

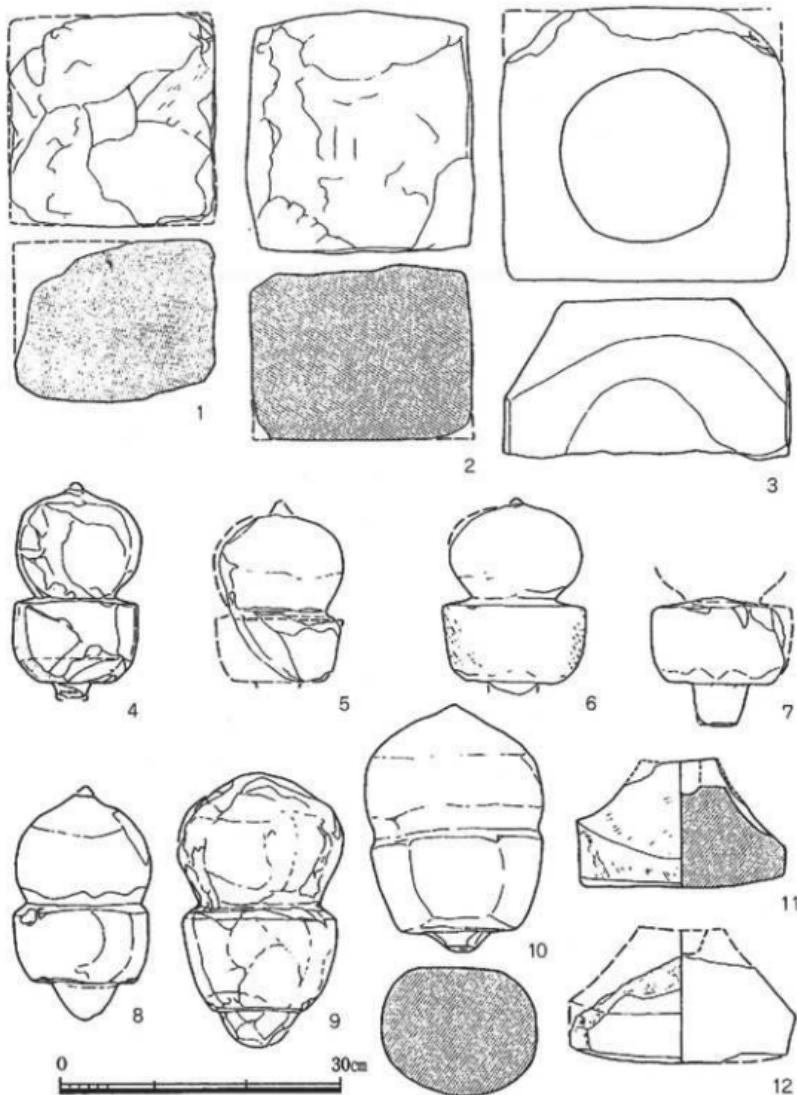
B区南斜面のB南5~6号墓の下方でもかなりの石製五輪塔が得られた。これらは、上方に設置されていたものが転落したのであろう。まず、空風輪から記すことにする。(4~7)は空風輪の境となる溝の加工が入念で、結果空輪の形態が球形に近いものとなっている。A区SB001付近出土の空風輪(1・2)に類似点が多い。(8・9)は前述したものより溝が浅く、若干雑な感じがする。(4~7)の横断面が正円形を示すのに対し、(10)が横断面橢円形を示すのは、施溝や面取り加工が不徹底であることに起因している。火輪は(11・12)ともかなり欠損個所がみられるが、軒幅22cm前後の数値を示す。両者は材質、加工痕跡などから、同工房製作の規格品であろう想像される。



第281図 B南5～7号付近出土遺物実測図



第282図 B区1号墳南据出土遺物実測図(1)

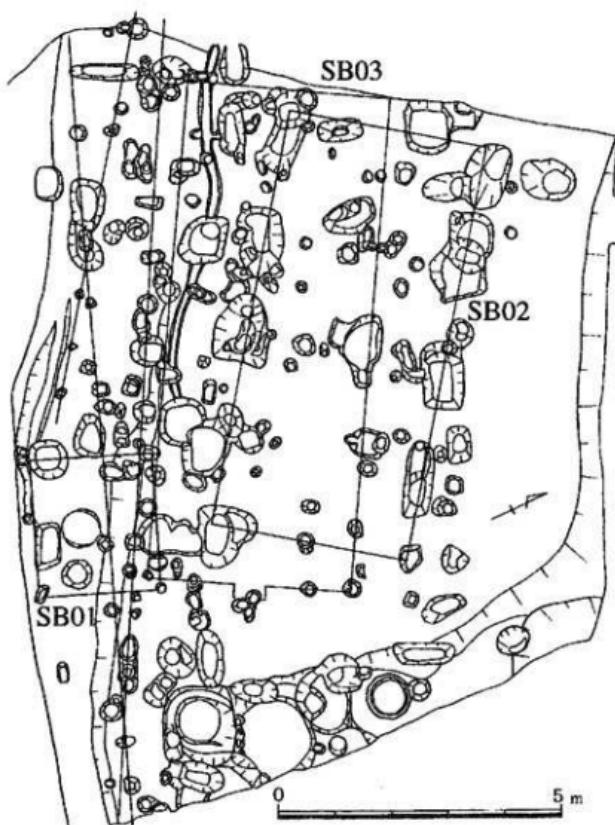


第283図 B区1号墳南裾出土遺物実測図(2)

B区北側テラスで検出した遺構と遺物

B 1号墳の北側には標高23m付近に、幅約10mを測る平坦面が削り出されている。現状は竹藪となっており、当初この平坦面は、造林などを目的とする造成であろうと考えられた。調査の進行にしたがって、以下記すような建物群の存在が明らかになった。この平坦面は丘陵裾部に沿って北東方向へ延びており、調査をすれば、建物の軒数もさらには増えるものと思われる。

検出した遺構は柱穴と推定される落ち込み150個所以上、横状遺構3条、溝状遺構2条、井戸状遺



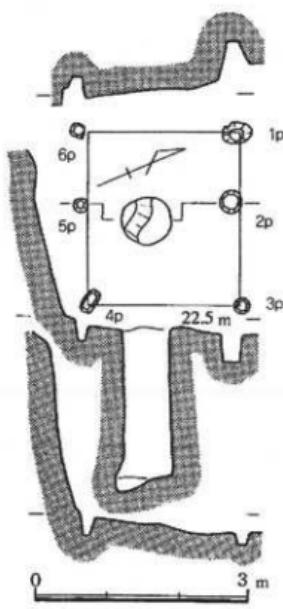
第284図 B区北側テラス検出柱穴群実測図

構1個所などがあった。このうち、柱穴と推定されるものは多数あったが、建物として理解したのは3棟であった。この平坦面は、B1号墳が築造されている丘陵の北側斜面を大きく削って造成されているため、現地に立って南を見ると、B区北側斜面の掘削前面が屏風のように立ちはだかり、隔離されたように感じられる。したがって、周辺の竹や樹木がたとえ皆無であったとしても、日当たりは悪かったことは想像に難くない。

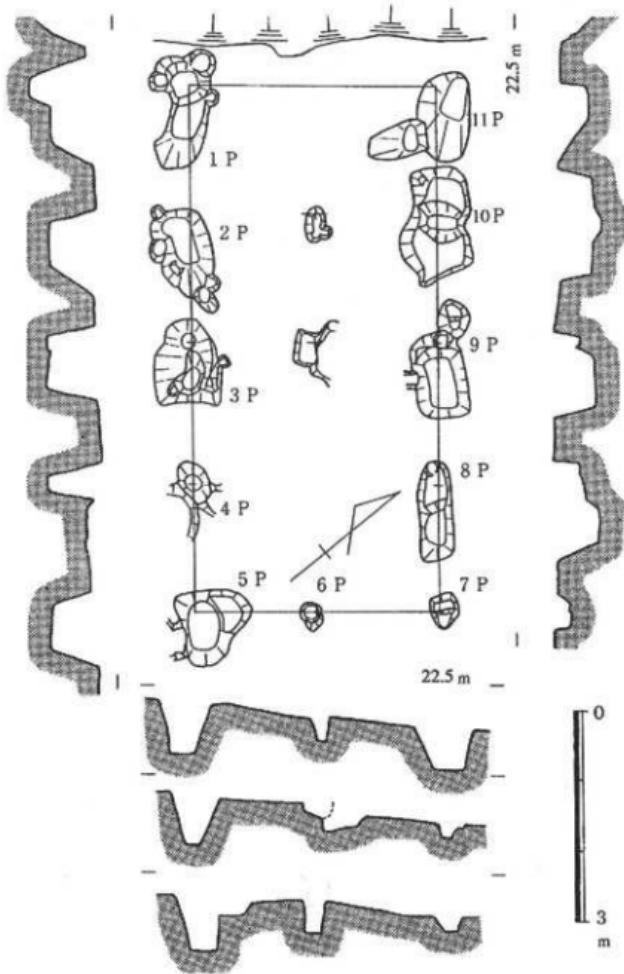
B区SB01（第285図） この建物は平坦面の南辺、つまりB区北斜面の掘削下端に接して検出した東西棟で、桁行2間（2.4m）、梁間1間（2.1m）の規模をもつ掘立柱建物である。建物主軸方位はN-65°-Eである。柱間寸法は南側桁行1m・1.4m、北側桁行1m・1.4mとなっている。この建物プランのはば中央で、井戸と推定される円形掘方を呈す素掘り土坑が1個所認められた。土坑は径0.65m、深さ2.15mを測るもので、掘り込みは垂直となっている。底は北半部がほぼ水平となっているが、南半部は若干深く掘り下げられている。底部の一部が若干掘り下げられているのは、水垢を沈殿させその上澄を汲み取るための工夫と解される。調査時の観察からすると、土を掘り上げた状態で1日放置した場合、底部に近い土坑壁から地下水がしみ出して水深約50cmほど溜ることを確認している。B区SB01は井戸の覆屋の施設であったと判断された。

B区SB02（第286図） この建物は、調査区中央で検出した東西棟で、西方は調査着手以前に工事による掘削で失われている。桁行5間（7.4m）以上、梁間2間（3.5m）の調査区内で最も大きな規模の掘立柱建物である。建物主軸方位はN-50°-Wである。柱間寸法は南側桁行1.8m・1.8m・2m・1.8m、北側桁行1.8m・1.8m・2m・1.8mとなっている。一方、東側の梁間の柱間寸法は1.75m、17.5mとなっていた。

各柱穴の掘方は長方形、円形などの他、形容し難い不整形もの、さらに大きさも様々であった。掘方は大きいものは長径1m、短径0.7mを測るP9などがあるが、柱の痕跡をみると径20cm前後の掘方に比較すると意外に小さいものであった。そしてP1・2・3に見られるように1個所の掘方に複数の柱痕跡が集中する例がみられた。P1の場合5回、P2は6回、P3は4回以上の建替えによったと



第285図 SB01 実測図



第286図 SB 02 実測図

みられる柱痕跡が確認された。この例からすると、柱痕跡に対して掘方が大きくなる原因としては、

建物のプランを当初のままと
して老朽化した部材が取替え
られた可能性が考えられる。

つまりSB02は、同じ場
所でプランを変更することなく
長期にわたって存続する必
要があった建物ということが
できよう。

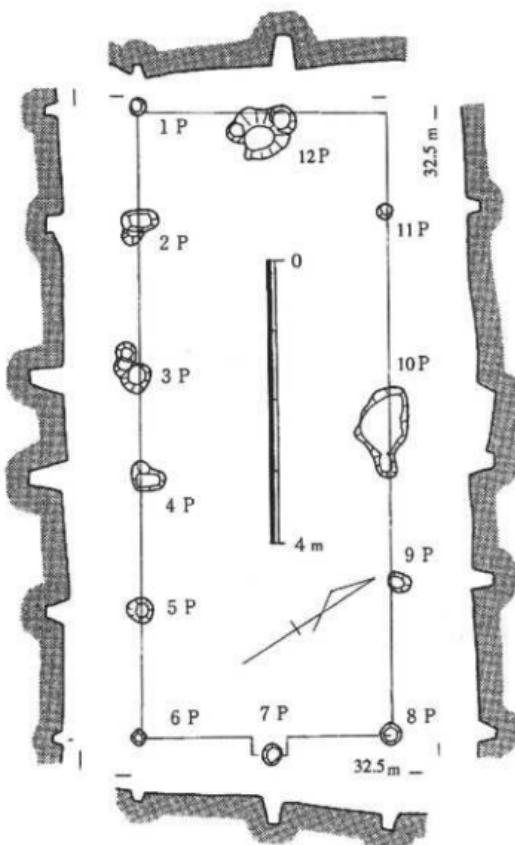
B区SB03(第287図)

この建物は、前述したSB02
と主軸方位を若干異なる東
西棟で、そのプランの大半は
SB02と重複している。桁行5
間(8.7m)、梁間2間(3.6m)
の規模の掘立柱建物で、建物
主軸方位はN-58°-Wである。
柱間寸法は南側桁行1.8m、
1.8m、1.5m、2.1m、1.5m、
北側桁行2.1m、1.8m、1.5m、
1.95m、1.4mとなっており、
一方、梁間の柱間寸法は東側
は1.8m、1.8m、西側は1.5m、
2.1mとなっていた。

S A 0 1 ~ 0 3 (第288図)

B区北側斜面の掘削面下端に
沿って東西に走る柱列で、西
端が工事に伴う掘削によって失われているため、その全容を窺うことは出来ない状態となっている。
構あるいは垣と推定したものである。これらは、同様な場所にありながら互いに主軸方位を異にし
ている。それらの用途としては、掘削面の下端に体積する崩落土を、建物側に流入させないための
施設であった可能性が考えられる。

S A 0 1 は3条の柱穴列中最も南側、つまり崖の下端に近い位置で検出したもので、主軸方位は



第287図 SB03実測図

N-52°-Eとなっており、残存長6.6mを測る。柱穴列は計7個の柱穴で構成され、全体に法量は不揃いで、個々の法量はさほど大きいものではない。ただし、P4、P7が深さ60cmと、特に深いことが注意される。

S A 0 2 は 3 条の柱穴列、中央に位置するものである。

主軸方位は N-70°-E となっている。残存長11.4mを測る。柱穴列は、計13個の柱穴で構成され、個々の法量は S A 0 1 と大差はない。

S A 0 3 は 最も 北側に位置するもので、主軸方位は N-60°-E を測る。柱列は計17個で構成され、前述した2例より個々の法量は若干大きいことが目に着く。

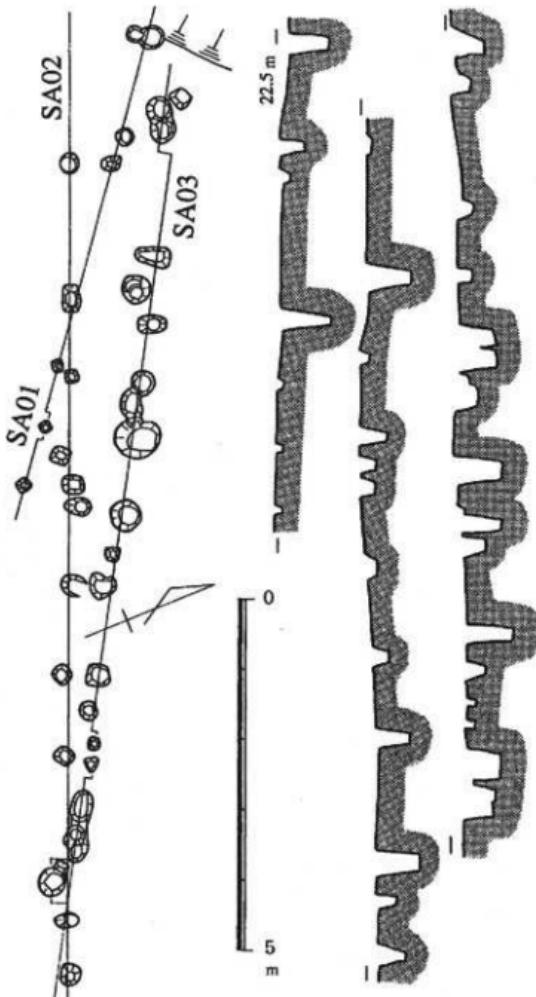
出土遺物（第289図）

出土遺物は意外に少なく若干の陶磁器片と小柄の一部を得たにすぎない。

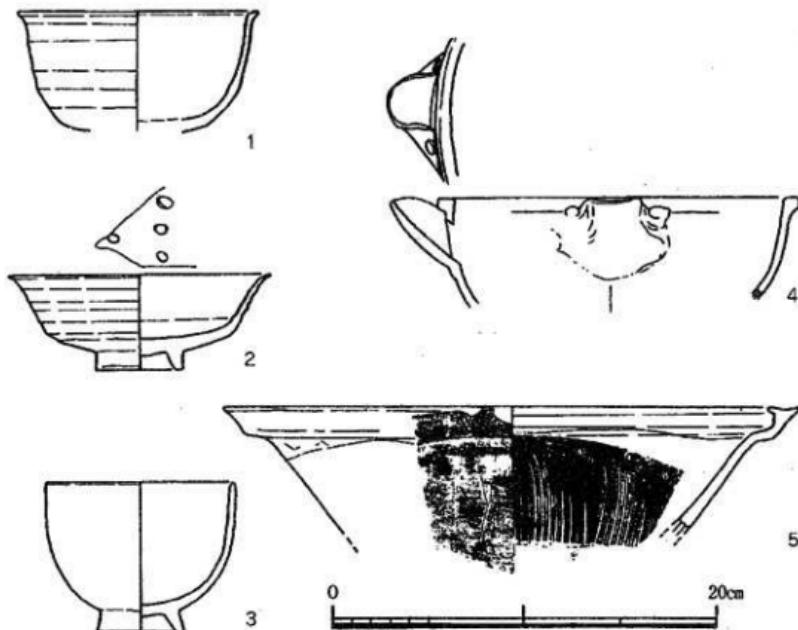
(1) は 磁器の比較的大ぶりの碗で、口径16.7cmを測る。

内外面に灰緑色の釉がかかる。15世紀代の輸入陶磁器である。(2) は 磁器の皿で、高台はシャープに削り出され、口径14cmを測る。内外面ともに淡黄白色の釉がかかる、唐津系陶器である。見込み面には「め跡」が4点認められた。

(3) 陶器の碗で、口径10cm、高さ8cmを測る。身はゆるやかに弧を描いて立上り、全体に腰高とな



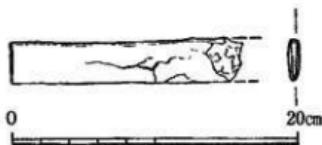
第288図 S A 0 1 ~ 0 3 実測図



第289図 B区北側建物群内出土遺物実測図（1）

っている。(4)は陶製の片口で、口径19cmを測る。内外面全体に乳白色の釉がみられる。(5)は陶製のすり鉢で、口径30cmを測る。内外面とも明茶色を示し、良く焼締っている。内面には10本を単位とする「おろしめ」がみられる。(第290図)は小柄の柄の一部で、残存長8cmを測る。銅製で、残存状態は悪く、装飾等は剥落している。

本来刀剣の付属品となるものであるが、一般的に万能小刀として使用されたものと思われる。これらは、いずれも近世中葉から後葉に属するものと推定される。



第290図 B区北側建物群内出土遺物実測図（2）

第4節 C区の調査

(1) 調査概要と出土遺物

はじめに

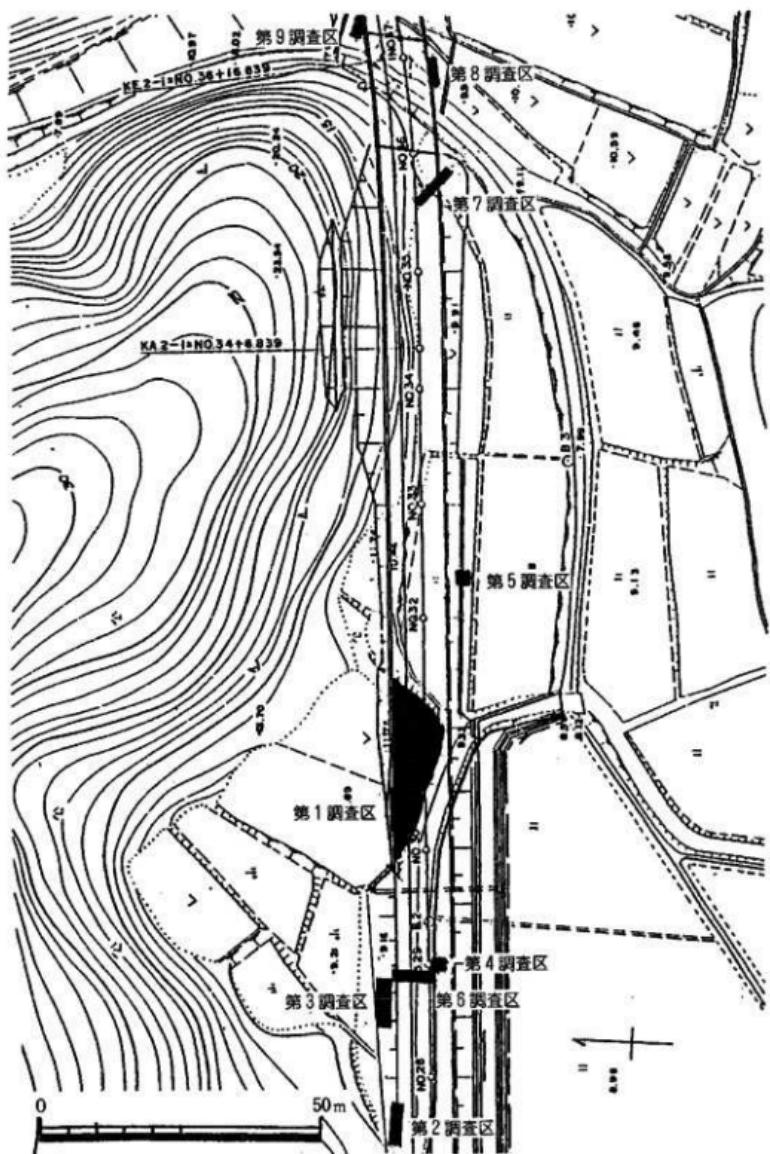
C区で遺構が検出された丘陵は、宇賀荘町字牧で、鎌倉時代末（元亨2年—1322）の創建である瑞塔山天長雲樹興聖禪寺（雲樹寺）の開基である牧新左衛門の居宅口承のある地域である。また、調査区の東側には、「千才」と呼ばれる池が存在し、鎌倉時代末の雲樹寺の創建に際して谷奥の丘陵を切り開いて池の水を尾根を隔てた隣の谷に流したとしている口承で、その時の伝承として、この雲樹寺に関わる伝承として、大蛇伝説がある。これは、寺院創建時に今回のA調査区と雲樹寺の間にある切り通しを造った際、池に住む大蛇も水と一緒に出ていき、財力を有していた牧家は、没落してしまった、というものである。かなりの水を有する沼であったことを物語ることとして、時代は明確ではないが、雲樹寺から清井町の間は舟で往来していたという、口承も周辺にある。

以上のことから、2つの口承を確認するため、平成7年8月17日から発掘調査を実施した。調査を実施にあたり、牧新左衛門の居宅口承のある丘陵部分で、現状では、竹林や煙となっており、斜面については、陶磁器等の捨て場とされていた。煙に使用されていた部分に最初にトレンチを設定し調査を開始したが、その後、小さな柱穴らしいもの等が検出されたことから、9月11日から、道路に伴う買収された範囲を機械を導入して発掘調査するに至った。池の口承調査等については、島根大学理学部徳岡隆夫教授の指導を受け、池の痕跡から解明するための調査区を設定した。調査区は、丘陵部分の第1調査区と水田部分に8カ所を2から9調査区と称して記述する。特に第2・3・4・5調査区は、徳岡教授の指導に基づき、設定して調査を実施した。

第1調査区

丘陵部分では、2基の地下式坑、井戸、柱穴群が検出された。特に2基の地下式坑は、地山の落盤しているため、土の色調が判然とせず、それが、地下式坑であると判断するのに、かなりの時間を要した。

1号地下式坑（第293・294区）丘陵調査区のほぼ中央で検出された。道路予定で買収された部分と未買収部分のほぼ中央部分で分断されており、その関係で、半分しか調査はできなかった。しかも、ポールによる調査により、地表面から床面まで330cmであり、これを掘り抜くと、調査壁が崩落する可能性が極めて高く、調査上から、一度は、床として使用されたと考えられる200cmの面部分までの調査で止めることとした。検出したのは、東西270cm、南北120cmの範囲であった。入り口と部屋との中央を主軸とするとほぼ磁北を主軸としている。この土坑には、当初柱穴と考えていたが、入り口も残されていた。この直径は70cmで斜めに部屋に続いている。今回調査を止めた部分は、入り口の部分の土層からは、床として使用していたものと観察できる。そして、この



第291図 C区調査区配置

面でも、水を多量に含む土の状況である。内部からの出土遺物は、検出できなかった。

2号地下式坑（第295図）1号地下式坑の西方約3mの丘陵先端部分で検出された。全てが調査区の中に所在している。床面の規模は、東西210cm、南北260cmで、床面から残存している天井部分までの高さ180cmである。主軸は、N-40°-Eである。この入り口は、天井部の崩落時に、崩落したものと考えられる。入り口は、階段状の明確なものはないものの床面に近くなることに緩やかな傾斜となるよう据られている。天井部が北側部分で僅かにこっており、厚さが50cmである。床面には天井部がのこっていた時期に流れ込んだと考えられる粘質土が僅かに確認されており、その上部は全て崩落とその後の流れ込みである。従って、地下式坑は、土が流入しなように管入り口部分で方法は未詳であるが、管理がなされていたものと考えられる。調査で床面の流入した土を取った後には、浅く水がたまる状況である。

出土遺物は、坑中央の床面に倒立した状態で五輪塔の空・風輪部分が検出された。この五輪塔部分は、人為的に置かれたものというより、転がり落ちや斜めに倒立した状況で停まったものと考えたい。

井戸

井戸は、丘陵の南側で検出された。地上での検出形は、円形で地表面に施設は検出できなかった。規模は、地上面での直径125cm、深さ225cmである。底部も円形を呈しており、直径50cmである。井戸は、廃棄のため、埋め土したものであり、その後、一度90cm位のところまで掘り、井戸として再利用した後その後は、自然に流入土により埋まったものと考えられる。

出土遺物は、2次堆積の土層から石臼が出土しているものの、明確な時代を決定する遺物は、検出することができなかった。

柱穴

柱穴と考えられるものは、総数52検出された。柱穴からの出遺物はなく、時期的なことが明確ではないが、南側の柱穴は、丘陵中央部に較べ、低いため土を盛っているものと考えられる。そのため、地山と同様な色調をした土を削るとその下から褐色の覆土の柱穴が検出された。柱穴にも時期差があるものと考えられる。

（2）水田面の調査

水田面は、7カ所調査区を設定して、調査した。第1、2、3、4、5調査区は、地質調査の関係で設定した。第6、7調査区は、切り通しの関連調査で調査を実施した。

第2調査区は、長辺7.5m、短辺1.5mのトレンチである。この部分は、近年の掘削によって造られた地形であることが、調査によって判明した。

第3調査区は、長辺8m、短辺2mのトレンチである。堆積した土がきれいに堆積しており、西側の山からの流れ込みの遺物が検出された。また、後で記述する池の痕跡が見える境となる部分であることが判明した。

第4調査区は、2m×2mの調査区で、87cmの部分に池の底部と考えられる細かな粘土層の堆積部分が検出された。

第5調査区は、2m×2mの調査区で、水田の耕作土の下は、黒色粘土層であり、堆積した土層であることは明白であり、土層中から、ある程度の水深を有する池に繁茂する菱の実が検出された。しかし、池の底部を現す土層は検出できなかった。

第6調査区は、6.7m×2mの調査区で、第2調査区と第3調査区を繋ぎ、第3調査区で明確となった池の底部がどのように続くかあるいはおわるのか明確にするため、設定した。この調査区により、池の所在した西側の範囲と池の下から検出された陶器によって少なくとも、検出された底部は中世の雲樹寺創建まで遡ることはないことが明確となった。詳細は、山陰地域研究12に譲る^(注)。

第7調査区は、切り通しの確認調査のため、長辺8m、短辺1mの調査区を設定して調査を実施した。明確な痕跡を確認することはできなかった。

第8調査区も同様に、切り通しの確認調査のため、長辺5m、短辺1mの調査区を設定して調査を実施した。しかし、明確な痕跡を確認することはできなかった。

第9調査区からは、切り通しの北側の肩部を確認した。長辺3m、短辺1mの調査区を設定して調査を実施した。ここからは南部分の100cmの部分で確認できた。昭和40年代に切り通しの改修があり、その部分の掘り下げがなされたとのことであるが、土層に状況から当初のものと考えられる。

(注) 慶岡隆夫等 1996年「安来市雲樹寺、『千才池』伝承の検討」

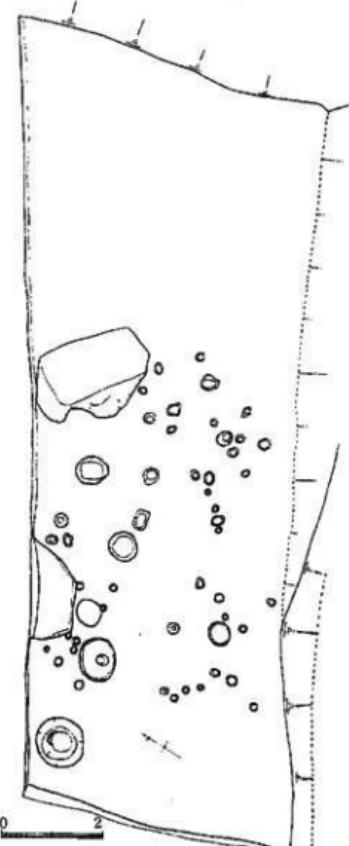
遺物について

五輪塔片（第296図1）

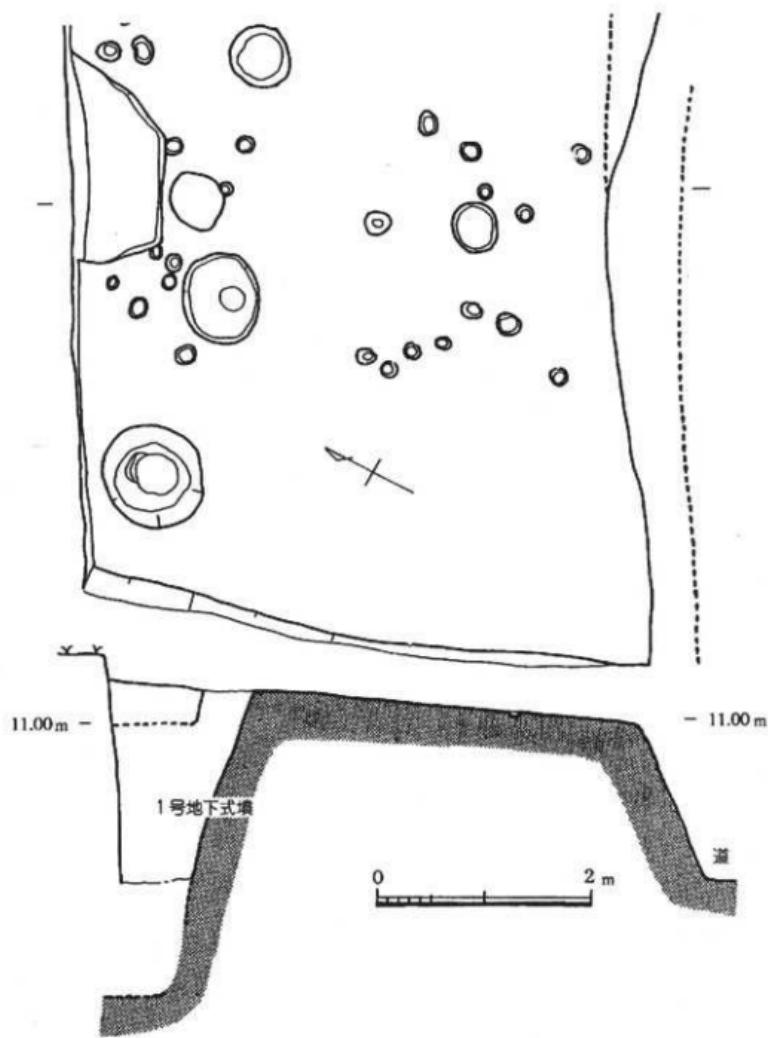
第1竪穴土坑の中央の床面から倒立した状態で出土し淡灰色を呈する凝灰岩製の石影物である。この五輪塔片には、風輪の上部分に稜線がある、塔空・風輪の断面が橢円形に造られている等の特徴がある。風輪の上部分は稜線で長径17cm、短径13cmである。総長は、火輪へ差し込む為造られた出っ張りの1.5cmを含めて20cmである。風輪の頂上部分は僅かに尖っている。梵字は施されていなく、塔空と風輪部分も浅いV字の沈線で区している等、粗雑に製作されている感がある。これは、(第287図2)と類似する。

石臼（第296図2）

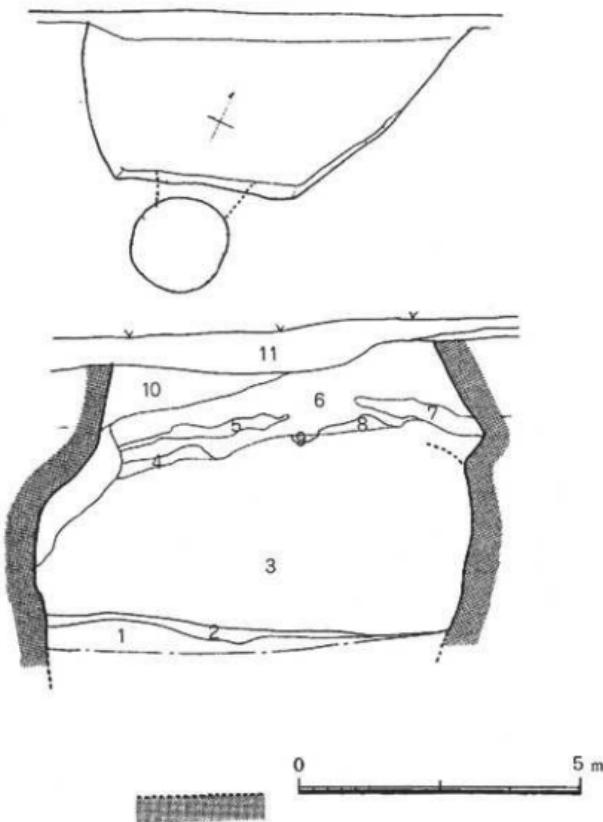
井戸から出土した石臼は、淡褐色を呈する凝灰岩製である。石臼は二つの石を重ね合わせて穀物を粉にしたりするために使用したもので、出土したものは、石臼の上部分の石である。それは、穀物を下の石と摺り合わせるために、落とす穴や回る為に木の軸を差し込んだと考えられる穴もあることから判断された。その上面は、穀物が回している時に落ちないよう周辺部分が高くなっている。下面は、ほぼ平面であり、使用にされていたための摩滅が確認できる。直径30cm位の石臼と考えられ、石臼の外側端部の厚さ9cm、中央部分の厚さ6.5cmである。



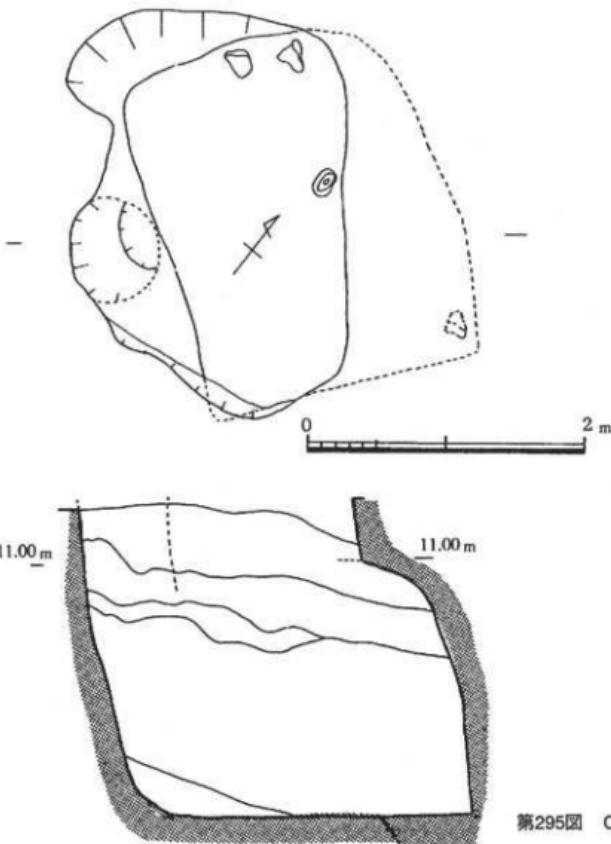
第292図 C区検出遺構分布図



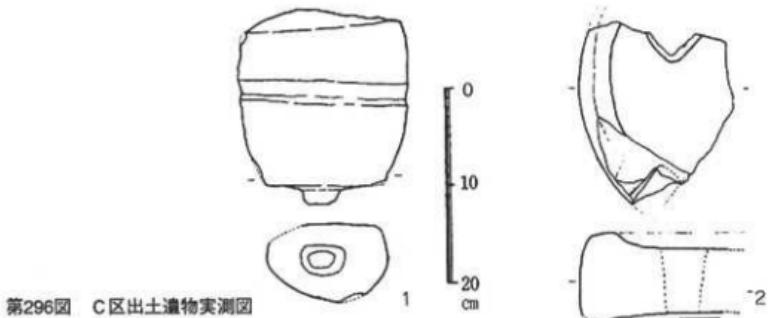
第293図 C区1号地下式土坑周辺図



第294図 C区1号地下式土坑実測図



第295図 C区2号地下式土坑実測図



第296図 C区出土遺物実測図

安来市大日堂遺跡近世墓から検出された人骨の概要

鳥取大学医学部解剖学第二講座

井上貴央、影岡優子、土井浩二、亀崎豊美

1.はじめに

本報告は安来市大日堂遺跡近世墓から検出された人骨の概要を報告するものである。

総数82体に及ぶ人骨が検出され、学術的価値が高いが、紙面の制約からその概要を述べるにとどめる。

2.近世墓の人骨の概要

東28号墓 骨の保存状態は非常に悪く、骨片と歯牙のみ検出されている。検出された歯牙は21本で、風化によって歯根は破損し、ほとんどが歯冠のみとなっている。これらの咬耗度はMartinの0度であるため、この個体は若年者であったことが推察される。

東42号墓 前頭骨、左右側頭骨、後頭骨、右側頭骨、左錐体、上顎骨が検出されている。三主縫合は内板では閉鎖しているが、外板では一部閉鎖している。乳様突起と外後頭隆起はよく発達している。熟年後半男性のものと考えられる。

東43号墓 頭蓋骨は右側頭部を欠くのみで、ほぼ完形である。前頭部は膨隆しており、眉弓・眉間は著明でなく乳様突起も小さい。三主縫合は、内板では冠状縫合の一部は癒合閉鎖しているが、残りは未閉鎖で、外板はいずれも未閉鎖である。上顎歯は残りが少ないが、咬耗度はMartinの1~3度である。下顎歯の咬耗度はMartinの0~3度である。壮年女性と考えられる。

東44号墓 後頭骨、左右側頭骨の一部、上顎骨、下顎骨その他細片化した頭骨が検出されている。三主縫合の矢状縫合、人字縫合は内板は癒合閉鎖をきたしており、外板では未閉鎖である。上顎、下顎とともに歯牙は一部釘植しており、咬耗度はMartinの3度である。下顎は頑強である。また外後頭隆起は軽度に発達し、乳様突起は中等度に発達している。熟年男性のものと考えられる。

東45号墓 検出されているのは、左右の寛骨片、大腿骨、脛骨片、頭蓋骨片のみである。寛骨片の耳状面は凹凸が多く、妊娠溝が認められる。大坐骨切痕は破損しているものの広いようである。成人女性骨である可能性が高い。

東46号墓 頭蓋は顔面頭蓋、左右側頭骨、右頭頂骨の一部が残存しているが、ほかは細片化している。三主縫合は内板が閉鎖しており、外板も閉鎖が進んでいる。前頭縫合の残存が認められる。頭蓋骨は全体的に大きい。歯牙の咬耗はMartinの1~2度で、四肢骨は頑丈である。本人骨は壮年後半~熟年の男性骨と考えられる。右下位肋骨が癒合をきたしている。

東48号墓 頭蓋骨は破損が大きいが、右側頭骨、左右頭蓋骨片、前頭骨、後頭骨片が残存している。

前頭部は膨隆しており、眉弓と眉間の突出は認められない。乳様突起も小さい。内板の縫合は部分的に癒合しているが、まだ残存している。外板も癒合が進行しているようである。歯牙はMartinの2度である。壮年後半の女性であると考えられる。

東49号墓 頭部は右側頭部の一部を欠いているがほぼ完形である。前頭部の膨隆は著明で、眉弓眉間も軽度に突出しており、乳様突起はよく発達している。三主縫合は内板・外板ともに未閉鎖である。口蓋縫合では切歯縫合は閉鎖しており、横口蓋縫合は外側部が閉鎖している。頬骨弓は非常に薄く、細い。歯牙の咬耗度はMartinの1~2度で歯式は以下の通りである。壮年女性と考えられる。

東50号墓 前頭骨、左右頭頂骨、後頭骨、左右側頭骨、上顎骨が検出されている。三主縫合は内板では癒合閉鎖をきたしているが、外板では未閉鎖である。上顎歯は左第3大臼歯を除いてすべて釘植しており、歯牙の咬耗度はMartinの1度である。項面のレリーフは粗造であるが乳様突起は小さく、また、寛骨の大坐骨切痕が大きい。青年後半~壮年前半女性のものと考えられる。

東51号墓 頭蓋骨は顔面頭蓋と左右の側頭骨と左右の頭頂骨が検出されている。前頭部は膨隆しており、眉弓は軽度に発達している。乳様突起は小さく、頬骨弓は薄い。

三主縫合は内板では閉鎖しており、外板では未閉鎖であるが癒合は進行している。頭蓋骨内には、矢状縫合の両側に直径5mm~8mmの陥凹が数個認められた。上顎の歯槽はすべて閉鎖し、下顎には3本の歯牙が釘植しているのみである。両側犬歯に楔状欠損が認められる。胸椎~腰椎の一部に癒合が認められる。熟年前半の女性と思われる。

東52号墓 頭蓋骨は完形である。前頭部は膨隆しており、眉弓と眉間はよく突出している。乳様突起も大きく、項面のレリーフは粗造である。三主縫合は内板では閉鎖しており、外板でも人字縫合の外下部を除けば閉鎖している。上顎の歯槽はすべて閉鎖しており、下顎は右犬歯、左右の第1・第2小白歯が残存しているのみで、ほかはすべて閉鎖している。老年男性であると思われる。

東53号墓 頭蓋は顔面部~前頭部、右側頭部、頭蓋底を欠く。三主縫合の外板は未閉鎖であるが内板は癒合閉鎖が進んでいる。乳様突起は中等度に発達し、項面のレリーフも著明である。上・下顎は検出されていない。上肢骨や脊柱は残っていないが、寛骨以下の主要下肢骨は検出されている。寛骨の大坐骨切痕は大きく、大腿骨、脛骨は華奢である。人骨は表土から比較的浅いところに埋葬されていたようである。埋葬時は頭を南に置き、体幹を北北東方向に向け、両膝関節を折り曲げて大脚部を胸部近くまで曲げた姿勢で埋葬されていたものと考えられる。熟年女性と推察される。

東54号墓 顔面頭蓋と左右側頭骨が検出されている。冠状縫合の内板は癒合閉鎖をきたし、外板も随分癒合閉鎖が進んでいる。骨口蓋の切歯縫合と横口蓋縫合外側部は消失している。眉弓が突出しているが、前頭部の膨隆は著明で骨質も薄い。大坐骨切痕は大きく、熟年女性と考えられる。

中14号墓 前頭骨の一部、右頬骨、右側頭骨の一部が検出されている。冠状縫合、矢状縫合の内板

は、一部が癒合閉鎖しているが外板は閉鎖していない。歯牙の咬耗は Martin の1度である。眉弓、眉間隆起は発達が悪いが、総合的に判断して青年後半～壮年後半の男性骨と考えられる。

中15号墓 左側頭骨と左蝶形骨の一部、左頭頂骨の一部、右椎体が検出されている。

人字縫合は内板・外板ともに癒合閉鎖している。乳様突起は発達している。熟年～老年の男性と推定される。

中16号墓 頭蓋骨は破損しているが、ほぼすべての部分が残存している。前頭部は膨隆が小さく、眉弓と眉間は中等度に発達している。乳様突起は破損しているが、よく発達しているようである。

三主縫合は冠状縫合の内板は癒合閉鎖が進んでいるが、ほかの縫合は閉鎖したばかりである。歯の咬耗度は Martin の1～2度である。壮年前半の男性と考えられる。

中17号墓 頭蓋はほぼ完形である。三主縫合の内板では冠状縫合が癒合閉鎖しており、矢状縫合、人字縫合は部分的に閉鎖している。外板は未閉鎖である。上顎歯は数本検出されている。上顎歯の大部分とすべての下顎歯は脱落し、歯槽は閉鎖している。

眉弓、眉間隆起は著明で、乳様突起や外後頭隆起は発達しており、項面のレリーフも粗造である。壮年後半～熟年前半の男性と考えられる。

中18号墓 頭蓋骨は断片化しており、前頭骨、後頭骨、左右側頭骨、頭頂骨の一部、左頸骨が検出されている。骨は重厚で、前頭部はなだらかに頭頂部に続いており、眉弓と眉間は非常によく発達している。乳様突起も大きい。残存している縫合をみると、人字縫合では内板は癒合閉鎖をきたしており、外板も癒合がかなり進行している。

歯牙は下顎歯のみが検出されており、咬耗度は Martin の3度である。熟年男性と考えられる。

中20号墓 後頭骨、右頭頂骨、右側頭骨、前頭骨の一部、右上顎骨、下顎骨が検出されている。上顎骨、下顎骨に一部の歯牙が釘植し、歯牙の咬耗は Martin の2～3度である。三主縫合はいずれも内板は閉鎖しているが外板は未閉鎖である。眉弓、眉間の隆起は軽度に発達している。外後頭隆起はよく発達しており、乳様突起も中等度に発達している。下顎骨も大きい。壮年の男性と推察される。

西2号墓

上：頭蓋骨は後頭骨、左右側頭骨、上顎骨、下顎骨などの一部が検出されている。三主縫合は人字縫合の一部が検出されており、内板は消失、外板は縫合閉鎖をきたしている。歯牙は上顎骨で5本、下顎骨で6本釘植しており、一部ではエナメル質減形成が認められる。咬耗度は Martin の3～4度である。乳様突起は中等度に発達しており、外後頭隆起は突出している。熟年男性と考えられる。

下：骨の保存状態は悪く、残存している骨は少ない。頭蓋骨も破損が大きいが、前頭骨片、頭頂骨片、左右側頭骨片および下顎骨が検出されている。残存している冠状縫合は内板が消失し、外板は癒合閉鎖が進行している。また眉弓と眉間の突出はほとんどなく、下顎骨では切歯と犬歯以外の歯

槽は閉鎖し、退縮している。検出された寛骨は大坐骨切痕が大きく、熟年女性と考えられる。

西4号墓 後頭骨、左右側頭骨、上顎骨などの一部と下顎骨などが検出されている。

三主縫合は内板・外板ともに閉鎖している。歯牙は上顎骨、下顎骨に1本ずつ釘植しており、咬耗度はMartinの3度である。乳様突起は大きく、外後頭隆起は突出しており、項面のレリーフは粗造である。熟年男性と推察される。

西5号墓 頭蓋骨は顔面頭蓋と左右側頭骨、後頭骨などが検出されている。前頭骨の前頭部は膨隆している。また眉弓と眉間の発達は中等度である。乳様突起は大きい。

骨は重厚で、項面のレリーフは粗造である。三主縫合の内板は消失しており、外板では縫合線は残っているものの、癒合はかなり進行しているようである。また外板においては、前頭縫合の遺存が若干認められる。歯牙の咬耗度はMartinの3~4度である。

熟年男性と考えられる。

西6号墓 右頭頂骨、左右雑体、後頭骨、頭骨片が検出されている。全体的な印象から女性骨をうかがわせる。年齢は特定できない。

西8号墓 頭蓋骨は底部が欠損しているが、ほぼ完形である。眉弓と眉間は突出しており、前頭結節が膨隆している。乳様突起はよく発達している。三主縫合では冠状縫合の内板はほぼ消失しており、外板では癒合が進行している。矢状縫合と人字縫合の内板は閉鎖が進行しており、外板は未閉鎖である。また、切歯縫合と横口蓋縫合は消失している。歯牙の咬耗度はMartinの3度である。寛骨の大坐骨切痕は小さく、壮年後半~熟年前半の男性骨と推察される。

西10号墓 顔面頭蓋と前頭骨、右頭頂骨、左右側頭骨とほぼ完形の下顎骨が検出されている。冠状縫合、矢状縫合は内板は癒合閉鎖をきたし、外板も閉鎖が進んでいる。

乳様突起は中等度に発達している。眉間隆起と眉弓も軽度に膨隆している。また、下顎骨も大きい。歯牙にはエナメル質減形成が認められ、咬耗はMartinの1~2度である。上顎には右側切歯、右第2・第3大臼歯、左第3大臼歯を除く歯牙が釘植している。下顎歯は左右第3大臼歯、左第1小白歯以外はすべて検出されている。壮年後半で、性別は男性をうかがわせるが確言できない。

西13号墓 頭蓋骨は細片化しているが、乳様突起は発達している。冠状縫合の外板は未閉鎖であるが、内板は閉鎖している。歯牙の咬耗度はMartinの3~4度である。大腿骨は太いが骨皮質は薄い。年齢は熟年後半~老年と推察される。性別は女性をうかがわせるが確言できない。

西15号墓 骨の保存状態は極めて悪く、頭蓋骨片、大腿骨片と指骨のみ検出された。

これらの骨は成人骨であることは確かだが、詳細は不明である。

西16号墓 左右雑体と頭蓋骨片、歯牙片が検出されているのみである。歯牙は歯根が未完成である。15歳程度の個体と推定される。

西17号墓 頭蓋骨と長幹骨片のみ検出されており、頭蓋骨片は非常に薄くて小さく、前頭骨片には前頭縫合が認められる。乳児骨と考えられる。

西18号墓 頭蓋は細片化している。上顎の骨口蓋の切歯縫合と横口蓋縫合外側部は一部消失しており、上顎歯、下顎歯ともに咬耗度はMartinの2~3度である。下顎骨は頑強である。壮年後半~熟年前期の男性と思われる。

西19号墓 左側頭骨、右鎖体、後頭骨、その他頭蓋骨片が検出されている。三主縫合は内板は癒合閉鎖、外板は一部で癒合閉鎖をきたしている。乳様突起は発達しており、後頭隆起も著明で、熟年男性骨と考えられる。

西21号墓 頭蓋骨は頸頂骨片が検出されているのみである。この骨質は薄く、また検出された大腿骨は華奢であり女性をうかがわせる。歯牙も歯冠部分のみが5点程出土しており、咬耗度はMartinの2度である。年齢は壮年~熟年と考えられる。

西23号墓 骨の保存状態が非常に悪く、骨片が数個検出されただけである。頭蓋骨は側頭骨と後頭骨部分の骨片しか存在していない。この骨が成人骨であることは確かだが、詳細は不明である。

西25号墓 頭蓋骨は左右の側頭骨、上顎骨の一部、頭蓋底部を欠くが、残りはほぼ完形である。前頭部の膨隆は著明で、眉弓と眉間の突出は発達していない。三主縫合の内板と外板は、すべて閉鎖している。歯牙の咬耗度は1~2度である。熟年女性と考えられる。

西27号墓 骨の保存状態が非常に悪く、残存している頭蓋骨は側頭骨片と上顎骨片のみである。また、側頭部の内板には直径1cm程の陥凹が認められる。歯牙の咬耗度はMartinの1~2度である。骨の厚さが薄く女性骨をうかがわせるが確言できない。年齢は壮年~熟年と考えられる。

西29号墓 頭蓋骨は前頭骨の右側の一部を欠くが、ほかは完形である。前頭部は膨隆せず、眉弓は軽度、眉間は著明に突出している。乳様突起は中等度に発達し、後面のレリーフは粗造である。三主縫合の内板はいずれも閉鎖しているが、外板では未閉鎖の部分もある。歯牙は8本検出され、咬耗度はMartinの2~3度である。エナメル質減形成が認められる。熟年後半~老年男性と考えられる。

西31号墓 顔面頭蓋、前頭骨、後頭骨、左右側頭骨、左右頭頂骨片が検出されている。

冠状縫合は内板・外板とともに癒合閉鎖している。人字縫合では内板は完全に閉鎖し、外板も一部を除いて癒合している。切歯縫合、横口蓋縫合外側部、正中口蓋縫合L.I.蓋骨部も一部閉鎖している。

乳様突起は良く発達しており、外後頭隆起も突出し、項面のレリーフは粗造である。眉弓も軽度突出している。大坐骨切痕は狭い。熟年男性と考えられる。

西33号墓 頭蓋骨では下顎骨の一部と歯牙が検出されているのみである。歯牙は9点検出されているが咬耗が進んでおり(Martin 2~3度)、熟年程度の個体と思われる。下肢骨では左大腿骨と脛骨が検出されている。年齢は熟年程度と考えられる。性別は下肢骨の大きさから女性をうかがわせるが、

確言できない。

西34号墓 左側頭骨の一部、その他頭蓋骨片、上顎骨片、長軸骨片、左鎖骨片、左肩甲骨片と歯根が未完成の永久歯を含む歯牙が33本検出された。歯牙の咬耗度はMartinの1度で、歯根の形成状況から10~13歳頃の小児であると考えられる。

西37号墓 頭蓋骨は細片化しており、その特徴をうかがい知ることはできない。四肢骨の破損も大きいが、下肢骨は太くて頑丈で筋の付着面が非常に発達している。成人男性骨と考えられる。

西38号墓 骨片と歯牙4本が検出されているのみで、歯牙は乳白歯2本と永久歯の大臼歯が2本である。第1大臼歯の歯根の石灰化状況から、本人骨は5~7歳の小児骨と推察される。

西39号墓 頭蓋骨は、右側は側頭骨の一部を残し欠落している。上顎及び左右頸骨を欠く。三主縫合は外板、内板ともに閉鎖しており、年齢は老年と思われる。乳様突起は欠損していて認められないが、骨質は薄く、前頭の膨隆は著明であることから判断して、女性の頭蓋であると推定される。下顎は左右後部を欠く。すべての歯牙は脱落し、歯槽は閉鎖をきたしている。

西41号墓

上：頭蓋骨は左頭頂部、頬骨、右頭頂部及び後頭部の一部が欠損しているが、ほかは残存している。骨は重厚で頑強である。前頭部はなだらかで、眉弓と眉間は良く発達している。乳様突起も大きく、項面のレリーフも粗造である。冠状縫合と人字縫合は一部が確認できるのみであるが、内板は閉鎖しており、外板も閉鎖がほぼ完了している。歯牙は2本のみ検出されており、咬耗度はMartinの2度である。寛骨の大坐骨切痕は小さい。熟年後半~老年の男性と考えられる。

下：頭蓋底部は残存しているが、その他は細片化している。乳様突起は小さく、項面のレリーフは比較的粗造である。切歯縫合は消失しており、歯牙の咬耗度はMartinの2~3度である。また、歯にはエナメル質減形成が認められる。四肢骨は保存が悪く破損が大きいが、華奢である。総合的に判断して、熟年女性ではないかと考えられるが、確言できない。

西43号墓 頭蓋骨は破損が大きい。乳様突起は小さく、眉弓も発達していない。骨質は薄く、全体的に頭蓋の大きさが小さい。三主縫合は内板、外板とともに未閉鎖である。歯牙の咬耗度はMartinの1~2度である。寛骨の大坐骨切痕は大きく、壮年前半の女性と考えられる。

西44号墓 頭蓋骨は細片化している。乳様突起は小さい。矢状縫合の内板は消失しており、外板も閉鎖が進行している。上顎歯の咬耗度はMartinの3度で、下顎骨の歯槽は、一部を除いてすべて閉鎖している。熟年の個体で、性別は女性をうかがわせるが確言できない。

西45号墓 頭蓋骨は後頭骨を除き、ほぼ完形である。全体的に大きく、眉弓、眉間の発達もよい。前頭部の膨隆は著明ではない。乳様突起は中等度に発達している。三主縫合は内板はすべて閉鎖している。外板では矢状縫合がほぼ閉鎖している。歯牙は第3大臼歯以外は揃っており、咬耗度は

Martinの3度である。熟年前半の男性と思われる。

西46号墓 前頭骨、左右頭頂骨、右側頭骨、左顎体が検出されている。遊離歯も多数検出されている。三主縫合の内板、外板は閉鎖しかけている。前頭部は膨隆し、骨質は薄い。歯牙には軽度のエナメル質減形成が認められる。歯牙の咬耗度はMartinの1度である。壮年女性と推察される。

西47号墓 顔面頭蓋は形を保って残存しているが、脳頭蓋部分の骨は、左右側頭骨を除いて細片化している。全体的に華奢で、前頭部の膨隆や眉弓と眉間の突出は中等度である。乳様突起は小さい。冠状縫合の内板は閉鎖しかけており、外板は未閉鎖である。歯牙の残存は悪く、歯槽が閉鎖している部分も多い。壮年女性と思われる。

そのほか小児のものと思われる前頭骨と歯牙が検出されており、歯牙は乳白歯1本と永久歯の歯冠が5個検出されている。

西48号墓 左大腿骨、左脛骨、左腓骨、上腕骨が残存しているのみで、大腿骨の粗線や粗面は比較的発達している。歯牙は4本検出されており、咬耗度はMartinの3~4度で、エナメル質減形成が認められる。骨は熟年~老年の骨であると考えられるが、性別は特定できない。

西49号墓 頭蓋の後頭部と底部を除いてほとんど検出されている。冠状縫合の内板は閉鎖し、外板は閉鎖が進んでいる。矢状縫合の内板は一部閉鎖し、外板は癒合は進んでいるが未閉鎖である。

乳様突起は小さい。歯牙にはエナメル質減形成が認められ、咬耗度はMartinの2~3度である。壮年女性と推定される。

西50号墓 骨の保存状態は悪く、頭蓋骨は細片化している。冠状縫合は内・外板とともに閉鎖している。眉弓の発達は悪く、骨質は薄い。下顎骨は歯牙が脱落し歯槽が吸収閉鎖している。下肢骨は華奢で熟年~老年の女性骨と推察される。

西51号墓 頭蓋は左側頭部を欠くが、ほかはほぼ完存している。三主縫合は、内板は閉鎖をきたしているが、外板は一部が未癒合の状態である。乳様突起と眉弓と眉間の膨隆は中等度で、外後頭隆起は突出し、項面のレリーフはやや粗造である。前頭部は膨隆していない。歯牙の咬耗はMartinの2~3度である。大坐骨切痕は大きく、第1肋骨には骨化が認められた。熟年女性と推定される。

西52号墓 頭蓋骨は破損しているが、前頭骨、側頭骨片、上顎骨が残存している。前頭部は膨隆し、乳様突起は小さく、眉弓は発達しない。縫合は口蓋縫合が確認できるのみである。歯牙はあまり咬耗していない(Martin 1~2度)。第3大臼歯は萌出している。大坐骨切痕は大きく、壮年後半の女性と推察される。

西53号墓 頭骨は細片化しており、右側頭骨、前頭骨、頭頂骨などが検出されている。三主縫合の内板は閉鎖しており、外板は未閉鎖である。前頭部の膨隆は著明で、乳様突起は中等度に発達している。下顎歯は左第1小臼歯、左第1、第2大臼歯が釘植しており、上顎は左第1、第2小白歯、左第1

大臼歯が上顎片に釘植して検出されているが、そのほかは遊離歯として検出されている。エナメル質減形成が認められる。歯牙の咬耗度はMartinの2~3度である。大脛骨や上肢骨は太いが短い。筋の付着する粗面は粗造である。壮年後半の女性と推察される。

西54号墓 骨の保存状態は悪く、大脛骨と前頭骨片、側頭骨片しか検出されていない。前頭部は比較的膨隆しており、眉弓と眉間も軽度に発達している。冠状縫合の内板は完全に閉鎖している。外板でもかなり癒合が進行している。歯牙は大臼歯4点、小白歯1点が検出されており、咬耗度はMartinの2~3度である。頭蓋骨内面には直径5mm程の陥凹が認められた。壮年後半~熟年女性と考えられる。

西56号墓 前頭骨、右側頭骨、左蝶体、左右頭頂骨などが検出されている。

三主縫合は内板、外板ともに癒合閉鎖をきたしている。また、乳様突起は中等度に発達し、外後頭隆起も発達しており、熟年男性の個体ではないかと思われる。

西57号墓 検出入骨は少なく、頭蓋骨は細片化している。前頭部は膨隆しており、眉弓は平坦である。乳様突起は小さい。冠状縫合の内板は閉鎖が進行しているが、外板は未閉鎖である。歯牙の咬耗度はMartinの1~2度である。下顎歯にはエナメル質減形成が認められる。壮年女性と考えられる。

西58号墓 骨の保存状態は非常に悪く、ほとんど残存していない。頭蓋骨は後頭骨片、側頭骨片などが検出されたのみである。成人骨であるのは確かだが、性別は特定できない。

西59号墓 大脛骨片と寛骨片が検出されているのみで、詳細をうかがい知ることはできない。成人骨であることは確かである。

西61号墓 前頭骨、左右側頭骨、下顎骨と細片化した頭骨が検出されている。冠状縫合の内板は消失しており、外板ではほぼ閉鎖をきたしている。矢状縫合と人字縫合では内板は閉鎖しているが、外板は未閉鎖である。眉弓と眉間の隆起は著明であり、乳様突起も発達している。下顎骨も大きく、頑強である。歯牙の咬耗度はMartinの3~4度である。この個体は熟年男性と思われる。

上記の個体とは別に、さらに一体分の頭蓋骨が検出されている。右側頭骨片、頭頂骨片など細片化した骨のみ数点と下顎骨が検出されている。下顎歯の咬耗度はMartinの3~4度である。残存している縫合を見る限り、内板は外板とともに閉鎖が進んでいる。熟年の個体と考えられるが、性別は特定できない。

西62号墓 前頭骨と右側頭骨片、下顎のみ検出されている。冠状縫合は内板は癒合閉鎖をきたしているが、外板は一部閉鎖している。前頭部の膨隆は著明で、四肢骨も細くて短い。下顎骨は小さく、歯牙にはエナメル質減形成が認められ、咬耗度は2~3度である。熟年後半の女性であると思われる。

西63号墓 骨片と歯牙のみ検出されており、小児と思われる頭蓋骨片が検出されている。乳臼歯が存在し、永久歯の歯冠は完成している。小児骨であると推察される。

西64号墓 左半分を欠く脳頭蓋と左錐体が検出されている。三主縫合はいずれも内板は閉鎖しており、外板は入字縫合ではまだ閉鎖していない。乳様突起はよく発達しており、眉弓と眉間の膨隆も著明で、下顎は大きい。歯の咬耗は Martin の2~3度である。熟年後半~老年男性と思われる。

西66号墓 頭蓋骨は前頭骨、左右頭頂骨、後頭骨の一部と左右側頭骨片が検出されている。

前頭部は膨隆しており、眉弓と眉間は発達していない。三主縫合は内板ではすべて消失している。外板も癒合が進行していて、ほぼ閉鎖しかけている。前頭縫合の残存が認められる。熟年女性と考えられる。

西67号墓 前頭骨、左右頭頂骨、後頭骨と左右側頭骨片が検出されている。前頭部の膨隆はほとんどなく、眉弓は軽度に発達している。三主縫合の内板はすべて消失しており、外板もほぼ消失している。熟年後半~老年男性と考えられる。

西68号墓 歯牙が5本検出されており、咬耗度は Martin の1~3度である。本人骨は成人骨であるが、年齢、性別は特定できない。

西69号墓 左右大腿骨、左右脛骨、上腕骨の一部が検出されている。骨は頑丈で大きく、男性骨をうかがわせる。成人男性と推測される。

西70号墓 上顎骨と下顎骨の一部が検出されている。歯牙も3本検出され、咬耗度は2~3度である。大腿骨は小さく女性骨と思われる。年齢は壮年~熟年としておく。

西71号墓 脳蓋は左側頭骨、前頭骨片、頭頂骨片、上顎骨片が認められるものの、破損が大きい。冠状縫合と矢状縫合の外板は未閉鎖であるが、内板では閉鎖している。

下顎骨は左右の一部が検出されており、若干の歯牙が釘植している。左第2大臼歯以降の歯槽は吸収閉鎖をきたしている。下顎骨は重厚である。歯牙の咬耗は Martin の2~3度である。上顎歯は右側では中切歯、側切歯、犬歯が、左側では中切歯と犬歯が残存している。左右の中切歯の近心側にはV字形の異常咬耗が認められ、また左右の側切歯にも異常咬耗が認められる。壮年後半の男性と推定される。

西72号墓 頭蓋骨は左右錐体、上顎骨、前頭骨、左右頭頂骨の一部、後頭骨片が検出されている。冠状縫合と矢状縫合の一部の内板は閉鎖し、外板も閉鎖が進行している。上顎歯が9本、下顎歯が8本釘植しており、咬耗度は Martin の3~4度である。乳様突起は発達していない。熟年後半の女性と推定される。

西73号墓 前頭骨、左頭頂骨、右頭頂骨の一部、左右側頭骨、上顎骨片と下顎が検出されている。三主縫合は内板では癒合閉鎖をきたしており、外板では癒合は進んでいるもの一部閉鎖をきたしていない。骨口蓋の切歯縫合は消失している。乳様突起は発達しているようで下顎骨も大きい。歯牙にはエナメル質減形成が認められ、咬耗度は Martin の3度である。熟年男性と考えられる。

西74号墓 頭蓋は完存し、脳頭蓋は右側頭骨片、後頭骨片、頭頂骨片と下顎骨が残っている。前頭部は膨隆し、眉弓と眉間の突出はあまり著明でない。頭蓋縫合は内板では閉鎖をきたし、外板でも閉鎖が進行している。また、前頭縫合の残存が認められる。歯牙は上顎、下顎ともに左上顎第3大臼歯を除き、すべて釘植している。咬耗度はMartinの1~2度である。壮年女性骨と考えられる。

西75号墓 頭蓋骨は前頭骨の一部、左側頭骨、右側頭骨の一部、後頭骨、上顎骨、下顎骨片が検出されている。三主縫合では内板は閉鎖しており、外板もほぼ閉鎖している。頭蓋骨の内側には陥凹が認められ、後頭骨の底部にも結節状の骨の隆起が認められる。眉弓と乳様突起は発達している。後頭部の外後頭隆起は突出し、項面のレリーフも粗造である。壮年後半~熟年男性と考えられる。

西76号墓 頭蓋は左側頭骨、後頭骨、左右頭頂骨などの一部を欠くが、ほかはほぼ完存している。冠状縫合と人字縫合の一部では内板・外板ともに閉鎖している。眉弓と眉間は突出しており、乳様突起も発達している。下顎骨は完存しており、ほとんどの歯牙が釘植している。歯牙の咬耗度はMartinの3度である。熟年男性と考えられる。

西77号墓 頭蓋は前頭骨、左右の頭頂骨と側頭骨、上顎骨片が検出されている。三主縫合は内板、外板ともに閉鎖している。前頭部はよく膨隆し、四肢骨は華奢である。

老年女性と推察される。

西78号墓 前頭骨、上顎骨、頸骨、左側頭骨、右錐体、右頭頂骨片、後頭骨片が検出されている。下顎骨も右側の一部を欠くが検出されている。冠状縫合は内板・外板ともに未閉鎖である。前頭部は膨隆しており、下顎骨は華奢である。大坐骨切痕は大きく、関節旁溝が認められる。歯牙の咬耗は進んでおらずMartinの1度である。壮年女性であると考えられる。

西79号墓 頭蓋は前頭骨の右側片、後頭骨、右側頭骨、左錐体、右頭頂骨が検出されている。三主縫合の内板は閉鎖しかけているが、外板は未閉鎖である。乳様突起は発達が悪い。下顎骨は左側の大部分を欠く。歯牙は右第1大臼歯以外は脱落して歯槽も閉鎖している。右第1大臼歯部では歯槽が退縮しており、臼歯の歯根部が露出している。咬耗はMartinの1度とあまり進んでいないが、歯牙の脱落が著明なことから高齢者をうかがわせる。四肢骨は華奢である。頭蓋は年齢算定の根拠となる部位が残存しておらず、年齢査定は困難であるが、熟年女性ではないかと考えられる。

西80号墓 頭蓋は頭蓋底と左頭頂骨の一部を欠くが、ほぼ完存している。眉間と眉弓の隆起は著明で、前頭部はそれほど膨隆しない。乳様突起と外後頭隆起はよく発達している。項面のレリーフは粗造である。三主縫合の内板は閉鎖しており、外板では矢状縫合は複合閉鎖が進んでいるが、冠状・人字縫合は未閉鎖である。前頭縫合が残存している。上・下顎とともに歯牙は半分ほど釘植しており、エナメル質減形成が認められる。歯の咬耗度はMartin 2~3度である。熟年男性と思われる。

3.埋葬肢位・埋葬方位などについて

埋葬肢位については表1にまとめたので、参照いただきたい。ほとんどすべてが座位による埋葬であった。人骨の検出状況を詳細に検討した結果、埋葬時にどちらを向いて埋葬していたかを大部分の近世墓で明らかにすることができた(図1)。なかでも、注目に値するのはA-1区西の北西に位置する近世墓である。北端の墓穴に埋葬された人骨は南側を向き、その南に位置する2~3列の墓穴に埋葬された人骨は西側を向いて埋葬されていたことが明らかになった。この方向性から墓道の存在が示唆される。詳細は紙面の都合で割愛するが別途機会をみて考察を加えたい。

今回検出された人骨の中には骨病変を示唆するものが多い。近世墓によく見られる疾病の骨も検出されているが、これについても別途機会をみて詳述したい。

4.おわりに

稿を終わるにあたり、本人骨の検討の機会を与えていただいた安来市教育委員会の関係各位、とりわけ人骨の図面作製、取り上げ、検討にあたってご協力いただいた金山尚志氏、安来市和鋼博物館の三宅博士氏に御礼申し上げる。

まとめ

これまで、安来市宇賀荘町所在の清水大日堂裏古墓群の調査の概要を述べてきた。調査は当初の予想を上回る多数の埋葬関係遺構などを検出した。以下若干の所感を記して、報告のまとめとしたい。

遺跡がある丘陵に立つと南には最寄りの清瀬の集落、その背後には中国山地の山並みが遠望される。一方、西に目を転じると、間に雲樹寺の森が、その向こうに安来の市境や中海、さらに島根半島の東部分が遠望される。この地は俗に「はかやま」とも称されていたが、遺跡名称ともなった「清水」は遺跡の北方2kmにある清水寺に因んだ通称名であり、「大日堂裏」とは丘陵の北麓の小さな仏堂に因るものである。さらに谷を隔てた北方の丘陵には「新御堂」の名もみえており、それらの名が示すように、今回の調査で明らかになった遺構群も、仏教的色彩の濃いものであった。

それら検出した遺構を、調査地区毎にまとめる以下のごとくなる。

A区丘陵では、斜面部と尾根上で検出したものとに大別される。斜面部のものとしては、北側と南側で、横穴を各1穴検出している。北側のものは後世の擾乱を受け、これに伴う遺物も認められなかった。南側で検出したものは、周辺の地盤が脆弱であったことから、天井部は崩壊し、多量の流入土が堆積していたものの、内部では埋葬当初の状況を確認することができた。この横穴の特筆すべきこととしては、前庭部が東西6.74m、南北9.17mと極めて大きいこととともに、北南両横穴の特徴は他例のように群を構成せず、単独で営まれたことであろう。

A区丘陵の尾根上で検出し遺構には、A I 東区1~32・34~54号墓、A I 中区1~37号墓、A I 西区1~80号墓、さらにA西81・82号墓、A II 区1~4などの埋葬遺構の他、礎石建物跡S B01などがある。

A I 東区で検出した土壙群のうち、仰臥伸展墓と推定される平面長方形のものは所属時期が弥生時代末から古墳時代に及ぶものであったが、これらの配置には、一定の傾向が認められた。つまり、埋葬位置が、尾根の中央にあって、土壙の主軸方位を尾根筋に直行させるか、あるいは沿わせている点が注意される。これらの中心的位置を占めるのが、11・10・9・8・7号墓であった。そのうち2・16・14・23号墓を例外として除けば一定のまとまりが認められる。それらの下限は20号墓の南西端で検出された土坑出土の土器が古墳時代前期末と考えられた。それに続くのが29~32・34~42・53号墓で、これらは、平面隅丸方形の掘方の土壙で、形態から坐位埋葬であったと推定される。いずれも、深さ1m未満と比較的浅い。埋葬時期は32号墓で、元豊通寶(北宗銭・1078年初鑄)が、また42号墓では政財通寶(北宗銭・1111年初鑄)があり、12世紀初頭を過らない頃と考えられた。ただし、各土壙の人骨の残存状態が極めて悪い中にあって、42号墓のみ人骨の残存状態が極めて良好であった。出土人骨による埋葬形態の復元の検討を依頼した井上先生の所見によれば、42号墓の埋葬形態

は近世墓の類例と大きく異なるところはなく、近世人骨であろうとされている。渡来鏡の伝世期間も含めて検討すべきことといえよう。近世墓は43~54号墓としたもので、土壙底部に人骨が認められ、残存状態は比較的良好であった。各土壙とも「寛永通寶」や国産陶磁器など、埋葬時期を示す副葬品がみられた。これらの分布をみると、中世墓は尾根の中軸線に沿って、近世墓は中軸線より北側の丘陵傾斜変換点付近にまで及び、その範囲は長径8m、短径6mに止まっていた。何故狭い範囲に密集させる必要があったのか注意されるところであった。また、A I 東区47号墓のように、被葬者の頭部を容器で覆う例が認められたことも興味深い事実といえよう。

A 中区では、計27基の埋葬施設を検出した。そのうち1~12号墓は仰臥伸展葬で、A 区東の仰臥伸展葬用の土壙よりやや細長い掘方となっている。A 区東の中央部の土壙と比較すると、前者が二段掘りであるのに対し、素掘土壙であるところが注意される。これらの土壙は副葬品は少なく時期の決定に耐える遺物は認められないが、6号墓上面の須恵器杯をこれに伴うものとすれば、9世紀代頃のものということができよう。

A 中13~20号墓は近世墓と考えられるもので、埋葬形態は坐位埋葬と判断された。整然と2列に並んでおり、いずれも配列が意識されていたことを窺わせた。ただ、これらの土壙には浅いもの、深いものとの二者があったことは、前述したA I 東区29号墓など比較的浅い土壙の所属時期と合わせ検討すべき内容といえよう。

S B01は、平面コの字形に廻らされた区画溝の中央で検出した、納骨堂と推定される建物跡である⁽³⁾。この建物の北辺及びA 西区の北方で、火葬骨を伴う土壙が集中して認められた。S B01がいつまで存続していたかは不明であるが、A 区中区の近世土壙が、SB01と重複を避ける形で配列されていることは重要であろう。S B01は、後述するA 西区をも含め一連の埋葬構造のなかにあって、象徴的建物であったことを窺わせた。そのなかの火葬墓で、注意したいのが中22号墓である。これは、S B01の東域を画す溝の壁に穿たれたもので、他の火葬墓とは趣を異にしている。ここで注意すべきは、溝の中に堆積した土に火葬骨が埋葬されていることである。これは、中22号墓の埋葬が、納骨堂としての機能を果たさないほど荒廃した時期に止む無くおこなった行為ではなかったかとも想像される。堂そのものが朽ちても、S B01が存在した区画に対する意識が存続していたことを窺わせた。

A 西区では、80基に及ぶ多数の土壙を検出した。この調査区は他に比較すると、極めて密度が高く、そのうち64基に人骨が残存していた。これらの土壙が掘り込まれている平坦面の下層には、石製五輪塔の部分が認められ、盛土を施して埋葬地が造成されたことが知られる。

ここで検出した土壙群からは、銭貨・煙管・鉄・櫛・鎌・剃刀・包丁・燐金・陶磁器など各種の副葬品が出土し、近世の多彩な葬送儀礼の一端が窺えた。これらの土壙には、鉄釘を全く伴わない

もの、伴っても数が極めて少ないものがかなり認められた。どのような構造の棺であったのか今後、検討を要す問題といえよう。⁽⁵⁾

A I 東、A I 中、A I 西の各調査区をおしていえることは、東に埋葬するに足りる空間があるにも関わらず、東から西に向かって密度を増していくことである。しかもA I 西区においては、埋葬のための造成まで行われていることから、西方城がかなり意識されていたことを窺わせている。

A II 区では、土壙、1~4号を検出した。これらは、平面隅丸方形を呈す比較的浅いもので、A 西81号墓やA I 東区29~32号墓と類似点が多い。副葬品も認められないことから、所属時期については、近世の土壙群とはかなりの距離をおいて掘り込まれており、群構成も異なることから、人骨が遺存する近世土壙よりも古いと推定された。

ところで、A 西区中央やや南よりで検出した土坑で、山陰の須恵器編年Ⅰ期に相当する須恵器及び土師器高杯を得ている。⁽⁶⁾ これと同様なものとしては、B 区1号墳の溝内出土の土器群がある。A 中区SB01と重複して認められた平面弧状を呈す溝内からも、同様な時期に属すとみられる土師器高杯が出土している。弧状に廻ったであろう溝は古墳の周溝の一端であったことが想定される。したがって、A 西区の山陰の須恵器編年Ⅰ期の土器群が出土した土坑は尾根筋にあった墳丘が削平され、溝内におかれていいた遺物がかろうじて残ったものと推定される。A II 区の西端にあった小円墳、さらに調査区外に連なる古墳も同様な時期に属すものと判断された。

B 区の調査では、一辺10mを測る方墳1基の他、中世と考えられる茶毬跡さらに多数の火葬墓、掘立柱建物跡、橋列跡、井戸跡などを検出した。このB 区で検出した遺構の大きな特徴は、多数の埋葬遺構のうちB 1号墳を除き、いずれも火葬に関わるものに限定されることであった。そして、それらが南側斜面に限定された形で存在していたことである。また、B 1号墳掘から出土した石製五輪塔の破片がA 中区の石製五輪塔の一部と接合ができたことは特筆すべき内容であった。これは、ある時期まで、B 区にあった石製五輪塔がA 区に移動されたことを思わせた。一連の遺構からみると、B 区には火葬墓、A 区では土葬墓（土壙）と火葬墓とが共存しており、遺物による両者の時期的相対関係は、B 区（古）～A 区（新）ということになろう。ただし、B 区の埋葬関連遺構が、A 区側斜面に限定されていることからすると、A 中区のSB01は既に存在し、両者は視覚的に見通せる場所に置く意図があったと考えられ、この点SB01が、遺跡内において扇の要的存在であったことを窺わせている。ところで、B 区出土の類例の少ない遺物として、陶製五輪塔がある。この遺物は今のところ、全国的な出土は10件と、きわめて少ないことが注意される。今後の類例をまって、この地方における採用の意味を考えいく必要もあるう。⁽⁸⁾

このように今回は、道路建設という丘陵の一部を対象とした調査であったにもかかわらず、弥生

時代末から古墳時代、さらに中世から近世にかけての極めて広範な時代幅の中で、埋葬遺構群を単位別にその輪郭を捉えることが出来た意義は大きい。A区で検出した納骨堂と推定したS B01のような例は県内でこそ少ないが、全国各地で中世に形成された納骨墓場の一例といえよう。⁽²⁾

今回明らかになった宗教的空间の形成に、清水寺、雲樹寺という山陰を代表する古刹が大きく影響したであろうことは、想像に難くない。古代は別にしても、中世～近世にかけての埋葬地として、占有され続けた理由もそこにあったといえよう。それに加え、近世の埋葬に関わる遺構で、遺存状態が比較的良好な人骨を多数検出した例は、市内はもとより、県内においても他に例を見ないものであった。良好な埋葬関係資料を得、被葬者の性別、年齢、副葬品とのセット関係も含め、近世農村集落内において究明されなければならない課題は多いことを記して、安来市宇賀荘町所在、清水大日堂裏古墓群の事実報告としたい。

参考文献

- (1) 平瀬據英「盆の先祖祭とナマボトケの問題」『仏教と民俗』2号（昭和33年）

「盆前に死にたる者には抱六(焙烙)を冠らせて葬る也。さるは途中にて聖靈に行き違う時に、我々は娑婆へ行くを、何とて冥土に来るぞといひて頭を叩く也。其時抱六無くては、頭を痛む也とぞ」『三河国吉田領風俗答書』を引用し、被葬者の頭に容器をかぶせる意味を説明している。ナマボトケが頭を叩かれたうえ、精霊の荷物役となる伝承は鳥取県八頭郡若桜町吉川の例が報告され、同様な伝承は国内に広範に分布している。遺跡での例として群馬県『下高瀬上之原遺跡』【関越自動車道(上越線)】地域埋蔵文化財発掘調査報告書第27集(平成6年3月)があることを津金沢吉茂氏の教示によって知った。

- (2) 柳浦俊一「出雲における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号(昭和55年)を参考にすれば8世紀後葉から9世紀後葉とされている。

- (3) 納骨堂に関する絵図として、『史跡称名寺境内庭園苑池保存整備報告』横浜市教育委員会(昭和55年)などがある。また奈良県元興寺極楽坊には、木製の小さな五輪塔や竹の筒を利用した納骨容器が保管されている。A区 S B01で検出した火葬骨片は同様な容器に納められていたものと推定される。

(4) A I 東区35号墓付近、及びA I 西区51号墓から出土した鉄製品は、鍛金と判断された。炭素量の分析を日立金属（株）安来工場付属冶金研究所と和鋼博物館佐藤豊副館長の協力を得ておこなった。広瀬町所在の富田八幡宮に江戸時代から伝世する鍛金も同時に分析し判断の基準とした。富田八幡宮のものはC 1.5~1.2%、片面はマルテンサイト、片面はパーライトとなつており、火花の出るところを選んで使用しているとのことである。

A I 東35号墓付近出土の鉄器はC 0. 06%となっており、焼き入れをすることは困難と判断した。A I 西51号墓出土の鉄器はC 1. 14%を測り、マルテンサイトの状態となっている。富田八幡宮のものと比較すると若干Cは低いが、鍛金として使用することは可能であったと推定される。

(5) 出雲市姫原町所在の姫原西遺跡(C区・平成8年度の調査)の埋葬例では、底は細木と竹を組み、蓮を敷き、厚さ5mmの備板を組み、釘を使用していないことを足立克巳氏の教示によって知った。この所属時期は16世紀代と考えられている。さらに、棺に釘を使用しない例として、御輿棺呼ばれるものがあり、その好例が『福正寺北遺跡群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第87集(平成2年)にあることを篠原芳秀氏の教示によって知った。

(6) 山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論文集』(昭和35年)

(7) B区1号墳出土の鉄劍について成分分析を行い、Cの含有量は0. 32~0. 38%で、焼入れは困難と判断された。また、バナジウム、チタンが認められないことから、岩鉄系の鉄原料であろうと推定された。

(8) 『陶製五輪塔』(財)元興寺文化財研究所 (平成7年10月)、『大畠・桧山腰窓跡』発掘調査報告書平成3年秋田県南外村教育委員会には13世紀中頃から後半にかけての窓跡の報告例がある。

(9) 藤沢典彦「日本の納骨信仰」『仏教民俗学体系』4 (昭和63年)

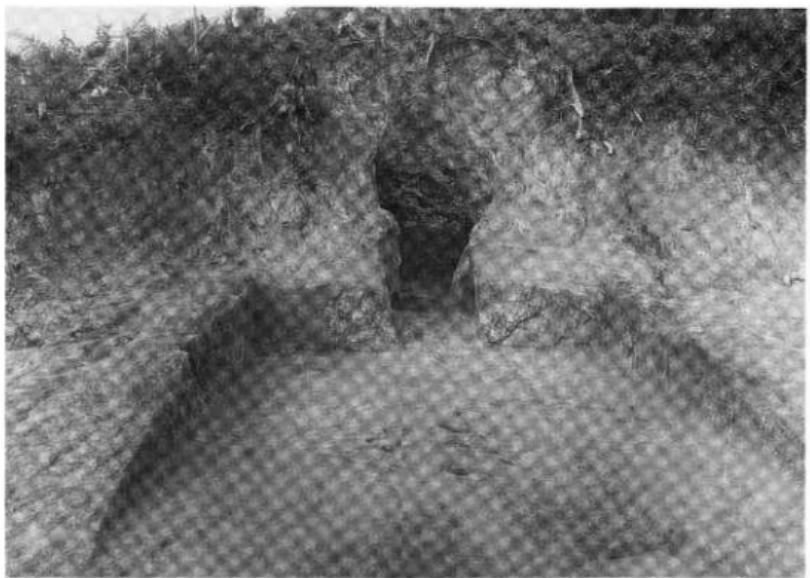
納骨五輪塔による寺院への納骨は、中世においてはなり普遍的に行われたとして、福島県合津八葉寺では現代もなお継続していることを紹介されている。



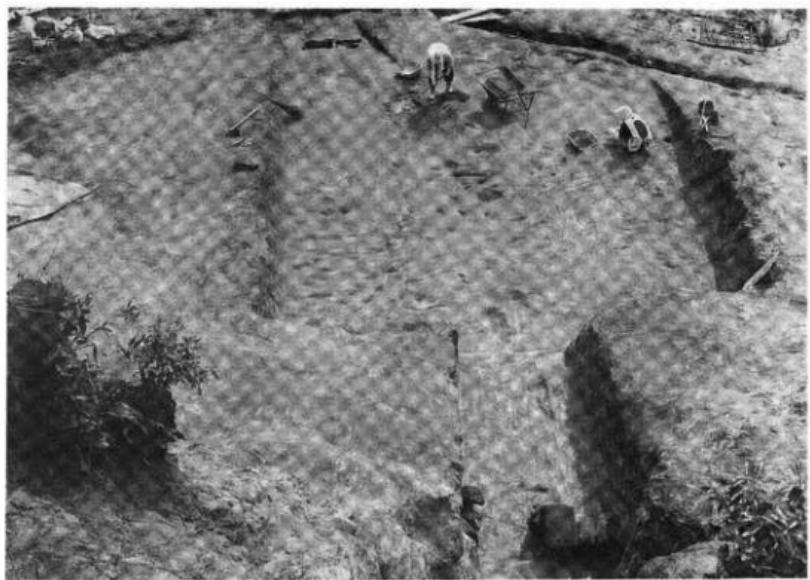
遺跡遠景（北方より）



B区近景（西方より）掘削頂部がB 1号墳



A区南横穴前庭部（南方より）



A区南横穴前庭部（A1区丘陵上より）